



アーバン・アドバンス

2010.02_No. **51**

[特集] 近世武家文化とまちづくり ～名古屋開府400年に寄せて～

特集テーマ論文

近世名古屋の賑わいと景観—名古屋開府400年と尾張徳川七代宗春をめぐって— ● 小池 富雄

名古屋城本丸御殿の魅力 ● 麓 和善

よみがえる熊本城—熊本城復元整備とまちづくり— ● 下田 誠至

彦根の歴史まちづくりにおける市民活動について ● 山崎 一真

歴史・文化・まちづくり分野のNPOネットワーク～「清須越400年事業ネットワーク」の事例～ ● 佐藤 允孝

名古屋発

2010年「名古屋開府400年祭」 ● 利國 浩象

名古屋都市センター事業報告

調査研究

まちづくりセミナー講演録「大学と地域との連携によるまちづくり」



特集

近世武家文化とまちづくり
～名古屋開府400年に寄せて～

2010.2_ No.51

A

B

A. 享元絵巻 (葛町の遊郭) 名古屋城管理事務所蔵

B. 享元絵巻 (大須観音 門前) 名古屋城管理事務所蔵

C. 享元絵巻 (遠景) 名古屋城管理事務所蔵

D. 東南隅櫓から見た焼失前の名古屋城本丸御殿全景 名古屋城管理事務所蔵

E. 名古屋城 遠侍 (玄関) 一之間 名古屋城管理事務所蔵

F. 熊本城 本丸御殿大広間

G. 熊本城 昭君の間

H. 名古屋開府400年ポスター

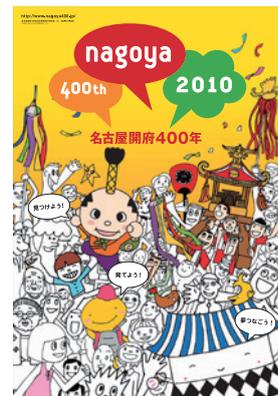
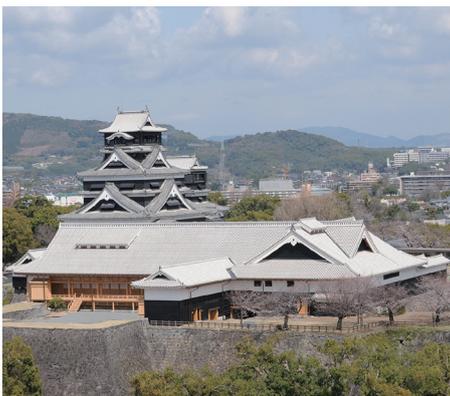
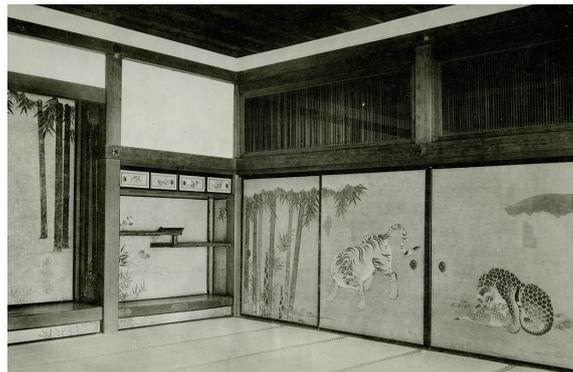
D

E

F

G

H



アーバン・アドバンス バックナンバーのご案内

号数	発行年月	テーマ
No.33	2004.03	都市計画システムの変革
No.34	2004.11	情報通信技術と都市の未来展望
No.35	2005.01	グローバル化と都市の未来展望
No.36	2005.03	環境重視と都市の未来展望
No.37	2005.11	変貌するすまい・まちづくり
No.38	2006.01	質の高い豊かな生活を生み出す環境づくり
No.39	2006.03	市民協働による安心・安全・快適なまちづくり
No.40	2006.10	都市内農地を活かした環境保全型まちづくり
No.41	2006.12	拠点開発と都市の変貌
No.42	2007.02	協働で作る地域・まち・都市
No.43	2007.06	地震への備え
No.44	2007.10	都市生活と健康
No.45	2008.02	子ども・学生とまちづくり
No.46	2008.06	都市の魅力と観光・交流
No.47	2008.11	物流とまちづくり
No.48	2009.02	都市型河川・運河の再生と都市の魅力づくり
No.49	2009.06	自転車の視点でみるまちづくり
No.50	2009.09	都市の水災害～伊勢湾台風から50年～

まちづくりに携わる広範な人々の論文、都市センターの研究成果、名古屋のまちづくり情報などを掲載(A4版、90ページ程度)。名古屋都市センターまちづくりライブラリーにて販売(バックナンバー有)。定価700円(本体価格667円)。賛助会員には無償配布。名古屋都市センターまちづくりライブラリー、名古屋市立図書館等にて閲覧可能。

次号予告



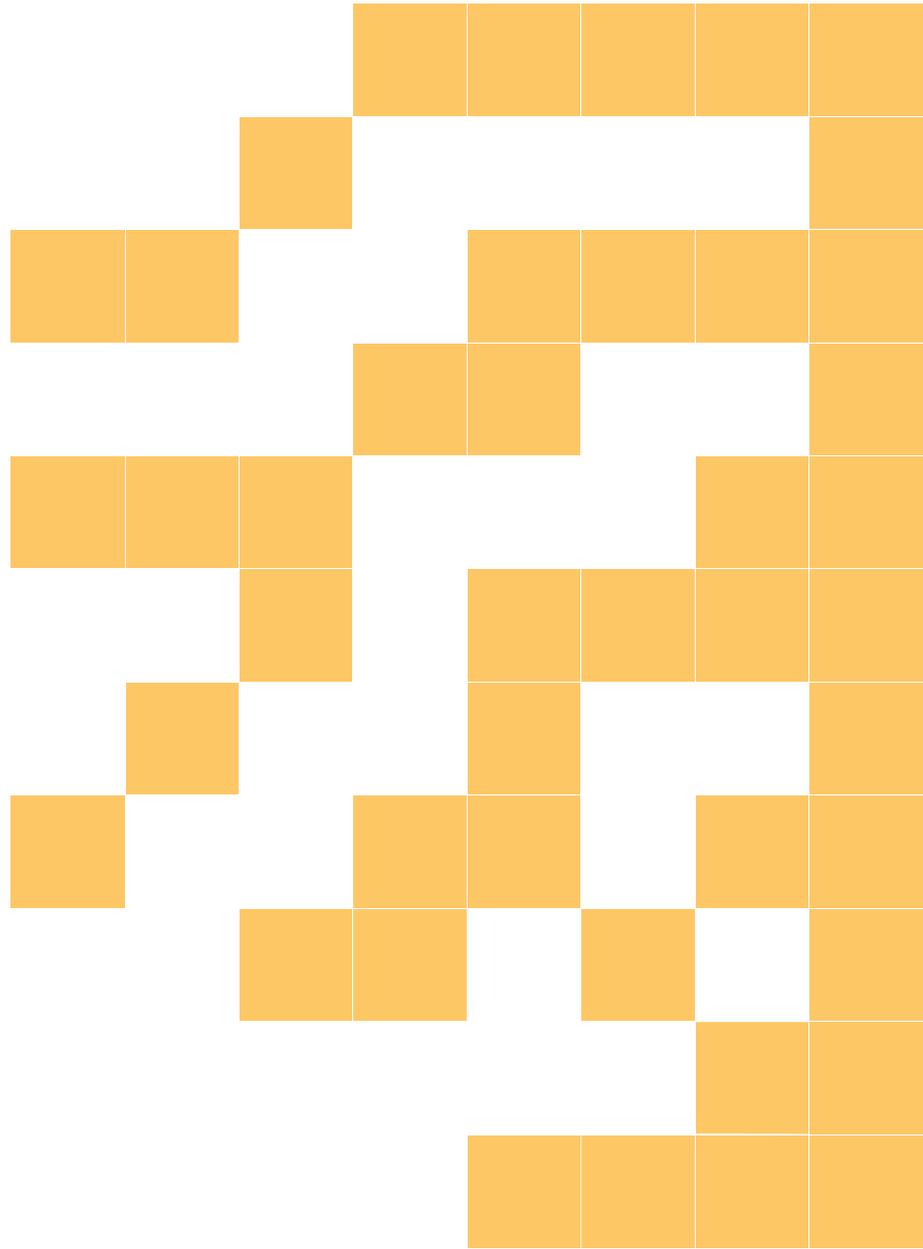
アーバン・アドバンス

No. 52

[特集] 生物多様性とまちづくり

2010年10月に、「生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)」が愛知県名古屋市において開催されます。このような中、国内外において生物多様性の保全とその持続可能な利用や自然との共生に向けた地域づくりの取り組みが進められております。そこで次号では、国内のさまざまな取り組みを取り上げながら「生物多様性とまちづくり」について考えていきたいと思います。

2010年06月 発行予定



[特集] 近世武家文化とまちづくり～名古屋開府400年に寄せて～

近世名古屋の賑わいと景観 —名古屋開府400年と尾張徳川七代宗春をめぐって— 徳川美術館企画情報部部長 小池 富雄	5
名古屋城本丸御殿の魅力 名古屋工業大学大学院 教授 麓 和善	11
よみがえる熊本城—熊本城復元整備とまちづくり— 熊本市経済振興局観光振興部熊本城総合事務所 技術主幹 下田 誠至	18
彦根の歴史まちづくりにおける市民活動について NPO法人彦根景観フォーラム理事長 山崎 一眞 (滋賀大学産業共同研究センター教授)	26
歴史・文化・まちづくり分野のNPOネットワーク ～「清須越400年事業ネットワーク」の事例～ NPO法人揚輝荘の会 専務理事 清須越400年事業ネットワーク 幹事 佐藤 允孝	35

名古屋発

2010年『名古屋開府400年祭』 名古屋市総務局総合調整部 主幹 (名古屋開府400年祭の推進) 利國 浩象	43
--	----

名古屋都市センター事業報告

調査研究	シェアード・スペース (Shared Space) —共用空間— (財)名古屋都市センター 専任研究員 杉山 正大	53
	世界の都心から♪～海外交通施策事例調査～ (財)名古屋都市センター 調査課 研究主査 井村 美里	61
まちづくり セミナー	〈平成21年度 第2回まちづくりセミナー〉講演録 大学と地域との連携によるまちづくり～名古屋学院大学の事例を中心として～ 名古屋学院大学経済学部 教授 水野 晶夫	64

はじめに

名古屋のまちづくりは、1610年（慶長15年）の名古屋城築城開始と、清須越に
はじまりました。

本年は、名古屋開府400年という記念の年にあたります。この節目の時を、次
の100年に向けた新たなスタートを切る契機として、今後の発展につなげていか
なければなりません。

名古屋の新たなまちづくりに向けた第一歩をしっかりと踏み出すためにも、開
府から現在に至る先人たちのあゆみをふりかえり、それを学ぶとともに、この
地域に秘められた近世なごやの文化・歴史・資産などを見つめ直し、名古屋のま
ちの素晴らしさ・魅力を再発見することは大切であると考えます。

そこで本号では、名古屋開府400年に寄せて、国内各所における歴史資産や風
情をいかしたさまざまな取り組みを交えながら、「近世武家文化とまちづくり」に
ついて考えてみたいと思います。

— 特集 —

「近世武家文化とまちづくり」
～名古屋開府400年に寄せて～

近世名古屋の賑わいと景観

—名古屋開府400年と尾張徳川七代宗春をめぐって—

徳川美術館 企画情報部部長 小池 富雄

はじめに

平成22年（2010）、名古屋は「開府400年」を迎えた。家康の命によって、当時の尾張の中心地だった清洲から新造ニュータウンの名古屋に武士や町人たちが慶長15年（1610）に移転してきた「清洲越し」の名古屋開府を記念する節目の年である。100年前の明治43年（1910）の「開府300年」の祝賀行事では、近代都市としてめざましく発達した勢いを反映して、市民の提灯行列や祝祭行事が華やかにおこなわれた。

本稿では、江戸時代の名古屋城下の誕生、発達から現代に連続する上で、注目すべき人物七代藩主徳川宗春の時代を考えてみよう。江戸時代中期にあって、宗春は時の八代将軍吉宗に反抗して名古屋城下に、独自の政治理想を掲げて中央政府とは真逆の治世をおこなった人物である。

城下町名古屋

現在の名古屋と「江戸時代の名古屋」とは同一ではない。古くは港区、南区のほとんどが海水面であり、江戸時代になって徐々に埋め立てられて造成された土地である。また熱田は東海道の宮の宿であり、現在の熱田区は市内の一区だが、名古屋の町奉行支配ではなく、熱田奉行の支配する別の町であった。江戸時代中期にはすでに、名古屋と熱田は、町続きになったとい

われるが、正式に合併したのは、明治40年（1907）になってからである。そのほかの区は戦前、戦後になって周辺町村を合併して名古屋市域が拡大した結果である。

従って400年前の慶長10年に開府した名古屋城下を想像してみると、東区の西半分、中区、西区の堀川周辺の一部地域である。しかも、なお森林や畑、原野が各所に豊富に残されていたと思われる。名古屋の城下町は、名古屋城の南側に逆三角形に広がる「碁盤割り」の町人の住居区と周囲を取り囲む侍屋敷・寺院による基本構造である。城下周辺の農村人口をあわせても10万人弱の都市であり、南北5－6キロメートルの領域で、歩いても1時間余りの範囲であった。

瓦葺きの建築は、名古屋城と一部の御殿建築だけであった。ほかは、ほとんどが柿葺、茅葺き、藁葺き、板葺きの建築で、二階建ての建築もほとんどなかったであろう。江戸時代を通じて、町屋にも二階建て建築が並んだのは、本町通りの表通りに面した部分である。防火のために、寺院や富裕町人の店舗や邸宅が瓦葺に転



小池 富雄

こいけ とみお

1953年名古屋生まれ。青山学院大学大学院文学研究科史学専攻修士課程修了。専門は近世文化史、東洋漆工史。著書には、徳川美術館編 同館蔵品抄『初音の調度』、『婚礼』、『唐物漆器』、『香道具—典雅と精緻』（共著・淡交社）、『手箱』（駿々堂出版・共著）。漆工史学会理事。



挿図1 名古屋図 名古屋市博物館蔵

換していくのは、江戸時代の後半からである。ほかの地方の城下町が、城郭以外はほとんど瓦屋根を載せた建築が乏しいのが江戸時代の通例であるから、名古屋は開府から維新までの間にも都市建築が着実に発展した大都市である。しかも江戸城が何度も火災で失われたのに較べて、徳川一門の威光を示す名古屋城は昭和20年の天守閣・本丸御殿などが戦災消失するまで、建築当初の姿で近代まで存続したので「尾張名古屋は城で持つ」と謳われた理由である。

江戸時代の城下からは、どこからも名古屋城天守閣は見えただろう。現在の、天守閣はコンクリートで再建されたが、周囲に高層ビルが建ち並び市内からめっきり見通すことができなくなった。江戸時代の金鯨輝く名古屋城の偉

容は、近くに寄らなければ見えない。今では高層ビルの住人が見下ろすか、もしくは木曽三川公園や岐阜県南端の海津市の高台からは、気象条件が良いと名古屋城が遠望できるという。遠望の方が、むしろ江戸時代の風景に近いのかもしれない。「あんな立派な城を攻めても無理だ」と戦わずして敵に思わせるのが、天守閣本来の狙いであっただろう。

家康が天下の名城を築き、この地に二代将軍秀忠に次ぐ実子の九男義直を城主として据えたのは、幕府を開いた江戸の地に等しく、尾張の地が最重要地点であるとの認識に基づいていたからである。東西の中間にあり、海上交通、陸上交通の要所でもあり、さらに日本中でもまれな三本の巨大河川が伊勢湾に流れ込み、木曽や美濃の後背地との流通の拠点でもあった。古くは秀吉の養子関白秀次が短期間ながら尾張を支配した時期があった。太閤秀吉も同様の認識を尾張の地に持っていたからである。家康にとっても伊井家や榊原家などの腹臣ではなく、実子でなければ尾張の支配者にはふさわしく無いと考えていたのである。

享保の改革

徳川幕府の8代将軍吉宗が、将軍についた享保元年（1716）から引退する延享二年（1745）までの29年間におこなった行財政改革は「享保の改革」と呼ばれている。江戸幕府の三大政治改革の中で最も成功したとされ、明治維新までの後世にまで継続された優れた政策が多く施行された。享保の改革とは、政治経済ばかりでなく福祉・教育・災害対策など多方面にわたる。具体例を挙げると、新田開発を進め、定免

制の税込安定改革、目安箱による庶民の意見反映、足高制による人材登用、公事方御定書の編纂による法令整備、町火消しの創始、厚生施設の小石川養生所創設などである。改革が必要となった理由は、その前の時代の元禄時代に日本経済全体が「バブル経済」とも呼ぶべき大発展し、消費が拡大し、米価や消費者物価が狂乱し、大きく社会が揺らいだからである。根底にある要因は、経済の拡大であった。たとえば江戸時代の初めには、多くの人々は一日に二食であったが、世の中が豊かになって夜でも明かりをともして庶民が夕食をとるようになった。入浴も中世の蒸し風呂から、庶民までが現在のように湯船に浸かって入浴するようになり、いわば現代に近い生活様式が庶民レベルで始まっていた。

これに対して将軍吉宗は儉約主義・緊縮主義を基本に規制強化を進め、増税、価格統制で望んだ。新田開発や産物開発は、幕府税収の増大を計ったが、根本の日本のマクロ経済の観点からは、拡大でなく縮小であった。目指すところは、将軍権力を強化し、国家の機能強化を目指し、かなりの成功を収めた。明治時代になって、江戸時代の鎖国制度、身分制度、歴代将軍や幕府官僚制度の政治能力が非難・否定された中で、享保改革は最も高く評価された。明治政府が目指した「富国強兵・殖産興業」を八代将軍吉宗が先取りしていたからである。

享保改革に関する歴史研究は、現代も盛んである。吉宗は遊郭や芝居小屋を激減させた代わりに、庶民の健全な娯楽である花見や行楽地を整備した。王子や小金井などに桜並木やお花畑を開発したのは、現代の都市行政の観点から見直されている。全国の人口調査、特産物調査、全国の刀鍛冶の調査や古文書や古文化財の調査や保護なども、近代国家に必要な幅広い施策であった。

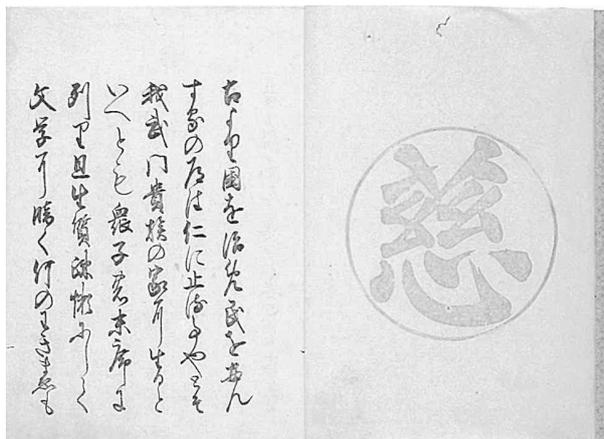
吉宗は江戸幕府の中興と後世評価されている。しかし享保改革に家臣と共に辣腕をふるっ

た将軍吉宗の当時の評判は、庶民にとっては最悪であった。太平の世に狎れた幕府家臣たちからも、不評であり、恐怖政治でもあった。将軍自ら木綿の衣服を着て、「生類憐れみの令」で廃絶した鹿狩り、鷹狩りを再興して、尻込みする幕臣たちを連れて出かけた。一日三食が一般化していたにもかかわらず、自らは二食を守った。大奥からも「野暮将軍」と揶揄された。庶民からも当時の落書では「乞食」のように銭金を集め、儒学者の太宰春台までも、当時「日本中の人吉宗を怨む」との述べ、目安箱にも「日本衰微」と政策は非難された。

尾張宗春の登場

対する尾張徳川宗春は、兄たちの急死をうけて七代藩主となった。三代綱誠^{つななり}の22男という藩主継承を予想もしない順位であったのだが享保十六年（1731）正月、三十五歳の時に七代藩主となると、吉宗に様々な反抗的な施策をとり、僅か六年後の元文四年（1739）正月に藩主を引退させられて、蟄居謹慎を命じられた。その後、明和元年（1764）68歳で病没するまで、名古屋城下に押し込められて過ごした。しかも死後も、藩主として歴史上から抹殺され、失脚した100年後の天保十年（1839）にようやく名誉回復されて、墓碑も改装された。

徳川幕府を補佐する徳川御三家の筆頭である尾張徳川家の宗春までが、将軍から謹慎引退を命じられたことにより、将軍権力の強大さは天下に響いた。「お庭番」とは、享保改革で吉宗が紀州から連れてきた秘密活動をする忍者のような存在である。深井雅海氏『江戸城御庭番』（1992年中公新書刊）によると、近年公開されたお庭番の家の古文書を分析してみると、将軍の個人的ポケットマネーで暗躍するお庭番の任務は幕府官吏の不正密告が大きかったようだ。



挿図2 『温知政要』名古屋市蓬左文庫蔵

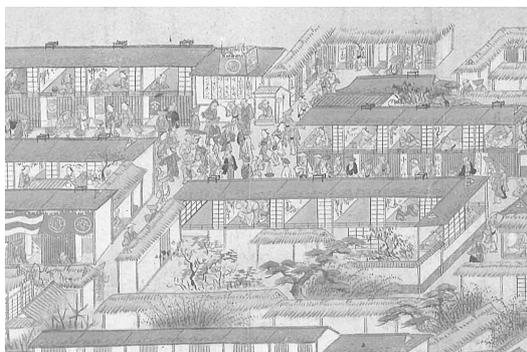
ついで反抗勢力への秘密諜報活動であった。筆者は、確証となる記録はないものの、お庭番たちが暗殺活動にも従事し、将軍吉宗自身が製薬趣味があり毒薬の知識があったと想像している。

さて宗春の政策はどのような特色があったのだろうか。すべてが型破り、独創に満ちていた。しかし失脚したために多くの史料が抹殺されてしまったために、現在では未解明な部分が多い。確実な手がかりになるのは宗春の著書『温知政要』である。同書は、平易な平仮名まじりの文章で述べられた木版印刷本である。享保16年3月の序文があり、21箇条にわたり自らの政治方針や、藩士たちの心得が説かれている。この年の4月に初めて藩主として江戸から名古屋に初入国するに際して、係長級以上の藩士に配布したとされるが、宗春失脚後は多くは消却滅失させられたようだ。現在残るのは僅かな部数である。

同書は、今日いう「マニフェスト」である。民政を重視した人に優しい政治を目指している。宗春は治世者には「慈悲と堪忍」の心が必要と説いている。土農工商の身分制度の中で、人々を慈しみ、支配者の利己主義を忍ぶべきであるとした。人命は、たとえ下層の者であっても千金にも代えられないと博愛・人命尊重を述べる。衣服や食物は個人の好みがある。支配者が自分の好みや、質素儉約を人々に強要するの

は万民を苦しめるばかりである、と説いた。

宗春の開放政策により名古屋城下には遊女町や芝居小屋がにぎわうようになり、領内の祭礼も儉約のために縮小されていたのが以前にもまして豪華におこなわれるようになり、名古屋の町は大いに繁栄した。宗春の人気は絶大で「弥勒の世」とたたえられた。江戸や京・大坂で働き場を失った芝居芸人や遊芸者たちも名古屋で活躍し、現在の大須の南は古くは松原の原野であったが、芝居小屋と外食産業である茶店が林立した。西小路、葛町、富士見原に遊郭が3カ所に成立した。西小路だけでも茶店30軒、遊女217人を数えたという。空前の名古屋の活況



挿図3 享元絵巻 名古屋城蔵 『新修名古屋史 近世一』から転載

に「名古屋の繁華に興（京）がさめた」といわれ、京の都を凌ぐ勢いであったという。

名古屋城に所蔵されている「享元絵巻」^{きょうげんえまき}は、享保・元文時代の繁栄を描いた4メートル近い長大な彩色の絵巻物である。広小路をスタート地点に、南に向かう本町通りの商人の店先の賑わいや、大須・七つ寺周辺の見せ物、茶店の喧噪、多数の芝居小屋が並び、東西の役者の名前を記した芝居看板が多数書き込まれている。その中には、江戸や上方でも著名な名優を含む

70人あまりの名前が見える。また南端には3カ所の遊郭の繁盛ぶりも描かれており、数年の時間幅の繁栄を一つの同図に盛り込んで宗春時代の繁栄ぶりを回顧して賛美している。



挿図4 牛に乗り長キセルを手に遊郭に通う宗春の姿。『享保尾事』所収。徳川林政史研究所蔵 徳川美術館編、『尾張の殿様物語』から転載

宗春のファッション

宗春の個性が最も強くあらわれているのは服飾つまりファッションの好みである。藩主として名古屋に初入国したときには、タキシードのような正装の羽織袴ではなく、緑の頭巾に唐人笠のようなべっこの大きな丸笠をかぶり、足袋まで黒づくめ、白馬にまたがり城下の人々を驚かせた。またその年、近江の国で購入したというお気に入りの白牛に乗って城下や近郊の寺社参詣に昼となく夜となく出かけた。ある時はしょうじょうひ猩々緋の深紅の着物であったり、様々に鮮やかなファッションを披露した。大きな頭巾に唐



挿図5 宗春着用 唐獅子牡丹図火事羽織 徳川美術館蔵 同館編、『尾張の殿様物語』から転載
人笠、五尺（1メートル半）の長ギセルを手にして、先端を家来に担がせて白牛に乗るのがお決まりの姿であったという。宗春の艶姿は、すぐに当時の芝居に取り入れられた。「傾城妻恋桜」と題して、遊郭を舞台にした狂言では、玉手新太郎という人物が宗春のファッションで芝居の絵番付に描かれている。これらは宗春の時代の繁栄を追慕して書き写されたと言うわる雑録書『夢のあと』に僅かに記録されている。現存する宗春の火事装束や衣服には、驚くべき斬新な意匠の品が残されている。甲冑や自筆の書画類にも豊かな和漢の教養と、洒脱な狂歌の画賛までユーモアや豊かな人間性を思わせる。

宗春の治世は、わずか六年。失脚後は、もとの質素な城下町名古屋に戻ったと言われるが、江戸時代中期の城下図（挿図1）には、享保13年（1728）周辺の村が都市化したので城下町に組み入れられた村の部分が色分けして描かれており、宗春時代の繁栄を予兆させる絵図である。諸田玲子氏の歴史小説『遊女のあと』^{ゆめのあと}（2008年新潮社刊）は、中日新聞・東京新聞・北海道新聞などに近年連載されて、当時の名古屋の城下が彷彿とされる。江戸や長崎の広い地域を足場にした架空の男女の時代小説だが、忍者やチャンバラもあり、あつと言う場面で颯爽と宗春も登場して楽しい。

宗春の失脚後の晩年は、現在の東区にある藩主の別荘「御下屋敷^{おしたやしき}」に幽閉された。現在の東区葵町周辺で、名古屋市芸術創造センターがある。芸能好きな宗春にはふさわしい施設が今も建てられている。想像してみると宗春は決してへこたれていたとは思われない。44歳で失脚し、69歳で死ぬまで謹慎の身であった。寛保3年（1743）老齡の実母宣揚院梅津が城下で死んだときも葬礼や墓参も許されず、長い幽閉であった。しかし制限のある生活ながら茶の湯や書画を楽しんでいたと筆者は想像している。後継の藩主からも、宗春の好みの書画や豊かな幽閉を送るための生活資材は、提供していたと想像される。宗春が死ぬ13年前、宝暦元年（1751）すでに隠居後の将軍吉宗は67歳で病没していた。宗春の御下屋敷の東隣には藩直営の朝鮮人参を栽培する「御人参畑」があり、苦心の試験開発のすえ、後に商業的な栽培に成功していた。その種子は、以前に将軍吉宗から格別に拝領したものであって、ひょっとしたら宗春はこの朝鮮人参を服用していたのだろうか、と思うと宗春から味と感想を聞いてみたくなる。

宗春の理想と現代

宗春の政治理想は、実際には将軍権力を前にして儂くして短期間で終わった。しかし現代にこそ傾聴すべきテーマが宗春の理想には多く含まれている。見る人によっては、規制緩和や地方分権化と、さまざまに読み解くことも可能である。また死刑廃止論や、人間性の尊重、個性重視の社会、心豊かな社会の実現などが背景にある。家康や初代尾張徳川義直、七代宗春ら為政者が構築した社会基盤を母胎として、主役となるのは城下町名古屋の住人たちの生活こそが都市の繁栄の賑わいの中心である。

宗春が目指した生き方の理想を現代も、国と

して、自治体として、個人として考え直してみたい。都市の賑わいとは、単に人間が群集する雑踏や喧噪ではない。また単に経済活動が活発であるだけでもない。老人や女性、社会的な弱者までもが安心して、心豊かに調和と活気を以て人々が生活できることであろう。多様な住民が集い、楽しめるのが都市の賑わいである。

吉宗が宗春に対して華美な服装や、祭礼を盛大に催したのを問責した事があった。『享保尾州上使留^{きょうほうびしゅうじょうしどめ}』によると、宗春は「かしこまって承る」と答えながら「民と共に世を楽しむのが、何の不都合があるか」と切り返して、享保の改革で沈滞した世間から喝采を受けた。弱者をいたわり、それぞれ能力や分に応じた社会の中で、土農工商の誰もが楽しむ社会の実現を宗春は目標としていた。宗春の理想は、今日から見れば素朴な思想であり、経済政策も都市政策も未熟であったろう。しかしながら、現代の私たちのとって見ると、宗春が残してくれた理想は、「名古屋開府400年」に際して次の100年、どのような目標をもって我々は生きるのかを考えるヒントであり、極めて重いのである。

【参考文献】

- 徳川美術館編 『尾張の殿様物語』 徳川美術館 2008年
- 林董一編 小池富雄ほか著 『享元絵巻の世界』 清文堂出版 2007年
- 大石学編 小池富雄ほか著 『規制緩和に挑んだ「名君」 徳川宗春の生涯』 小学館1996年
- 大石学訳・解説 『徳川宗春「温知政要」』 海越出版 1996年
- 安田文吉 『「ゆめのあと」 諸本考』 名古屋市文化財叢書 名古屋市教育委員会 1978年

名古屋城本丸御殿の魅力

名古屋工業大学大学院 教授 麓 和善

1 名古屋城築城と慶長創建期の 本丸御殿

清洲城を本拠とする織田信長が、永禄3年(1560)、駿府を本拠とする今川義元の軍を桶狭間に破ったように、古代から豊臣政権まで、尾張は東国に対する前衛であった。しかしながら、慶長5年(1600)関ヶ原の合戦において清洲城主福島正則が東軍について以来、尾張の戦略的価値は逆転し、徳川政権の西国に対する前衛となった。

徳川家康は、福島正則にかえて四男松平忠吉を清洲城主とし、慶長12年に忠吉が病没すると、九男義利(後に義直)を継がせる。そして、低湿地で水攻めを受ける恐れがある清洲城の立地が問題になり、その移転先が検討され、東海道と中山道をおさえて熱田の良港に恵まれた那古野の地に新たに城を築くことになった。慶長14年1月末には、家康自らが義直を伴って清洲城に滞在し、名古屋城造営の指示を直接行っている。

慶長15年から16年にかけて、諸国から技術職人が集まり、清洲から御家人住宅や諸社寺を移し始める。俗に「名古屋越(後に清洲越)」と称された町ぐるみの大移動である。

石垣や堀の普請すなわち土木工事は、慶長15年(1610)に、西国・四国・九州の外様大名総数20名による天下普請で行なわれた。豊臣家に恩顧のある大名の財力を消費させる目的があったといわれている。本丸・二ノ丸・深井丸・西ノ丸の石垣が同年9月までには完成し、

続いて熱田から内郭西側まで堀川が開削された。

一方、作事すなわち建築工事は、慶長16年から幕府の直轄工事として行われ、作事奉行に遠州流茶道の開祖としても知られる小堀遠州をはじめ9名、御大工頭には天下一を意味する「一朝惣棟梁」の称号を得ていた中井大和守正清が命ぜられた。まず、諸門・櫓・長屋等の工事にとりかかり、天守はやや遅れて翌17年6月頃に着工した。当時正清は、京都で方広寺大仏殿や内裏の作事も進めていたが、同年6月28日に、家康側近の駿府年寄衆から、大坂の豊臣方との決戦に備え、天守を早く造営するよう督促の書状が送られ、これに応じて正清は、内裏の作事に携わっていた大工のうち3分の2を急遽名古屋に派遣し、8月末までには大和・京を中心とする大工500名近くが動員された。その甲斐あって同年末には一応城郭としての構成ができあがった。

本丸御殿は天守完成後に着工、大坂冬の陣直後の慶長20年2月には、藩主義直が移り、4月12日にはここで紀伊和歌山藩主浅野幸長の娘春姫と義直との婚儀がとり行われた。



麓 和善

ふもと かずよし

1956年香川県生まれ。名古屋工業大学大学院修士課程修了。工学博士。財団法人文化財建造物保存技術協会を経て、現在名古屋工業大学大学院教授。専攻は、日本建築史・文化財保存修復。そのフィールドは広く、日本のみならずヨーロッパからアジアまで。最近ではブルガリアのプロヴディア歴史地区の修復にも参加。社会における活動として、岐阜県文化財保護審議会委員、特別史跡名古屋城跡全体整備検討委員会委員、同委員会建造物部長、史跡鳥取城跡保存整備実施計画検討委員会委員、大名城修理委員会委員など。著書に『日本建築古典叢書9 近世建築書 絵巻雛形』(大龍堂書店)、共著に『日本産業技術史事典』(思文閣)、『ビジュアル版 城の日本史』(角川書店)、『茶道学大系6 茶室・露地』(淡交社)ほか多数。修復・設計作品に(重要文化財旧函館区公会堂)、(重要文化財豊平館)、(重要文化財函館ハリストス正教会復活聖堂)、(重要文化財東光寺鐘楼・三門・総門)《旧豊田善一郎邸》《通教寺本堂・茶室》など。

この慶長創建期の本丸御殿は、敷地の南東隅から西北隅にかけて、御遠侍・御広間・御対面所・御料理之間など行政機能を持つ儀礼的・公的空間の「表」から、御書院・御台所など藩主の日常の場である「中奥」を経て、御殿・小台所・御局の部屋など正・側室の住む「奥」へと、多数の建物が雁行状に続いていた〔図1〕。

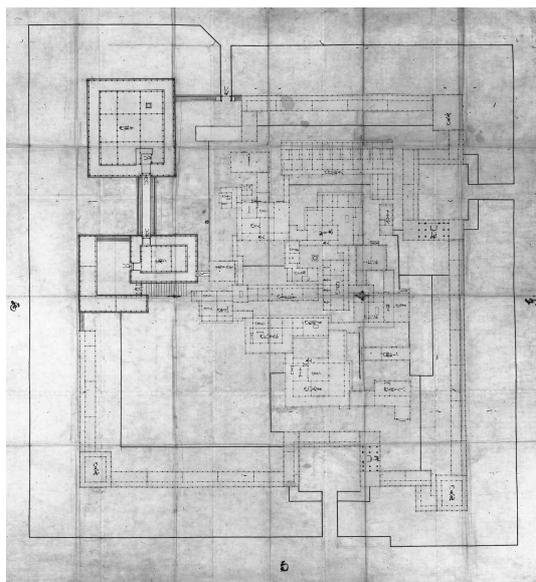


図1 「なこや御城之指図」 中井正知氏所蔵

2 将軍上洛のための御成書院造営(寛永再営期)

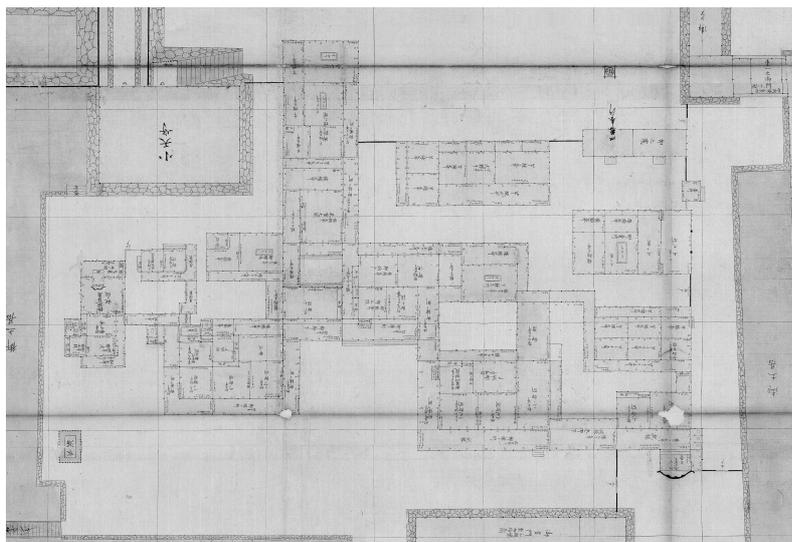


図2 「御本丸御深井丸図」 江戸時代後期 名古屋市博物館所蔵



図3 旧高原院(義直正室春姫)霊廟(現名古屋東照宮本殿) 細部意匠 慶安4年(1651)

元和6年(1620)に義直が二ノ丸御殿に移り、尾張藩の政庁となると、本丸御殿は、将軍が京都に上洛する際の宿泊施設となった。そして、寛永11年(1634)の三代将軍家光の上洛をひかえ、不要となった中奥・奥部分を撤去し、対面所の西から北に御成書院(上洛殿)・黒木書院・湯殿書院等を新築する改造工事が行われた〔図2〕。

この工事の中心ともいべき御成書院の造営において、障壁画を担当したのが狩野采女かのうねめと狩野奎助もくのすけ、欄間彫刻を担当したのが幕府作事方大棟梁の平内正信へいのうちまさのぶと尾張藩御大工頭沢田庄左衛門である。このうち狩野采女は後の探幽で、

寛永3年の二条城二之丸御殿大改修や寛永13年の日光東照宮造替など、当時幕府が威信をかけて造営した建物において、狩野派一門を率いて彩管を振るっている。また平内正信は、寛永9年に成立した幕府作事方の大棟梁を勤め、以後平内家は和様を得意として「四天王寺流」を称え、江戸時代を通して正統的幕府官匠として君臨することとなる。一方、沢田庄左衛門は、元和5年の名古屋城西北隅櫓(清洲櫓)造営、慶安4年(1651)高原院霊廟

(現名古屋東照宮本殿)造営〔図3〕に関わっている。このように、幕府と尾張藩の最高技術者を動員して本丸御殿の寛永再営工事が行われたわけである。

その後、享保13年(1728)に、屋根を柿葺から棧瓦葺に変更するとともに、妻飾りと呼ばれる屋根側面の意匠を木連格子きづれごうしから漆喰塗り込めしっくいに変更した以外は、ほとんど寛永再営期の状態のまま明治維新を迎えた。

3 明治維新後の本丸御殿

明治4年(1871)廃藩置県後は、陸軍省の所管となり、明治20年まで、本丸御殿は名古屋鎮台本部として使用された。この間、本丸以外の多くの建築が取り壊された。

その後、明治26年に本丸が皇室御料地に編入されて「名古屋離宮」となり、本丸御殿は50回以上におよぶ天皇・皇太子の行幸啓の行在所となった。

昭和4年に「国宝保存法」が制定されると、翌5年12月に名古屋離宮が廃止され、名古屋市に下賜されるとともに、大天守・小天守・本丸御殿・櫓4棟・門6棟が、城郭建築としてははじめて国宝に指定された。ちなみに姫路城が国宝に指定されたのが昭和6年、「二条離宮」となっていた二条城が京都府に下賜されて国宝になっ

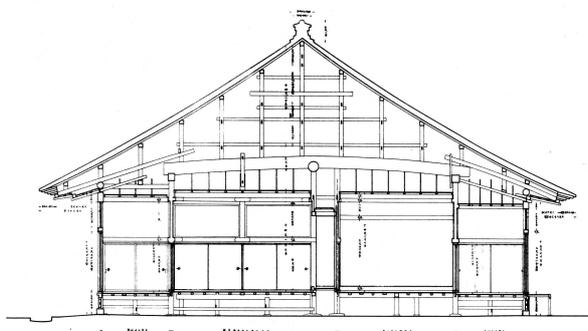


図4 御成書院(上洛殿)実測図 名古屋城管理事務所所蔵

たのが昭和14年である。

そして、この頃から記録保存のため、本丸御殿を中心に数百枚以上のガラス乾板写真が撮影され、さらに名古屋高等工業学校(現名古屋工業大学)校長の土屋純一の熱心な勧告により、昭和7年から12年まで、5ヵ年計画で実測調査が行われ、昭和27年に実測図279枚(本丸御殿109枚)が完成した〔図4〕。

昭和17年には本丸御殿の障壁画345面・附つかけり16面が国宝に指定され、昭和20年には空襲が激しくなってきたので、障壁画のうち取り外し可能な建具類をまず城内深井丸の乃木倉庫に保管し、さらに猿投村の灰宝神社宝庫に疎開した。ところが、同年5月14日の空襲でついに焼夷弾を受け、大天守・小天守・本丸御殿をはじめ大半が灰燼に帰してしまった。

現在の大天守・小天守は、昭和34年に外観復原されたもので、内部は博物館として機能させるため、耐震耐火構造である鉄筋コンクリート造で近代的に造られたが、外観は正確に焼失前の姿を再現している。これもひとえに上記実測図のたまものである。

4 本丸御殿にみる慶長期と寛永期の室内意匠



図5 東南隅櫓から見た焼失前の名古屋城本丸御殿全景 名古屋城管理事務所所蔵

焼失前の本丸御殿〔図5〕は、ほぼ東半の遠侍(玄関)・広間(表書院)・対面所・下御膳所(料理之間)が慶長期の創建、西半の梅之間・御成書院(上洛殿)・上御膳所・黒木書院・湯殿書院・孔雀之間・上御台所が寛永期の増築で、その間20年であるが、時代差および部屋の格式によって、それぞれの部屋の室内意匠は異なっている。

まず慶長期から見ていくと、遠侍(玄関)は、表向きの取次ぎや警備の武士の詰所で、南西隅に車寄があり、その北側に廊下を挟んで、一之間と二之間が並ぶ。一之間北面には厚い地板を敷いた間口二間の「押板」(床の間の原形)と間口一間の違棚があり〔図6〕、二之間より格が

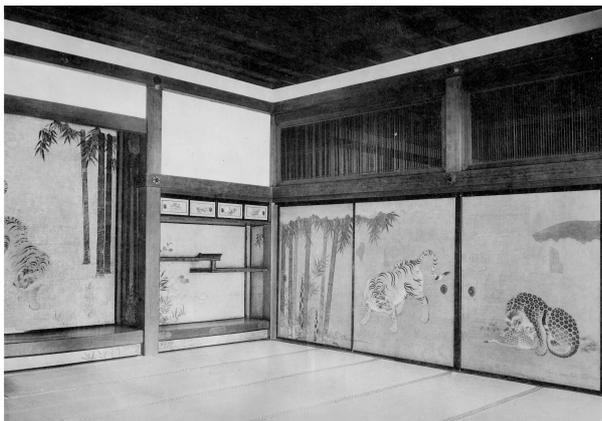


図6 遠侍(玄関)一之間 名古屋城管理事務所所蔵
高いことは一目瞭然であるが、両室とも内法長押から下に、竹林に虎や雌虎と考えられていた豹が群れる障壁画で飾られている。一之間・二之間境の欄間は、織機の箴を模して、織細な部材を櫛の歯のように列ねて組んだ「箴欄間」である。天井は二室とも同じ高さで、棹縁を平行に並べて板を張った棹縁天井である。

広間(表書院)は、公式行事や接客の機能を持つ武家の正殿で、南側から西側にかけて「入側」と呼ばれる廊下があり、座敷は格が高い順に見ていくと、北西隅に上段之間があり、その南側には一之間・二之間・三之間と西から東に並び、これらの部屋に三方を囲まれて北側中央に

納戸之間がある。上段之間はその名のとおり、床が一段高くなっており、その北面には間口二間の「押板」と三枚の棚板を段違いにした「清楼棚」が並び、西面には押板と矩折に入側に張り出して明かり取りの腰高障子と花狭間欄間が建てこまれた「付書院」、東面には「帳台構」が設けられている〔図7〕。これらのしつらえを総称して「座敷飾」という。障壁画は、内法長押より下にのみ描かれ、老松および老梅を中心と



図7 広間(表書院)上段之間 名古屋城管理事務所所蔵
した花鳥図である。天井は壁上端から円弧状に高くし(これを折上げ天井という)、天井面は太い格子(これを格天井という)の中に、さらに細密な格子を組んでいる(これを小組という)。この3つの要素を備えた天井形式を「折上げ小組格天井」という。一之間は、満開の老桜の下に雉が配された障壁画で、天井は壁上端にそのまま張った「小組格天井」である。二之間・三之間および南・西入側は小組のない「格天井」、納戸之間は最も格の低い棹縁天井である。上段之間から三之間へと連なる部屋境には箴欄間が建て込まれている。

対面所は、内臣との対面の場で、東側から南側にかけて入側があり、座敷は南半に押板・清楼棚・付書院・帳台構の座敷飾を備えた上段之間〔図8〕と次之間が並び、その北側に納戸一之間と納戸二之間が並ぶ。障壁画は、やはり内法長押より下にのみ描かれ、名所絵・職人尽く

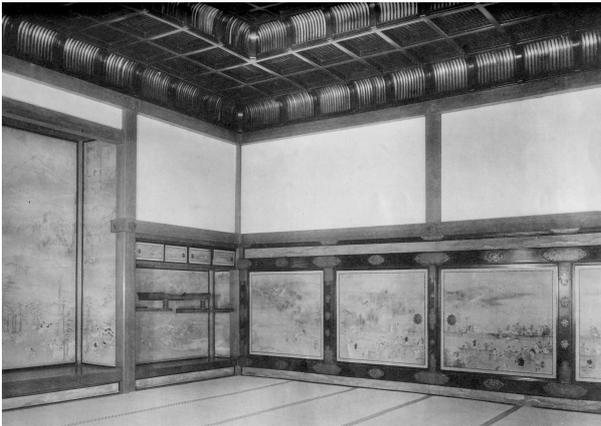


図8 対面所上段之間 名古屋城管理事務所所蔵

し絵・社寺参詣図など、多くの人物を生き生きと描いたものである。天井は、最も格の高い上段之間が、折上げ小組格天井の中央がさらに一段折上がった「二重折上げ小組格天井」、次之間は折上げ小組格天井、東・南入側は格天井、納戸一之間・納戸二之間は棹縁天井となっている。

以上、いずれの建物においても、南東隅の部屋から北西隅の部屋へと時計回りに部屋の格を高くし、最も格の高い北西隅の部屋では、床や天井の高さを高くしたり、押板・棚・付書院・帳台構などの座敷飾が設けられている。加えて、南東の遠侍から北西の対面所へと、建物の格が段階的に高くなるにしたがって、建築意匠も徐々に豪華になり、さらに障壁画の題材が、虎などの走獣から、花鳥を経て、名所絵などの人物へと、狩野派の規格による上位の題材に変化していく。しかしながら、この時期は障壁画が描かれるのは襖の高さまでで、鴨居の上は白い漆喰壁であり、欄間は箴欄間である。

一方、寛永期の将軍御成の中核施設である御成書院(上洛殿)は、四周に入側が廻らされ、座敷は北西隅に上段之間があり、その南側に一之間・二之間・三之間と西から東に並び、三之間の北側に松之間があつて、これらの部屋に三方を囲まれて北側中央に納戸之間を配する。最も格の高い上段之間は、間口2間の大床・清楼棚・帳台構の座敷飾を備え、壁面には欄間彫刻



図9 御成書院(上洛殿)上段之間 名古屋城管理事務所所蔵



図10 御成書院(上洛殿)一之間 名古屋城管理事務所所蔵
を除いて内法長押上小壁にいたるまで中国の理想の皇帝を描いた「帝鑑図」の障壁画で飾り、天井は二重折上げ格天井で各格間には花鳥の淡彩画が描かれている〔図9〕。一之間は折上げ格天井、二之間は格天井で、いずれも各格間には花鳥の淡彩画が描かれている〔図10〕。三之間および四周の入側も格天井であるが、各格間には三之間が七宝繫四弁花紋、入側が桐紋・菊花紋・唐花紋のパターン化された文様が描かれている。松の間・納戸之間は最も格が低く杉板の



図11 御成書院(上洛殿)一之間・二之間境欄間彫刻 名古屋城管理事務所所蔵 格天井である。

また、御成書院の室内意匠として特に重視された欄間彫刻は、上段之間・一之間境の2間が「大和松と薔薇と笹に鶴と亀」で、表は格の高い上段之間ではなく一之間側、すなわち将軍に対面する者に対して向けられている。一之間・二之間境の2間は、「竹と梅に鶏」〔図11〕で、表は格の高い一之間側に向けられている。このうち北面の鶏は太鼓に乗っており、「諫鼓苔む

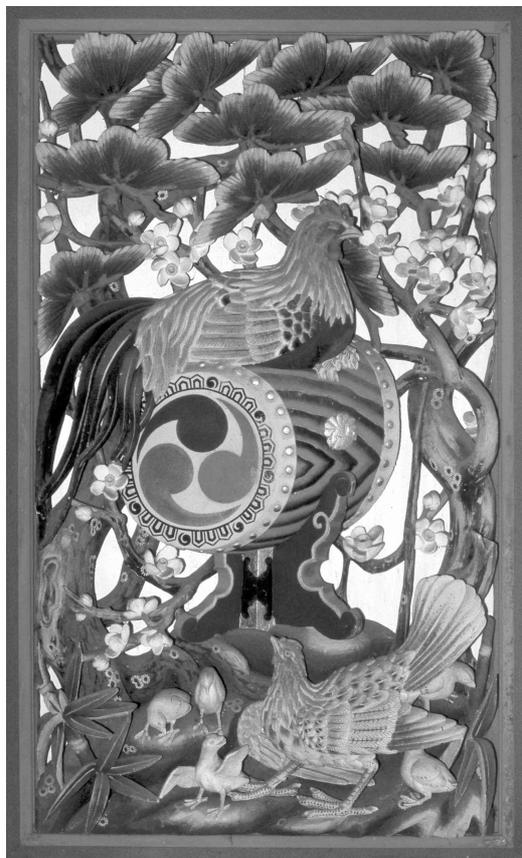


図12 和歌浦天満宮本殿脇障子彫刻 慶長11年(1606)

す」すなわち君主に対して諫言しようとする人民が打ち鳴らす太鼓に鶏が乗るほど善政が永く続いているという故事をあらわしている。この主題は当時の為政者に好まれ、本丸御殿の彫物と同じく平内正信の作になる和歌浦天満宮本殿脇障子彫刻(慶長11年)〔図12〕などにも見える。二之間・三之間境の2間は「唐松と牡丹に錦鶏」である。南入側を間仕切る杉戸の上の欄間は「椿に山鶺」で、山鶺は両面に配されており、どちら側から見ても表となっている。

以上、御成書院は、将軍と対面する者の視線を意識し、富貴・平安・長寿の理想的社会を示そうとする意図を看取することができ、同様の意図は寛永3年造営の二条城二之丸御殿においても確認できる。また、欄間彫刻と並んで目を引くのが華麗な飾金具で、特に長押の大型飾金具は、透し彫りの菊あるいは桔梗の花束を熨斗紙で括り、熨斗紙の中には「唐獅子に牡丹」あるいは「葡萄に栗鼠」、および紗綾形や七宝繫文を配したものである〔図13・14〕。類似の飾金具は二条城二之丸御殿〔図15〕にもあるが、



図13・14 御成書院(上洛殿)長押飾金具 名古屋城管理事務所所蔵



図15 二条城二之丸御殿大広間長押飾金具 寛永3年(1626)

その極めて高い芸術性と技術力をもって、飾金具の頂点に位置づけることができる。

湯殿書院は、御成風呂を備えた將軍休息の場で、東側から南側にかけて入側があり、座敷は南西隅に上段之間、その東に一之間・二之間・風呂屋・釜屋が南北に並ぶ。上段之間は、間口二間の畳床を備え、天井は淡彩画の格天井、箒欄間を介して一之間・二之間およびその南東の入側は格天井である。風呂屋の床は板敷きで、北面には唐破風付の蒸風呂が設けられている〔図16〕。風呂屋・釜屋およびその東の入側は棹縁天井である。



図16 湯殿書院風呂屋 名古屋城管理事務所蔵

黒木書院は、東側から南側にかけて入側があり、座敷は畳床と違棚を備えた一之間と箒欄間を介して二之間が並ぶ。天井はすべて棹縁天井で、特に棹縁の向きが床に向かって配された「床刺し」で、古式である。黒木書院そのものは寛永期の建立であることは間違いないが、古くから清洲越といわれており、古材を転用した可能性がある。

以上、寛永期においても、最も格の高い御成書院から湯殿書院・黒木書院へと、座敷飾と天井形式によって建物と部屋に格差をつけ、しかも御成書院と湯殿書院には欄間を除くすべての壁面と格天井に障壁画・天井画を描き、さらに御成書院は豪華な欄間彫刻や飾金具で装飾するなど、慶長期より格段に豪華な意匠となってい

る。これらはいずれも美術史・建築史上の傑作であるが、加えて御成書院の「帝鑑図」の障壁画や、「諫鼓苔むす」の欄間彫刻からは、徳川幕府の政治的意図も看取することができる。

5 本丸御殿の復原

名古屋城本丸御殿は、二条城二之丸御殿と並び、徳川幕府の最高の技術で造営された御殿建築の傑作といえる。しかも建築様式上は、二条城二之丸御殿は全体が寛永期であるのに対して、名古屋城本丸御殿は慶長期と寛永期の両方を備えており、建築史的・美術史的価値はむしろ二条城二之丸御殿を凌駕しているとさえいえる。御殿建築における国宝第一号というのも、首肯できよう。不幸にして戦災焼失したが、障壁画・天井画1049面が残り、加えて昭和初期には部屋全体はもちろんのこと、飾金具〔図13・14〕のような細部にいたるまで、膨大な量のガラス乾板写真が撮影され、正確な実測図も作成された。このような計画的な記録保存はほかに例がなく、全国的に見られる城郭建築の復原の中でも、最も忠実な復原が可能である。平成20年から10カ年計画で復原工事が進められているが、文化財的に忠実に復原されれば、その意義は極めて高いといえる。

参考文献

- 『名古屋城』 城戸久
- 『名古屋城史』 名古屋市
- 『名古屋城叢書続編 13～16 金城温古録(1)～(4)』 名古屋市教育委員会
- 『特別史跡名古屋城年誌 名古屋城叢書2』 服部鉦太郎
- 『日本名城集成 名古屋城』 内藤昌編
- 『懐古国宝名古屋城』 名古屋城振興協会
- 『本丸御殿の至宝 重要文化財 名古屋城障壁画』 名古屋城
- 『世界遺産を作った棟梁—中井大和守の仕事』 谷直樹・新谷昭夫

よみがえる熊本城

— 熊本城復元整備とまちづくり —

熊本市経済振興局観光振興部熊本城総合事務所 技術主幹 下田 誠至

1. 熊本城とは

日本三名城（大阪・名古屋・熊本）の一つとして名高い熊本城は、名将加藤清正によって慶長6年（1601）から7年の歳月をかけ慶長12年（1607）に築城された近世城郭で、茶臼山（標高約50m）という丘陵地を利用した平山城である。

城跡の石垣、堀などは現在もほぼ良好に保存されており、その規模は、旧城域約98ha、周囲約5.3kmで、そのうち約51haが国の特別史跡に指定されている。

また、築城当時は大小天守閣をはじめ、櫓49、櫓門18、城門29を数えたと伝えられている建造物群は、加藤家2代、細川家11代の居城として幕末まで維持されてきたが、明治に入り廃藩置県とともに旧軍の管轄下におかれ、大半の建造物が明治初期に解体撤去され、明治10年の西南戦争時に大小天守閣をはじめ本丸域の主要な建物が焼失している。解体、焼失を

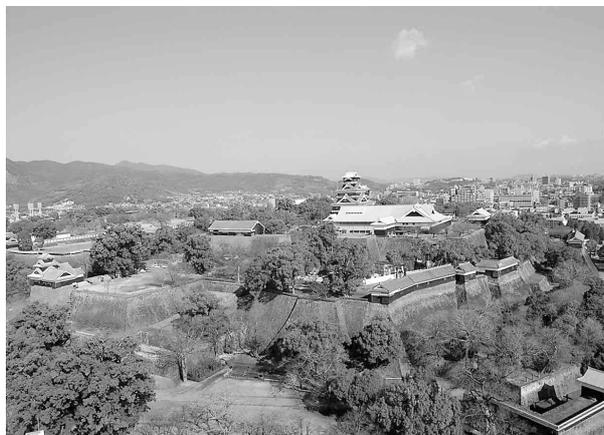


写真1 熊本城本丸区域 全景

免れた宇土櫓など13の建造物は大正末年頃から保存顕彰の機運が高まり、さまざまな維持補修を受けながら現在まで存続し、国の重要文化財として指定されている。



写真2 熊本城天守閣

2. 熊本城復元整備計画

熊本市では、昭和35年（1960）の天守閣再建を大きな契機として同36年（1961）には平御櫓、同41年（1966）には馬具櫓が再建された。さらに平成に入ると、元年（1989）に市制100周年を記念して数寄屋丸二階御広間が復



下田 誠至

しもだ せいし

1976年 熊本市採用
2002年 熊本城総合事務所技術参事
2006年より現職 一級建築士

元されるなど江戸時代から残されている国指定の重要文化財建造物13棟に加え、多くの建造物が城域に姿を現し始めた。

このような機運の中、本市最大の歴史遺産としてはもとより、観光資源として、さらに市民の歴史的・文化的シンボルである熊本城の威容を再現し後世に伝えていくことを目的に、平成9年度に「熊本城復元整備計画」を策定し、本格的な復元に取り組むこととした。

(1) 整備方針

「熊本城復元整備計画」は文化財保護を始めとする各方面から寄せられた熊本城の整備に対する多くの報告や答申、あるいは提言などを受けて策定したものである。

この計画は、加藤清正が築城した城郭全体(約98ha)を対象区域とし、往時の雄姿を復元整備するとともに、都市に潤いと風格を、市民には一層の誇りと心にゆとりを与えることを目指し、以下のような基本方針に基づき復元整備を進めるものである。

① 歴史的建造物の復元と保存

熊本城は絵地図や古文書をはじめとする史料が豊富に残っている。この史料を生かして、史実に基づいた歴史的建造物の復元や保存を行い、歴史遺産としての価値をさらに高める。

② 都市の潤い空間としての環境整備

景観から見た熊本城の価値は「石垣」にある。従って石垣の維持・管理・復旧を行うとともに、緑の拠点として、樹木・花・芝生の植栽、そして散策道等の公園整備を進め、都市の潤い空間としての価値を高める。

③ サービス空間の創出

史跡としての価値を失わないように配慮しながら、飲食物販や休憩所等のサービス施設の充実を図るとともに、歴史を学び体感する機能の導入により、観光資源としての価値を高める。

(2) 整備方法

熊本城の城郭は広大で整備内容も広範かつ多岐にわたることから、城郭全体を5つにゾーニ



図1 熊本城域のゾーニング

ングし、各ゾーンに見合った整備を効率的に進めるとともに、整備時期についても短期、中期、長期に区分し整備を進めることとしている。

- 本丸ゾーン … 保存・復元ゾーン
- 二の丸ゾーン … 緑の遊園ゾーン
- 三の丸ゾーン … 歴史学習体験ゾーン
- 古城ゾーン … エントランスゾーン
- 千葉城ゾーン … 文化交流ゾーン

3. 熊本城復元整備事業

(1) 短期（第Ⅰ期）復元整備事業

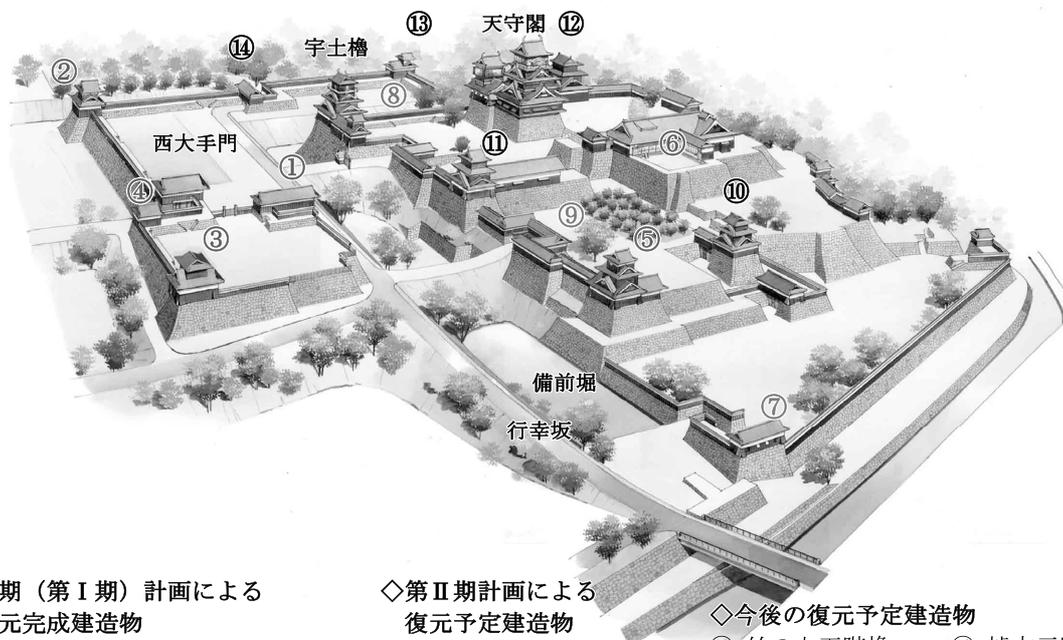
平成10年度から歴史的建造物の復元に取り組み、築城400年にあたる平成19年度を目標に、6つの建造物（南大手門・みなみおおてもん 戊亥櫓・いぬいやぐら 未申櫓・ひつじきる 元太鼓櫓・もとたいこやぐら 飯田丸五階櫓・いいたまるごかいやぐら 本丸御殿・ほんまるごてん 大広間）の復元を進めた。また、平成11年の

台風で倒壊した西大手門もあわせて再建した。

短期（第Ⅰ期）復元整備事業で復元された建造物とその費用を年度別にまとめると以下のようになる。

- 西出丸一帯 ※写真3～6参照
（南大手門・戊亥櫓・未申櫓・元太鼓櫓）
事業年度：平成10～15年度
総事業費：約19億円
- 西大手門
事業年度：平成12～15年度
総事業費：約5億円
- 飯田丸五階櫓 ※写真7参照
事業年度：平成10～16年度
総事業費：約11億円
- 本丸御殿大広間 ※写真8参照
事業年度：平成11～19年度
総事業費：約54億円

熊本城復元予想図



◇短期（第Ⅰ期）計画による復元完成建造物

- ① 南大手門
- ② 戊亥櫓
- ③ 未申櫓
- ④ 元太鼓櫓
- ⑤ 飯田丸五階櫓
- ⑥ 本丸御殿大広間

◇第Ⅱ期計画による復元予定建造物

- ⑦ 馬具櫓および続堀
- ⑧ 平左衛門丸堀
- ⑨ 西櫓御門および百間櫓

◇今後の復元予定建造物

- ⑩ 竹の丸五階櫓
- ⑪ 数寄屋丸五階櫓
- ⑫ 御裏五階櫓
- ⑬ 櫓方三階櫓
- ⑭ 北大手門



写真3 南大手門（平成14年10月竣工）



写真6 元太鼓櫓（平成15年12月竣工）



写真4 戌亥櫓（平成15年8月竣工）



写真7 飯田丸五階櫓（平成17年2月竣工）



写真5 未申櫓（平成15年8月竣工）

(2) 短期（第Ⅱ期）復元整備事業

第Ⅱ期復元整備事業は、平成20年度から平成29年度を目処に、施設管理面で老朽化が進み、補修の時期が来ているもの、あるいは景観上優先すべきものとして、行幸坂から見た往時の熊本城の復元を目指して、「ばくやぐら馬具櫓 一帯」、「にしやぐらごもん西櫓御門及び百間櫓」、「ひやっけんやぐら平左衛門丸の塀」の区域について整備を進めることとしている。

4. 本丸御殿復元整備事業

(1) 本丸御殿とは

天守閣の南東側に位置する本丸御殿は、藩主の居間や対面所（会見の場）、台所など、多様な用途をもつ複数の殿舎群で構成されていた。加藤清正によって創建され、慶長15年（1610）頃には完成していたと云われている。細川忠利が藩主となった後、寛永10～12年（1633～1635）頃に大規模な改修が行われ、大台所棟や大広間北側の居間などが増築されたと考えられており、往時は部屋数53室、畳総数1,570畳を数えたと云われている。廃藩置県によって熊本城が廃城となり、鎮西鎮台（後の熊本鎮台）が設置され、軍の施設として利用されていたが、明治10年（1877）の西南戦争の際に起こった火災で天守閣とともに焼失してしまった。

(2) 復元の進め方

熊本城は特別史跡であるため、文化財としての特段の配慮が必要であり、建物の復元にあたっては、かつて熊本城にあったものを史実に基づき忠実に復元することとした。

そのため、江戸時代の古絵図や古文書、並びに明治初期に撮影された焼失前の古写真などを資料として復元を行い、本丸御殿に関しては明和年間（1764～72）の古絵図である「御城内おんじょうない御絵図おんえず」や江戸中期の「御城図おんじょうず」、古文書では「御天守密書おんてんしゅみつしよ」や「御城御玄関之図おんじょおんげんかんのず」などを資料として用いた。また、復元工事に先立ち実施された発掘調査では、建物の位置が特定できる礎石の位置が確認され、そのため本丸御殿の建設位置も確定された。この発掘調査で出土した瓦や釘隠しなどの金属製品など、かつて備わっていたと考えられるものは忠実に複製し、本丸御殿の復元に用いた。

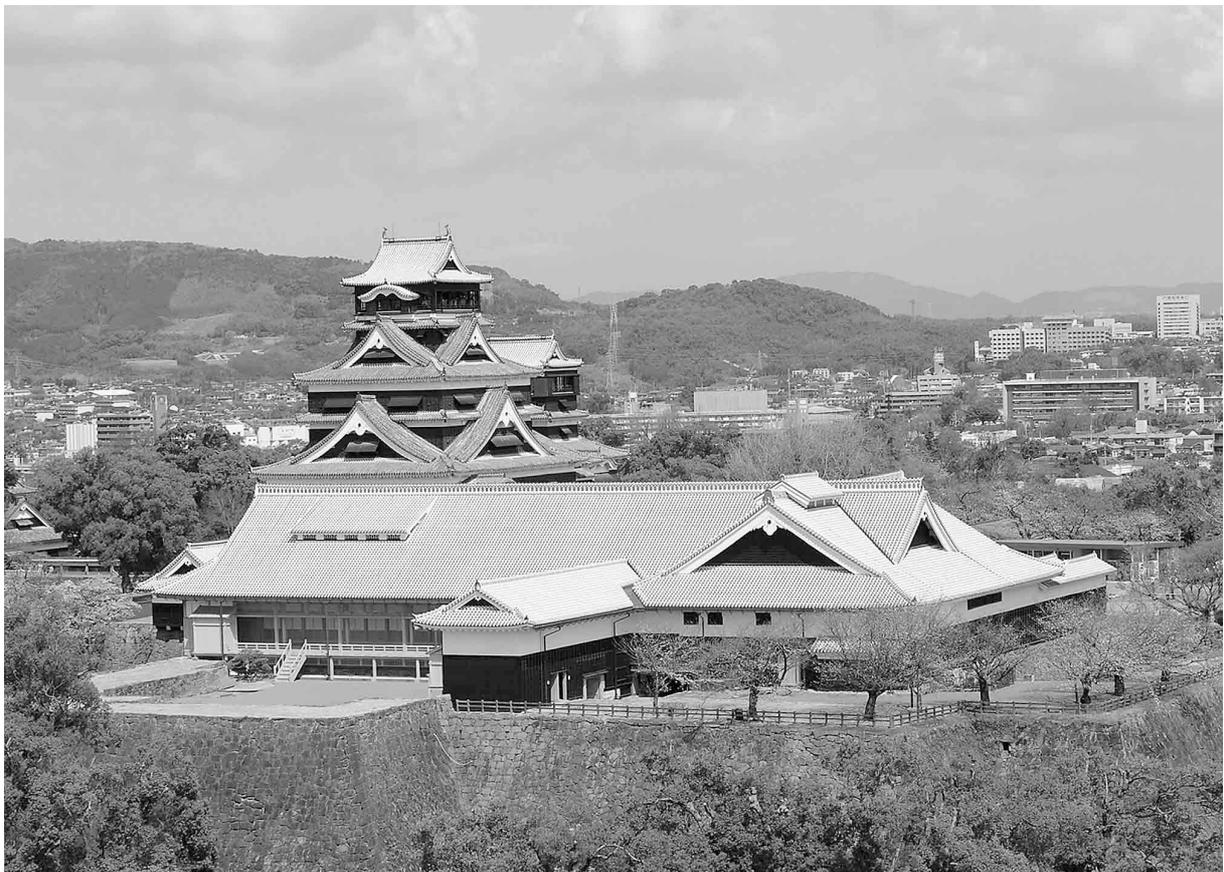


写真8 本丸御殿大広間（平成20年3月竣工）

(3) 本丸御殿の概要と特徴

<建物概要>

木造、入母屋造り、地下1階地上3階建て

延べ面積：2,951.11㎡

建築面積：2,161.21㎡

建物の高さ：14.6m（大広間棟）

<事業の経緯>

平成11年5月 発掘調査に着手

平成13年8月 基本設計に着手

平成14年11月 実施設計に着手

平成14年12月 石垣保存修理に着手

平成15年5月 特別史跡内の現状変更許可

平成15年9月 建築工事に着手

平成17年9月 上棟式

平成20年3月 建物竣工

平成20年4月 落成式、一般公開

<事業の主な特徴>

① 史実に基づく復元設計

特別史跡内での歴史的建造物の復元には明確な資料・根拠が必要となる。復元史料としては、発掘調査の成果、古写真、文献資料、絵図資料、木割・類例建物を基本資料として設計を行い、史実に忠実な復元を行った。

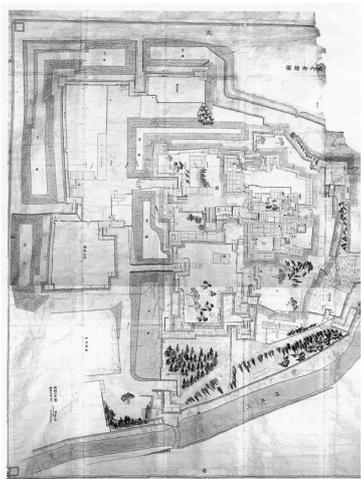


図2 御城内御絵図
(昭和9年写 熊本市教育委員会蔵)



図3 御城内御絵図（本丸御殿部分）

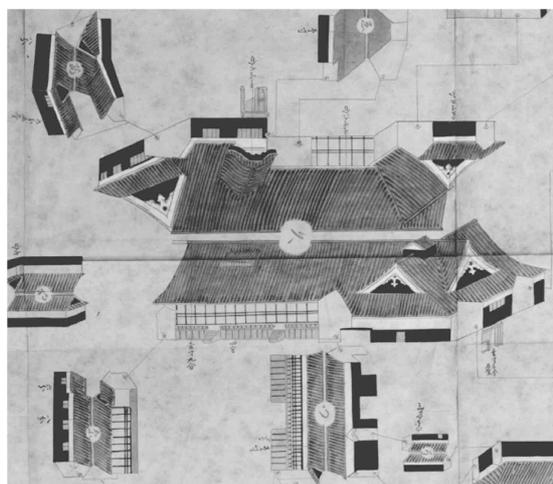


図4 御城図（本丸御殿部分）永青文庫蔵

② 昔ながらの伝統工法

石垣積みをはじめ、熟練した職人による木組み、丸太の仕上げ、土壁や屋根の下地までこだわった復元など、多くの伝統的な工法・技法を用いた。その伝統的な工法を後世に伝えることも復元工事の大事な使命である。

③ 熊本の「ヒトとモノ」による復元

可能な限り熊本県産材を使用し、大工、左官などの職人も地元を採用した。熟練した職人から若い職人へ技術を伝える伝承の場もある。

④ 他に類を見ない「^{くらが}闇り通路」

石垣と石垣を跨ぐように建つ本丸御殿。

そのため、その床下には「闇り通路」と呼ばれる地下通路がある。このような地下通路を持つ御殿建築は他に例が無いといわれている。

⑤ 豪華絢爛な御殿の復元

当時の本丸御殿は、ほとんどの部屋に障壁画が描かれていた。今回は文献資料に基づき、「昭君之間」と「若松之間」の2部屋について障壁画を復元した。部屋の要所に取り付けた飾り金具とあわせて当時の豪華絢爛な空間を体感することができる。



写真9 大工 木材組立



写真10 屋根葺工 本瓦葺



写真11 左官工 内壁荒壁塗り



写真12 闇り通路



写真13 昭君之間

5. 築城400年祭と未来に向けて

熊本市では復元整備によってよみがえる熊本城のすばらしさと、歴史に培われた文化、豊かな自然に育まれた熊本の魅力を広く全国に発信するため、平成19年の熊本城築城400年を記念

し、平成19年1月から平成20年5月までの1年5ヶ月にわたり7つの季節催事として、「熊本城築城400年祭」を開催した。中でもこの祭りのフィナーレとなる「エピローグ未来へ」では、本丸御殿の完成を祝うとともに、平成20年4月20日からの本丸御殿公開に合わせて様々な催しが開催された。

築城400年祭の開催や本丸御殿の復元整備など、市民協働で取り組んできた熊本城の魅力づくりが、多くの方から高い評価を受け、平成20年度の熊本城の入園者数は過去最高となる222万人を記録し、全国の城郭の中で日本一の賑わいに繋がった。

熊本城復元整備計画における短期計画により、本丸御殿をはじめ多くの建造物が復元されてきた成果を踏まえ、今後、中長期的にも、さらなる賑わいを目指して復元整備を進める計画である。

また、城内には、先人より受け継いできた重要文化財群や、これまでに復元された数多くの建造物が存在するため、それらを良好な状態に維持管理してゆくことも大切な役目である。

熊本城は、歴史遺産としての価値はもとより、オープンスペースや観光資源として、多様で豊かな内容をもった地域資源である。これらは、城郭を取り囲む歴史的なたたずまいを残す市街地と相まって、熊本市に城下町としての歴史や風格を醸し出すとともに、潤いを創出するまちづくりに貢献しているものである。

彦根の歴史まちづくりにおける市民活動について

NPO法人彦根景観フォーラム理事長
(滋賀大学産業共同研究センター教授) 山崎 一眞

はじめに

彦根市の旧城下町地区は、豊かな歴史と文化を刻んだ地域である。それを象徴する様々な遺産・遺構が数多く残されており、これらが彦根の誇るべき素晴らしい景観の基本要素となっている。しかし、近年これら遺産・遺構の消滅は著しく、このままでは素晴らしい景観が損なわれ、当地のアイデンティティや固有価値の消滅さえ懸念される。

筆者は、平成15年(2003年)に彦根市内の関係機関と協力して「日仏景観会議・彦根」を開催するとともに、そこで出された宣言を実行すべく「NPO法人彦根景観フォーラム」を組成して、彦根でのまちづくり活動をおこなってきた。

このNPO法人が掲げる組織目的は、「美しい自然環境と歴史遺産を持つ彦根の景観を、守り育て、未来に向けて働きかけることによって、住みやすく、誇りの持てるまちにすること」である。

これまでのまちづくり実践の結果は、「彦根歴史まちづくり計画」の重要な部分に採用されるとともに、この計画は平成21年2月に「歴史的風致向上計画」の第1号に認定され、これから数年掛けて計画の実現を図ることとなった。

本稿は、彦根で行った市民によるまちづくり活動を紹介し、これが公的計画に繋がっていく経過を記すことによって、皆様のまちづくりの参考に供することを目的としている。

1 彦根旧城下町地区の歴史

当地区は、奈良・京都と北陸や美濃・尾張に通じることから、歴史上一貫して戦略的要衝の地であった。特に、豊臣秀吉の全国統一後は石田三成が佐和山城主としてこの地を治め、その後、1600年の関ヶ原の戦いで功績を認められた井伊藩が、新たに彦根山に約20年の歳月をかけて城を築いて、城下町が出来上がったのである。

この近世初期に成立した城下町を下敷きに、近代・現代を刻んで現在のまちができています。数々の歴史遺産の意味を知る前提として、まず、その略史を押さえておくこととする。

1) 城下町彦根の特質

城下町彦根には次の3点の特質がある。第1点は軍事防衛都市である。彦根城築城の目的の1つに西国諸藩に対する監視、威嚇および防衛があった。「どんつき」と呼ばれるクランク状の街路配置、また、城を取り巻く重臣の武家屋敷、三重の堀に面して配置された武家屋敷と、



山崎 一眞

やまさき かずま

昭和45年 早稲田大学大学院理工学研究科修士
昭和45年 野村総合研究所入社
平成11年 地域計画研究部長・新社会システム研究センター長
平成12年 滋賀大学 産業共同研究センター教授
(平成16年 NPO法人彦根景観フォーラム設立し、理事長に)

地域デザイン論について研究中
滋賀県都市計画審議会会長・彦根市都市計画審議会会長など
『社会実験』(東洋経済新報社1999)
『地域政策の道標』(ぎょうせい2002)
『彦根歴史散歩—過去から未来をつむぐ』(サンライズ出版2006)

それに挟まれるように配置された町家、周辺部の濠沿いの寺院という構成は、町全体の防衛的性格を物語っている。さらに、視覚的に城郭の威容を誇示する工夫も凝らされている。重厚な天守をはじめ多くの櫓、表門から大手門に至る犬走り、リズムカルに屈折する石垣、また、主要な街路から目に入る白垂に聳える城郭などがそれに相当する。殊に、藩主の国入り経路であったいろは松から望む天守と櫓の雄姿は城郭の威容を示す代表例である。

第2点は湖水・河川という地理的条件を利用して城下町が形成された点である。琵琶湖およびその内湖に接して城と町が配置され、築城と同時に善利川（現在の芹川）の付け替え工事が施された。これは、水運機能を軍事的にも流通的にも活用すること、河川の付け替えによって、

それまで湿地帯だったものを城下町形成が可能な地域に変えること、善利川の旧流路を濠として利用すること、などを目的としていると考えられるのである。

第3点は政治、経済の拠点として近世初期に成立した城下町だという点である。至近に戦国時代の佐和山城とその城下があるが、これを発展・継承したものではなく、彦根藩領民25万人に対する政治・経済の中心機能を果たす3万6千人の城下町が築かれたのである。そして流通機能を城下に取り込むために、中山道の宿場町である鳥居本宿と高宮宿、併せて、これらの宿場と城下町彦根を結ぶ切通道と高宮道（どちらも彦根道、脇街道とも呼ばれる）が整備された。



図1 彦根御山絵図左部分（出所）彦根市立図書館蔵

2) 城下町彦根の形成

城下町彦根は彦根藩の隆盛に従って、3期に分けて徐々に拡張整備された。第1期は彦根藩が18万石であった慶長8年（1603年）に始まる。善利川の付け替え、沼地の干拓工事が行われ、政庁および藩主の屋敷地である第1郭、上

級藩士の屋敷、藩主の下屋敷、藩校のある第2郭、中・下級藩士と寺社・町人の混在する第3郭、足軽・町人の混在地である第4郭が整備された。

第2期は30万石への加増に伴う家臣団増強の時期（元和期、1620年頃）であり、三重の

堀や堅固な石垣、櫓を備えた諸門も整備され、城下町が拡張された。武家屋敷を拡大し、足軽組が強化された。また、新たな町人街区を切通道・七曲り周辺、城下東部に設けた。

第3期は延宝期（1673年）から始まり、都市機能の充実化が図られ、18世紀末にはほぼ全容の完成を見た。

2 彦根旧城下町地区の近世遺構

残された近世遺構の特徴を次にみよう。第1は近世城郭、武家屋敷の基本的構成を保持している点である。天守を含む城郭施設、藩主・重臣・中級・足軽屋敷、藩校遺構が一通り残されている。

彦根旧城下町地区は、江戸期に創られた城下町を下敷きにして、幾多の歴史の変遷を経て、現在の姿に至っているが、その特徴を一言で言えば、わが国の中でも江戸期の姿を最もよく残す歴史遺産都市だということである。

第2は城下町機能を補完する遺構が残っていることである。堀（内・中堀）・水路・芹川に加えて、脇街道と宿場町、各所の寺院などである。

第3は町人屋敷の遺構が相当数見られることである。かつて伝統的建造物群保存地区の調査対象とされた魚屋町地区、立花町地区、外船町地区、本町地区、花しょうぶ商店街地区、七曲り地区などである。

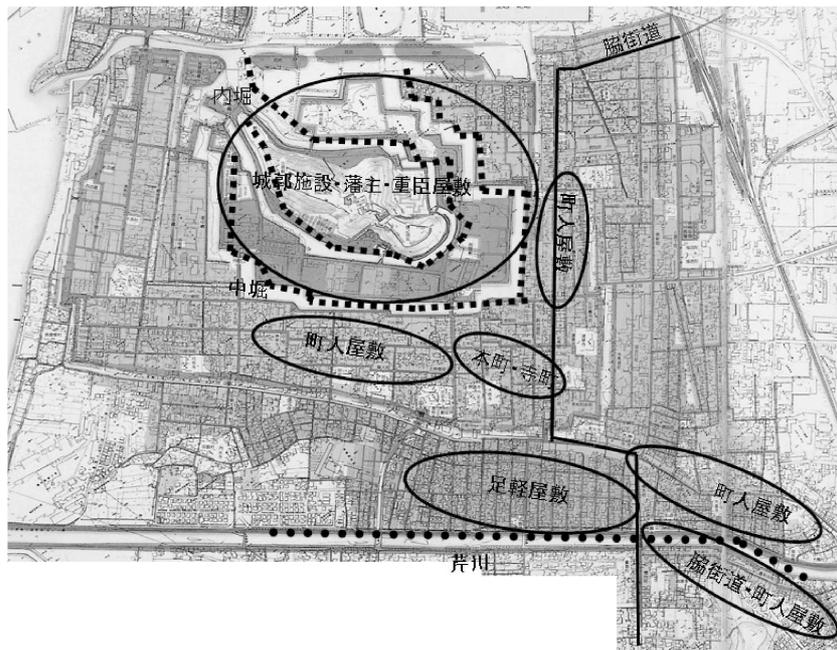


図2 彦根旧市街地の近世遺構

3 彦根歴史まちづくりに向けた実践活動

1) 発端としての日仏景観会議

発端は、滋賀大学産業共同研究センターが中心になって主催し、平成15年（2003年）に開催された、「日仏景観会議・彦根」であった。その目的は、「日本の景観について、フランス

との情報交流を行いながら、国際的視野にたつて議論することにより、ひろく景観に対する意識の向上を図るとともに、優れた景観の形成に寄与すること」で、テーマは「時のデザイン」とされた。

都市景観を守り育てるためには、各時代の歴史の掘り起こしに加えて、市民がそれを知り楽しみ慈しみ、未来に向けて働きかけていく、そ

れを行政を始めとする関係者が協力・支援していくことが必要だとの考え方からである。

市民が参加しやすい祝祭日の会議初日は、彦根の価値の再発見を目指して、歴史解説、まち探索、対話を行った。歴史解説は、近世、近代、現代の時代区分での彦根の形成史であった。

会議二日目の討論の後、「未来に向けた宣言」を採択し、実現に向けた努力を確認した。宣言の内容を記すと、1) 世界遺産にふさわしい彦根都市ビジョンの作成、2) 彦根らしい都市景観の考え方や制度の研究と実現努力、3) 歴史・文化や技術の調査・研究、教育と学習、4) 街なか観光や街なか居住の振興、5) 永続的な「彦根景観フォーラム」の組織化の5点である。

2) 推進組織・彦根景観フォーラムの設立

「未来に向けた宣言」を実現すべく、早速、平成16年（2004年）8月に、NPO法人「彦根景観フォーラム」が設立された。日仏景観会議に係わったメンバー（滋賀大学・滋賀県立大学の教職員、彦根市・商工会議所・観光協会の職員、建築士会・商店街連盟・ガイド協会のメンバーなど）が主たる会員である。この時に設立された「彦根景観フォーラム」がまさに推進組織として、以降の活動を支えているのである。

3) 彦根歴史まちづくりに向けた実践活動

(1) まちの歴史を知ったうえでの小さな旅

歴史講演会、まち歩きなど、日仏景観会議と同様のイベントを毎年実施してきた。歴史講演

会としては、「彦根の近世・近代・現代のまちづくり」、「幻の湖東焼」、「朝鮮通信使」、「脇街道と足軽組屋敷」などのテーマを随時取り上げて、専門家の話を拝聴する。歴史的位置付けを知った上で、その話にちなんだ名所旧跡をガイドの説明を受けながら小さな旅として散策する。なお、専門家の話は地域の歴史を語るものとして記録し、何時でも読み返せる状態にしている。

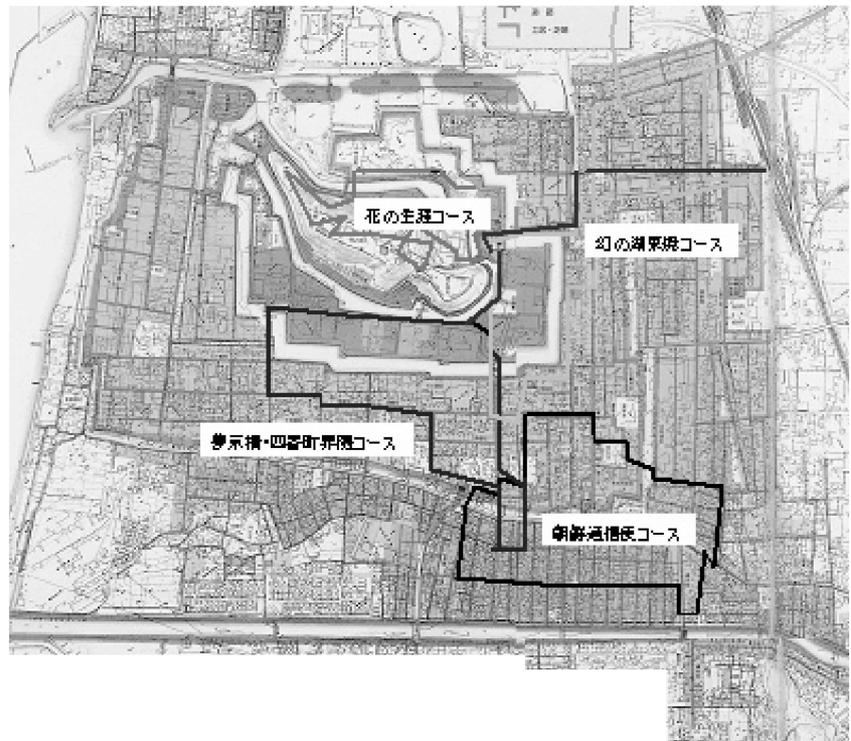


図3 小さな旅のコース

(2) 歴史的風致ゾーンの発見

江戸期・明治期・大正期・戦前期に建てられた古民家を地図上にプロットする調査を行い、このデータを逐次アップ・ツー・デイトしている。また、デジタルデータ化を行い、いつでも分析できる状況にしている。このような伝統的な建造物が、いつでも復元・活用できる状況をつくり出すために、正確な実測図面づくりを行っている。さらに、往時の景観の状況を示す古写真を発掘しデータ化を図っている。

これら基礎的情報を使って分析した結果から導かれた成果の一つが、歴史的風致ゾーンの発見である。往時の土地利用規制と残存古民家の分布を重ね合わせたところ、城郭内曲輪ゾーン、

商人町人ゾーン、足軽組屋敷ゾーン、脇街道ゾーン、芹川雨壺山ゾーンなどが往時の風致を残すゾーンとして析出された。

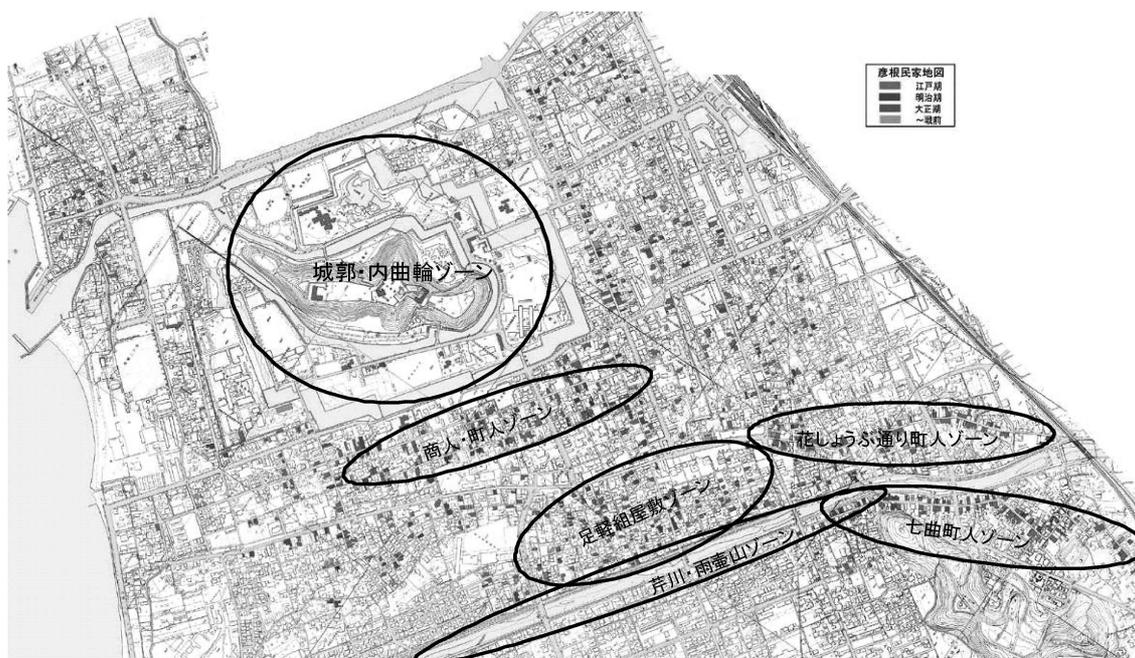


図4 古民家分布と歴史的風致ゾーン

(3) 空き古民家を再生活用する活動

〈ひこね街の駅〉

歴史まちづくりを進めていくためには、現在空き家状態に置かれている古民家がこれからどのように活用できるかを自ら実験することによって、再生活用モデルを示す努力が必要である。このような観点から、取り組んでいるケースを紹介する。

歴史的風致ゾーンを構成する花しょうぶ通り商店街から、「250年前に寺子屋であった町家が現在、使われていない。街のランドマークなので是非、活用したい。」という相談があった。

当物件は、彦根城からも彦根駅からも離れた、近隣商店街の中にある。地元の滋賀大学と協力して、エリアマーケティング・建物実測調査を実施し、商店街メンバーも参加したワークショップで「街の駅」という構想を考案した。この構想は、わざわざ人々がやってくる、「人と情報が集まり散ずる街中プラットフォームにし

ようとするものである。

国の助成制度等を用いて建物改修・トイレの水洗化などを行い、'05年の9月にオープンした。1号店の「寺子屋力石」は、「学び」をテーマとして、創造性を高める学習・研修、散策者への情報提供、生活者の居場所提供を行っている。NPOメンバーが講師を勤める商人塾・教職志望の学生による子供たちの学舎・陶芸教室・甲冑教室・俳画教室、水彩画展・版画展・写真展、談話室・茶話会、喫茶コーナー・展示ボックスなどが主要な活動内容である。

活動の中から、手作り甲冑や島左近・石田三成のキャラクターが誕生した。これらを事業化するためにLLPを組成し、2号店の「戦國丸」を開設した。彦根城築城400年祭および歴女(歴史好きの女性)の出現もあって、全国各地から来店者がくるほどの人気を博して、街の駅の経営は回り商店街は活気を増している。

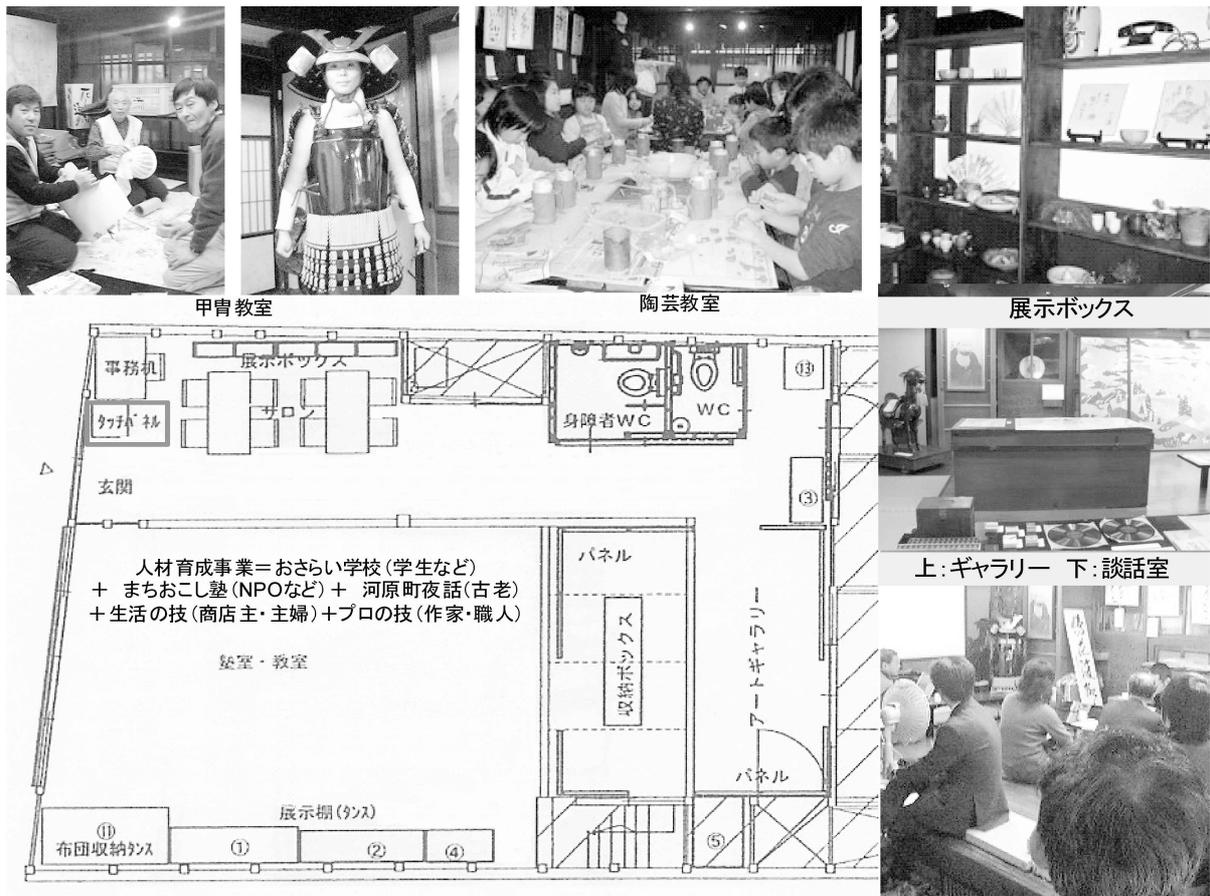


図5 ひこね街の駅「寺子屋力石」

(4) 彦根城築城400年祭を協賛する活動

〈談話室と遊び博〉

2007年3月から、「彦根城築城400年祭」が開催される。わがNPOは、これに協賛する事業として「あそび博」を考案し、1年前の1月から準備を始めた。「あそび博」とは、市民プロデューサーによって、地元の人しかわからない「通」なまち遊びを作り出し、多くの人を楽しみながら、街の魅力を発見するイベントである。

市民プロデューサーの発掘と「通」なまち遊びの発見がこの企画のキーである。そこで行った仕掛けは、市民が誰でも気楽に話せる「談話室」の開催である。話しやすい雰囲気の中で、コーヒーを飲みながら、自分が楽しみで行なっている活動を生き生きと紹介し、それを話の種にみんなで語り合う。「それぞれの彦根物語」

と称し、2006年5月から開始した。

月に数回、土曜日の朝10時半から12時まで、ひこね街の駅「寺子屋力石」で開き、これまでに70回積みあがっている。初回から20数回の談話室が一つの区切りであった。その時期の話の特徴をみると、内曲輪・城郭関連（「その後の直弼」「新しい人間像をさぐる」）、芹川関連（「私の好きな彦根のスポット」「林檎・ワリング・彦根りんご」「絵本から広がる」）、脇街道関連（「お茶と庭」「一期一会」「袋町今昔物語」「伝統的建築物」）、足軽組屋敷関連（「水戸から見た」「彦根の女性の旅」）、佐和山関連、天寧寺関連などが語られており、主要な活動の場が鮮明に浮かび上がってきた。

また、語り部として、教員・NPOメンバー・郷土史家・学芸員・建築関係者・女将・経営者などが登場してきたのである。

表1 それぞれの彦根物語

回	月日	お 話	語り部
1	5.13	「その後の直弼: 20世紀に生きた郷土の偉人」	教員
2	5.20	「私の好きな彦根のスポット」	教員
3	5.27	「林檎・ワリンゴ・彦根りんご」	学芸員
	6.10	景観シンポ(彦根の脇街道と善利組屋敷)	教員
4	6.17	「彦根で出会ったもの」	NPO
5	6.24	「彦根あれこれ」	NPO
6	7.01	「井伊直弼～新しい人間像をさぐる」	郷土史家
7	7.15	「お茶と庭」－白露庵見学 茶室と茶庭－	教員
8	7.22	「ヴォーリス建築と再生」	建築士
9	7.29	「伝統的木造建築と私」	棟梁
10	8.05	「青い目で見る彦根: 30年以上彦根に住んでいる経験」	教員
11	8.19	「江戸時代、彦根の女性の旅－自芳尼『西国順拝名所記』から－」	教員
12	8.26	「絵本から広がる世界『私のギャラリーに、ようこそ!』」	画家
13	9.02	「水戸から見た『桜田門外の変』－彦根と直弼－」	NPO
14	9.09	「新しいまちづくり型観光」	経営者
15	9.16	「料亭の女将が語る『一期一会』」	女将
16	9.23	「当世観光の裏事情」	経営者
17	10.28	「佐和山を10倍楽しむ法」	NPO
18	11.04	「女将が語る『袋町今昔物語』」	女将
19	11.18	「伝統的建築物群保存地区(伝建地区)のまちづくり」	学芸員
20	11.18	「私達のボランティア支援について」	NPO

「それぞれの彦根物語」で取り上げられた場を、語り部に案内してもらう機会を、2006年11月23日に「プレ彦根あそび博2006」として設けた。その時は3コースであった。本番の2007年春と秋に「それぞれの彦根物語」の蓄積を活かした11のコースで合計16回のまち歩き博覧会を実施した。「芹川堤の自然と遊ぼう」、「雨壺山の歴史・自然と遊ぼう」、「脇街道・七曲がりて遊ぼう」、「高宮宿で遊ぼう」、「善利組屋敷界隈で遊ぼう」、「内曲輪・城郭で遊ぼう」、「天寧寺で遊ぼう」、「佐和山周辺で遊ぼう」、「鳥居本宿で遊ぼう」などである。

どのコースも、会員を含めて多くの人たちの協力で実現している。まち歩きの先頭に立って地域の暮らしや歴史、川や植物などをガイドしてくださった語り部。未公開の社寺や建物、自宅や作業場をみせていただいた人達。さらには、お茶席を設けたり、私蔵の絵画や書を展示して

いただいた方。遠くの友人を誘って参加していただいた方もある。これらの人々をつなぎ、丁寧な案内資料を作って「楽しいまち歩き」をプロデュースした会員の皆さんの力も目を見張るものがあった。

その根底には「彦根を愛し、よりよくしたい」という人々の純粋な気持ちがあると思う。このような思いが、多くの人たちの知恵と善意が集まったのだ。

「彦根あそび博」最終回は、善利組足軽屋敷を巡るコースとなった。そこで、初めて消滅の危機にあった辻番所・足軽屋敷が公開され、その後、辻番所・足軽屋敷を買い取るトラスト運動へと発展した。

(5) 歴史的建造物を守る活動

<足軽辻番所>

江戸時代、彦根城の外堀と芹川に挟まれた芹



辻番所 買い取りへ

彦根市 指定文化財目指す

彦根市岸橋2丁目にある旧彦根藩の辻番所付き足軽屋敷（18世紀前半）を、同市が買い取り保存していく方針を固めた。市が2日発表した6月定例会提案の補正予算案に購入費などが盛り込まれた。資金苦しいに迫った市文化財保護基金から約800万円を支出する。議会の承認を得て購入が決まれば市の財産として修復、今秋にも市文化財の指定をめざす。

辻番所（手前）のある足軽屋敷。角に付いている格子がのぞき窓＝彦根市岸橋2丁目

市文化財課によると、辻番所は江戸時代に彦根城の88の外側の足軽組屋敷一帯に38軒が配属されていた。角に2面あるのぞき窓があり、外敵や不審者を見張る交番のような役目を果たしていたという。現在は岸橋2丁目の辻番所が1軒残っているだけという。同じような辻番所は全国にもあまり例がなく、歴史的にも価値が高いという。

足軽屋敷は現在、空き家だが、大阪府豊中市に住む人が所有している。市は足軽屋敷と辻番所の敷地合わせて約280平方メートルを購入する方針。老朽化が進んでいるため、同課は調査をした後、修理を入りたいとしている。

昨年12月には、大学関係者や市民らが発起人となり、この足軽屋敷を買い取り、保存と再生をめざす「彦根市民家再生下（下）」（理事長・山崎一樹）を設立。これまでに約700万円の寄付金が集まった。同課によると、今年8月に山崎理事長から同市に文化財保護基金を使った購入案の打診があり、約1カ月間かけて検討してきたという。

山崎理事長は「市が買い取ってきちんと保全するのがいい。寄付金のうち800万円は文化財保護基金に寄付し、残る100万円と今後集める寄付金は、建物の修復や耐震工事などに充てたい」と話している。

朝日 朝・夕刊
平成20年6月3日(火) 本紙

図6 足軽辻番所

橋地区には、足軽屋敷700戸が立ち並んでいた。この地区のほぼ中央部に、今でも「辻番所」を備えた足軽屋敷（以下、足軽辻番所）が佇んでいる。

足軽辻番所は、野に埋もれているものの歴史を証言する貴重な遺産である。平成19年（2007年）夏、売却話が持ち上がった。本来は市が買取って所有し、市民が自分たちの資産として自主的に運営すべきところ。所有者の事情を考えると迅速な行動と決断が必要で、行政のスピード感では対応に限界がある。

そこで、市民からの浄財を集めながら売買交渉を進め、念願かなった暁には、市民による自主運営を担保しつつ市に寄付するという道筋を描き、トラスト運動を展開した。多くの市民や

行政・議会に熱い思いが伝わった。運動開始1ヶ月後には、約60人が発起人になって設立総会を開くことができた。

同年12月議会で「文化財保護基金」が制定された。「足軽辻番所のような案件に対処するため」という説明から、この活動が影響を与えたのは明らかである。残念なことに、この基金によって辻番所問題は解決したと受け取られ、その後の募金は低調に留まった。

集めた資金とこの基金を組み合わせ、市民と行政の協働によって当初の思いが実現できないか。資金の市への寄付、それを使った「市による買取・民による自主運営」を提案した。市当局の決断で市による買取が決まり、平成20年（2008年）の8月に市の所有となった。現在はトラスト運動をともに行った地元住民の皆さんと協力連携して、永続的な自主運営の仕組みを築いている最中である。

4 公的計画との共振

彦根のシンボル彦根城は、平成4年（1992年）にわが国が世界遺産条約を締結した時点で、暫定リストに登録された。しかし、それ以来長

年に渡って、本格登録への動きはみられなかった。それが、上記のまちづくり活動の影響もあって、本格登録に向けた機運の高まりが見られるようになってきた。

「彦根城および城下町の世界遺産登録」がはじめて彦根市の公的計画に記載されたのは、筆者が委員長を務め、平成19年3月にまとめた「彦根都市マスタープラン」であった。これを受けて、平成19年6月に「彦根市景観計画」が策定され、「城下町景観形成地域」が設けられた。これは彦根の旧城下町全域を歴史的景観を重視する地域に指定するものである。

その直後から、市長もメンバーに加わった「世界遺産懇話会」が設けられ、世界遺産登録のコンセプトの検討が始まった。そのコンセプトにおいて、城郭内曲輪ゾーン、商人町人ゾー

ン、足軽組屋敷ゾーン、脇街道ゾーンが世界遺産城下町のコア・ゾーンに想定された。市をあげて、歴史的遺産や文化、産業、自然を本格的に調査する段階に進んだのである。

また、平成20年5月の国会でいわゆる「歴史まちづくり法」が制定され、彦根市が提案した彦根歴史まちづくり計画が政府の1号認定を受けた。この計画において、足軽辻番所が保存修理の対象に位置づけられた。また、花しょうぶ通りゾーン、七曲ゾーンが伝統的建造物保存地区の指定に向けた調査を行うことになった

このように市民から始まった、彦根歴史まちづくり構想実現の活動が、地元の行政はもとより国の政策とも共振してきたのである。

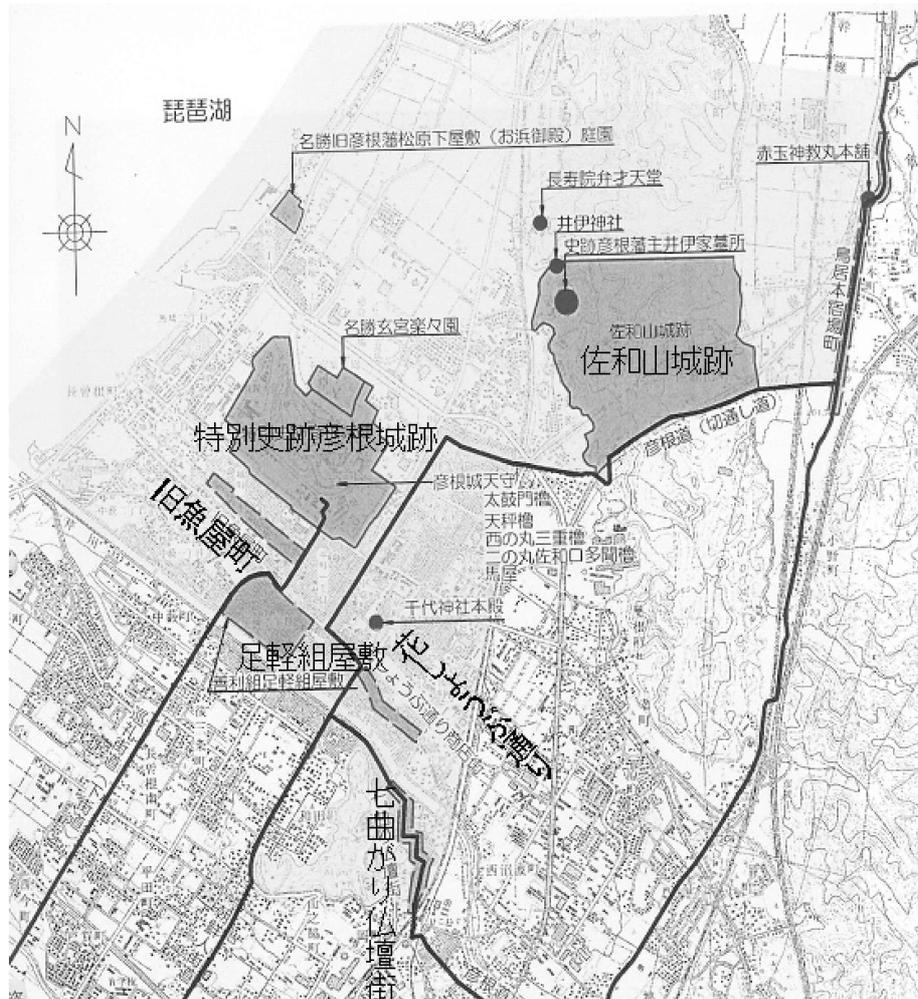


図7 世界遺産・彦根城下町の構成案

歴史・文化・まちづくり分野のNPOネットワーク ～「清須越400年事業ネットワーク」の事例～

NPO法人揚輝荘の会 専務理事

清須越400年事業ネットワーク 幹事 佐藤 允孝

はじめに

「まちづくり」の調査・研究やまちづくり活動の支援などの事業を行っている、(財)名古屋都市センターでは、平成21年度のまちづくり団体交流会のテーマを、「まちづくり活動団体の連携・ネットワーク」として開催した。これからのまちづくりの推進には、「ネットワーク」が求められるのではないかというメッセージが伺われる。

河村名古屋市長の2大公約の一つに、「地域委員会」がある。市民自らが市の予算の使い方を地域で決め、地域の課題に取り組むというもので、「新しい住民自治の仕組み」だといわれている。学区連絡協議会、区役所、地域NPOなど既存組織との関連など、今後の検討課題は多いが、これからの地域のまちづくり推進組織となっていくであろう。

また、10月の鳩山首相の所信表明演説でも、「市民」「NPO」「ボランティア」「まちづくり」というキーワードが頻りに登場し、地域のことは住民が主体的に考え決定し、主役になって活気に満ちた地域社会を造っていく、「地域主権」改革を断行するとうたっている。

地域の問題は、「安心・安全」「子育て・福祉」「教育・生涯学習」「自然・環境」など市民生活に関するあらゆる分野を含むが、私たちが関わっている、「歴史・文化・まちづくり」の分野も地域社会の重要な要素である。

こうした現代社会の方向性・キーワードを踏まえて、「歴史・文化・まちづくり系のNPO」

についても、体力を強化し、より効果的・効率的な活動を展開することによって、地域社会に貢献していくことは、時代の要請だと考える。

そのためには、そうしたミッションを共有するNPOのネットワーク組織を構築し、「まちづくり」活動を推進していくことによって、地域の市民・住民への、より有益で高質な情報やサービスの提供が可能になっていくだろう、という仮説のもとに、本年5月、「清須越400年事業ネットワーク」を立ち上げ、活動を進めている。

このレポートは、その活動の中間報告だが、試行錯誤の中にあるので、その評価については、十全に行われていない。

1 「清須越400年事業ネットワーク」設立の経緯

- (1) 平成20年9月 名古屋都市センターが「グループ交流会」企画案募集
(財)名古屋都市センターは、「地域に



佐藤 允孝

さとう よしたか

早稲田大学卒業
(株)松坂屋退職
学芸員

<所属団体>

NPO法人揚輝荘の会 専務理事・事務局長

清須越400年事業ネットワーク 幹事

NPO法人生涯学習ネットワーク中部 監事

中京日本香港協会 理事

城山・覚王山地区魅力アップ事業実行委員会 委員

<著書> 「揚輝荘と祐民」(共著 風媒社 2008年)

根ざしたまちづくり」をテーマに、まちづくり団体自らがテーマを提案して「グループ交流会」を開く、企画案の募集を行った。

「NPO法人揚輝荘の会」では、今後の活動課題として検討をしていた、「清須越400年」をテーマにした応募を検討し、数団体に協働の呼びかけを行ったところ、大筋について賛同が得られたので、“「清須越400年」プロジェクトの立ち上げ”というテーマで共同提案し、採択された。

(2) 平成21年2月1日 「平成20年度まちづくり団体交流会～グループ交流会～」

テーマ：“「清須越400年」プロジェクトの立ち上げ～人、もの、文化の動きをたどり、名古屋のルーツを探る～”

参加人数：9団体、28名

企画団体：NPO法人揚輝荘の会

協力団体：①美濃路まちづくり推進協議会
②那古野一丁目町づくり研究会
③東区まちそだての会

プロジェクト設立の趣旨・目的・活動・組織などの試案について説明。設立については、参加者全員からの賛同を得たが、組織・運営に関しては、いろいろの意見があった。

(3) 平成21年3月7日 「平成20年度まちづくり活動団体交流会～全体交流会～」

テーマ：“まちづくり活動団体の連携・ネットワーク”

主催：名古屋都市センター

参加人数：16団体、30名

「清須越400年ネットワーク（仮称）」について設立準備の経緯、考え方、今後のスケジュールを報告して交流会参加団体にネットワーク参加を呼びかけた。

「会員募集チラシ」を作成し、多数の団体・個人へ設立団体への参加、総会への出席を呼びかけた。

(4) 平成21年4月29日 「清須越400年事業ネットワーク」設立準備総会

設立までの経緯と今後の予定、設立趣旨、組織・役員、会則、事業計画、分科会組織（役割分担）、収支計画、などを提案し、参加者の賛同を得た。

出席人数：11団体、24名

入会申込者：45名

ゲスト：2名（名古屋市職員）

(5) 平成21年5月10日 「清須越400年事業ネットワーク」設立総会

出席人数：13団体（内登録団体4）、37名

登録会員：50名（内登録団体所属34名）

ゲスト：名古屋市、西区、清須市、（財）名古屋都市センター、（財）名古屋市文化振興事業団、（財）名古屋観光コンベンションビューロー、NPO法人ボランティアネイバース

2 ネットワークの概要

(1) 設立趣旨

「清須越400年事業ネットワーク」は、名古屋及び周辺の歴史的・文化的な資源を活用した、まちづくりに関わっている団体および活動家のネットワークを構築し、より広い分野・地域での情報交換を図るとともに、具体的な事業の実施を目標にした協働により、総合的で効率的な活動を推進することによって、市民のためのまちづくり・生涯学習に貢献することを目的とする。単体の団体では確保が難しい情報、人材、労力、資金を共有・

活用することによって、より幅の広い、質の高い活動成果を達成し、多様な市民のニーズに合った情報サービスやコミュニティ構築の拡充を図る。

(2) テーマ

当初の事業として、近世名古屋のまちづくり基盤となった「清須越400年」をテーマとする。平成22年（2010）は清須越400年のスタート年であり、時宜を得たテーマであると同時にフィールドの広がりに対応できるネットワーク・協働に適したテーマである。この節目に当たって、清須越を総合的にとらえて、情報を収集・分析し、現代社会にどのようなつながっているかを確認することによって、市民のアイデンティティと将来方向を展望することは、持続可能な社会の構築にとって重要な課題である。

この会の事業は、当初事業（清須越400年）で終わらせるのではなく、並行して歴史的・文化的・まちづくりに関する次の事業の検討を進めていく。テーマとしては、例えば、「歴史的建造物を活かしたまちづくり」「芸術・芸能によるまちづくり」などが考えられる。

(3) 事業計画

事業は、当面、次の3分科会と事務局が連絡・調整して推進する。

A 調査・研究・分析

清須越に関する文化的資産（人物、寺社・建築、芸術・芸能、物づくり・産業、町づくり・町名、史跡・古文書等々）のルーツ・歴史を調査・研究によって検証し、現代におけるその価値を分析・確認するとともに、将来的な方向性・意味づけを展望する。また、それら資源・資産を次世代へ継承するために情報を制作分科会につなぐ。

B イベント

調査・研究に留めず、それを市民のために活用し、新しい価値を発見・付加するために各種イベント（学習会、セミナー・シンポジウム・討論会、まち歩き・ウォーキング、展示など）を企画・演出・実施して情報発信することによって市民にアピールする。

活動は、一般市民参加型を基本とし、それらが市民の目線・ニーズに合致すること、また、市民の生涯学習、社会参画、コミュニティの構築の推進に貢献することを目標とする。それによって、現代社会に求められる市民参加型・市民主体で持続可能な社会の構築を促進する。

C 成果物制作

それらの活動を一時的、単発的ではなく、継続的・組織的な活動として展開し、その結果を具体的でビジュアルな成果物（地図、模型、出版、映像、展示物、標識など）として残し、後世代につないでいく。

3 ネットワーク設計のポイント

この会は、それぞれ個別の会則（定款）、活動計画、活動フィールドを持つ既存のNPOと個人活動家が、固有の会則・組織を持つ新しいネットワークを造り、新規事業を推進しようとするものである。このようなネットワークは、「歴史・文化・まちづくり系」のNPOでは初めてのケースだといわれ、試金石としての意義があり、自負と責任感を持って取り組みたい。

(1) キーワード

A ミッション

設立趣旨、事業計画で掲げた目的、目標に立脚した明確なミッション（会の使命）

を判断基準とし、活動をする上でブレが発生しないことや、この会の必要性と独自性・先駆性を常に意識しながら事業を推進する。

B ネットワーク

ここでは、「ある目標あるいは価値を共有している人々の間で、既存の組織への所属、立場、地域の差異や制約を超えて組織的・人間的な連携を創りあげていく活動」とする。

C まちづくり

ここでは、「まちづくりとは、地域社会に存在する資源を基礎として、多様な主体が連携・協力して、身近な居住環境を漸進的に改善し、まちの活力と魅力を高め、生活の質の向上を実現するための一連の持続的な活動である」（日本建築学会編「まちづくりの方法」平成16年）を念頭に置いた。

D 生涯学習

新教育基本法第3条では、「・・・、その生涯にわたってあらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その（生涯学習）成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」とある。また、名古屋市新世紀2010計画、第3章市民の教育と文化では、「今後、・・・市民が、生涯を通じて身につけた知識や技術を地域や社会に還元する機会を充実させることが求められています」としている。

近年では、「生涯学習の地域社会への還元」がキーワードとなっており、ここでも、会員の活動、自立した市民の活動の両面からそれを視野に入りたい。

E 市民の目線

この会は一般市民に常に開かれており、市民への情報発信・サービス提供を図るため、市民の目線に立った参加型イベントを企画・推進するが、参加者からの質問・意

見を聴く時間を極力設け、市民からの情報収集に努めるとともに、そこで得られた情報を活動にフィードバックさせていく。つまり市民との双方向チャンネルの設定が重要であるとする。

(2) ネットワークの類型

A 分野

「まちづくり」活動の分野としてネットワークを組むには、「歴史・文化・まちづくり系」は適切な大きさだと考える（郷土史・民俗・古文書、芸術・芸能・音楽、歴史的建造物などを含む）。分野が広すぎても、狭すぎても活動を効果的・円滑に進めるのは難しい。

B 地域（活動フィールド）

「清須越」をテーマとする場合、関連エリアとしては、清須市、美濃路、西区、堀川、中区、東区、千種区にまたがる。発起4団体（企画・協力団体）は、これをほとんどカバーしているが、更に堀川や中区を活動拠点としている同系列の団体に協力・協働を呼びかけていきたい。

C 事業実施型

このネットワークの意図は、交流・懇親（仲良しクラブ）のみを目指すものではなく、また連絡協議会や調査委員会の性格でもない。具体的な活動・事業を新しいシステムで、すなわち多様な人材・情報・経験・ノウハウを活用し、継続的に推進することによって、地域市民への情報提供やサービスに貢献することを目標としている。また、活動成果を制作物にして市民への情報発信のツールに活用し、継続性を図る。

会 則 (抜粋)

- 第1条 名 称：この会は、清須越400年事業ネットワークと称す。
- 第3条 目 的：この会は、名古屋および近辺の歴史的・文化的な資源を活用した、まちづくりにかかわっている団体および活動家のネットワークを構築し、より広い分野・地域での情報交換や人的協働により、総合的、効率的な活動を行い、文化的・教育的な市民のためのまちづくりに貢献し、もって市民社会の実現と市民公益に寄与することを目的とする。
- 第4条 事 業：前条の目的を達成するために、当初事業としては、「清須越400年」をテーマとし、調査・研究、情報発信・イベント開催、成果物の制作、保全を行う。
次の事業としては、前条の目的に合った事業の開発、検討を続け、継続して会活動を推進していく。
- 第5条 活 動：前条の事業を行うために、次の分科会を構成して活動を実施する。
(1) 調査・研究・記録 (2) イベント・交流 (3) 情報提供・展示
(4) 制作 (5) 保全・管理 (6) 広報・普及
- 第6条 会 員：この会の目的に賛同して入会した団体を団体会員、個人を個人会員とする。
団体会員の所屬員の中から、10名までが登録会員として入会できる。
- 第7条 会 費：団体会員 年会費：10,000円 個人会員 年会費：1,200円
- 第8条 役 員：この会に会長1名、副会長2名以内、監事2名以内をおく。
会長はこの会を代表し、副会長は会長の代行を行う。
監事は業務の執行状況及び会計の状況を監査する。
- 第9条 総 会：毎年1回、総会を開催する。総会は、全会員で構成する会の最高決議機関である。
- 第10条 幹 事：この会に幹事、若干名を置く。幹事は、総会の決議事項および日常業務の執行を行う。
- 第11条 幹事会：事業報告、決算、事業計画、予算に関する各案を策定し、総会に諮る。
- 第12条 分科会：総会で決議した事業計画については、分科会を構成し、実施する。
分科会には幹事から選任した分科会長をおく。分科会長は、必要に応じて分科会を主宰、開催し、事業を推進するとともに、幹事会および事務局との調整を行う。
- 第13条 事務局：この会に事務局をおき、幹事会、分科会との調整事務および会の庶務を行う。事務長および事務局員は幹事会で選任する。事務局員は会の事務を分担する。
- 第14条 行政および他団体との協働：この会の事業実施に際しては、必要に応じて行政機関および他団体との協働を図る。

「分科会・事務局組織」

分 科 会			事 務 局
1 調査・研究・記録分科会	2 イベント・交流分科会	3 制作 分科会	
A 清須越寺社調査	A 学習会 (会員)	A MAP (まち歩き、移転)	A 会計 (会費)
B 清須越人物調査	B まち歩き	B 鳥瞰図 (清須⇒城下)	B 庶務 (書記・会議)
C 名古屋の芸術・芸能	C シンポジウム (討論会)	C 展示パネル (古地図等)	C 広報・渉外 (PR・協働)
D 古地図	D 展示会 (パネル)	D 標識 (寺社、道標)	D 資金計画 (助成金)
E 古文書	E 芸能講演会 (能・狂言、音楽)	E 出版 (小冊子)	E 連絡 (名簿・通信)

(3) 組織

A 会則・会費

当初は協議会方式などの柔らかいネットワークから始めた方がいいとの意見もあったが、ミッションの共有を確認するために会則を定め、また、責任感と帰属意識を高めるために、活動への参加ルール (いずれかの分科会に所属する) を定め、会費 (通信費程度) も徴収することにした。

B 会 員

ミッションを一にする4団体が発起団体となりスタートしたが、清須越のエリアを分担するにも、まとまり易さからも適正数

だったと判断している。

発起4団体に属さない個人会員については、多方面からの人材を求める観点から、交流会に参加した団体や発起人の人脈から広く呼びかけを行い、人材の発見・発掘に努めた。

C 分科会・役割分担

会員は、調査、イベント、制作の3分科会に所属し、事業を推進する。複数の団体に所属して活動しているメンバーが多いが、活動分野は自分の興味、得意技などで選び、投入パワーもセルフコントロールを原則とし、柔軟性・弾力性のある役割分担

制に配慮した。このようなケースでは、事務局の連絡・調整機能が会運営のポイントになると考えられるが、会員の中から事務局経験者、リーダーシップ・コーディネーター能力のある人、助成金獲得の経験者などを選び分担制をとった。

D 協働

名古屋開府400年記念事業実行委員会、(財)名古屋都市センターなど、行政や外郭団体および中間支援組織との協働を模索し、情報チャネルの拡大を図る。また、他のNPO団体についても、ミッションを共有できる部分で、相乗効果が期待できる場合は、積極的に協働を推進していく。

(4) 資金

資金源としては、各種助成金が最重要課題であり、発足直後から次の4助成に応募した。

- ① 名古屋都市センターまちづくり活動助成金(21年度)
- ② 愛知建築士会地域活動貢献事業(21年度)
- ③ 愛・地球博開催地域社会貢献活動基金(モリコロ基金)初期活動(21年度後期)
- ④ 名古屋開府400年記念パートナーシップ事業(22年)

4 現段階での評価

動き出して1年足らずで実績も少なく、評価するのは難しいが、ポイントについて振り返ってみる。

(1) ネットワークの効果

A 多様な人材と情報

会員は、常にネットワークのミッションを念頭に置き、キーワードに配慮しながら本来の所属団体とのバランスをとっ

て、新しい活動を進める組織が機能しつつある。

ネットワークを構成した各団体は、「歴史・文化・まちづくり」という基本方向では一致しているものの、その実績、人材、活動エリア(フィールド)などの違いがあり、当然、その目標、事業の考え方はそれぞれで、まとめるのが難しい一方で、多様な構成団体であるからこそ、単独では考えられなかった多様な人材・情報を集めることができた。

また、個人会員の多彩な人材の発掘・発見も収穫だった。その人材も単独では発揮できなかった能力が、新しい組織で花開いたともいえる(お寺オタクのSさん・Kさん、レポート名人のHさん、和装のひげ旦那・芸術家Kさん等々)。事業推進の大きなパワーとなり、多様な情報の収集源ともなっている。

B 市民参加と「清須越」

「まち歩き」では、一般市民にチラシで参加を呼びかけたが、その効果は限定的だった。しかし、DMやクチコミも含めて、回を追うごとに参加者が増え、最終回には、募集20名で参加者は30名以上になった。「清須越」に関心を持つ市民の裾野は広いことが分かるとともに、PRツールの拡充の必要性を感じる。

また、発起4団体は、それぞれに清須越に関連したテーマを既に持っており、新組織の活動にリンクして、スムーズに進行した。2010年は、清須越400年の本番であり、名古屋開府400年記念事業実行委員会、パートナーシップ事業採択団体(23団体)などとの更なるネットワーク推進が期待できる。

(2) 分担制

興味のある分野で可能な範囲で活動するという柔軟いしばりの分担制は、会員それぞれのニーズ・思い・意欲・得意技を引き出し、有効に機能していると考えられる。しかし、こうしたケースでは牽引車になる人物、調整力のある人材が不可欠である。発起4団体の代表で構成した幹事会に委ねているが、現段階では適切に機能していると考えられる。

しかし、ミッションの確認やシステム作りは基本的な問題だが、会の維持に最も重要な要素は、幹事会のメンバーの情熱と意欲である。これなくしては、高邁なビジョンも精巧なシステムも画餅に帰す。

(3) 事業について

A 調査分科会（寺社調査）

城下町・碁盤割周辺に集中している清須越寺院について現地訪問インタビュー調査を実施している。東寺町と南寺町の2チーム各4～5名編成で聞き取り、3点セットで資料を作成している。

- ①「清須越寺社一覧表」明治、大正の先進的調査をベースにした一覧表（138寺社）
- ②「清須越寺社調査票」裏面：事前調査内容、表面：今回調査内容
- ③「訪問レポート」聞き取り記録、写真すでに50か寺近くの訪問調査を終え、膨大な資料が蓄積された。今後120～130寺社まで進める予定である。調査・研究レポートとして出版物にする。引き続き、清須越人物の調査へと進みたい。

B イベント分科会（学習会・まち歩き）

清須越のルートを4地区（①清須越・美濃路、②美濃路・四間道、③名古屋城・武家町・寺町、④碁盤割）に分け、学習会・まち歩きをそれぞれで開催し



「寺院調査インタビュー」



「美濃路まち歩き」

て、情報の蓄積と発信を行った。体験型イベントは新鮮で発見が多く、市民に好評である。今後、シンポジウム型討論会、能・狂言公演会などを企画する。

C 制作分科会（マップ、展示パネル）

調査分科会のデータをもとに、清須越寺社移転マップの原稿を完成しつつある。その後は、古地図、絵図などに寺院・町家などのデータを乗せてまち歩きマップ、鳥瞰図、展示パネルを作成する計画を進めている。寺社調査の延長として、清須越寺社標識石の設置も検討中。

(4) 助成金について

資金源として4助成金に応募して順調に確保することができた（計120万円）。助成金を得ることによって、事業を「やらな

ければならない」状況となり、活動の牽引車となっている。

5 今後に向けて

(1) まちづくりネットワークの必要性

まちづくりを推進するには、単一のNPOでは、人材・情報・資金などが不足し、多数の団体が努力しても、力が散発化し、効果・効力が限定的となる。このパワーの分散によるロスを防ぎ、新しいパワーをコーディネート・創造することができるのがNPOネットワークであることを確信している。

また、市民主役のまちづくりのためには、イベントや制作物で情報提供をしていく事業型NPOネットワークが必要であり、効果的な形である。

まちづくり団体の協働組織としては、初めてのケースであるという自負と責任感でスタートしたが、まだその評価ができる段階ではない。しかし、これは小さな分野と規模のネットワークの事例ではあるが、今後、各種分野で、また規模やエリアに関わらず、このネットワークのコンセプト、ノウハウを応用した新しい組織・団体の設立が増え、自立した市民がまちづくりへ関わっていくシステムが広がっていくことが期待できる。

(2) 市民参加とPR

市民のイベントなどへの積極的な参加でネットワークと市民間の双方向の情報交換が進み、「市民が主役」の認識でまちづくりが促進されていく形は、望ましいシステムである。しかし、市民の中には、まちづくりへの参加意識・ニーズは潜在するが、

どこへアクセスしたらいいのか分からない人も多いと思われる。ネットワークによる一層のPR活動が必要であり、継続したイベントの開催、各種メディア、HP・ブログ、クチコミによる情報発信の強化が求められる。

こうして、地域の課題に自ら取り組む、自立した市民が増加していくことは、持続可能な地域社会の構築にとって期待される姿だろう。

(3) 継続性と更なるネットワーク

清須越を短期的な活動と考えると、次のテーマに向かって中期的な展望への準備を始めなければならない。その場合、スクラップ&ビルドか、看板の塗り替えかが問題となるだろうが、いずれにしても何らかの形でこのネットワークのミッションやノウハウが継続されていくことが望まれる。

私たちの活動は、市民の目線に立った地域密着型の草の根的なアプローチである。最近話題の地域委員会も自主的な地域市民の活動としては、同一ラインに立つものであろう。しかし、学区単位で全方位の地域委員会に対して、このネットワークは、通常、複数学区に関わる限定分野の活動である。これらの構造的な違いを認識したうえで、適切なアクセスをすることによって、地域委員会とも多チャンネルの協働ネットワークが可能となってくるだろう。実現すれば、それも今回のネットワーク志向の応用・展開の一形態となる。

ともかく、活動成果については、今後の評価を待たねばならないが、私たちは、「先進的事例」とか、「自立した市民の育成」だとかにはあまりとらわれず、気負わずに、みんなで楽しく活動実績を積み上げていくことが当面の課題だと考えている。



2010年『名古屋開府400年祭』



名古屋市総務局総合調整部
主幹（名古屋開府400年祭の推進）

利國 浩象

◇ 2010年“名古屋開府400年”

今年2010年（平成22年）は、名古屋開府400年の節目の年、次なる100年に向けた新たな飛躍のための出発の年です。

この記念すべき年に、市民のみなさんといっしょに、名古屋のこれまでを振り返り、これからを展望しつつ、名古屋のまちをおおいに盛り上げていきたいと思ひます。

そして、将来に向けて、みんなの夢をつないでいきましょう。

◇ まちづくりが始まって400年…

名古屋のまちづくりは、1610年（慶長15年）の「名古屋城築城」や「堀川開削」の開始と「清須越」（清須からの町ぐるみの移転）などに始まります。



（写真提供：名古屋城管理事務所）

◇ 江戸期の名古屋

＜武家文化の隆盛＞

関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、二度と戦いを起こさないという思いのもとで、豊臣秀吉の大坂城を超える名古屋城を築城し、同時に儒教の朱子学を取り入れ「君に忠、親に孝」、下克上の否定と「世襲制」の確立、諸大名には「質素儉約」「文武両道」「質実剛健」の思想を植え付けました。

その申し子の家康9男・徳川義直を初代藩主に迎えての尾張藩開府。家康から特に可愛がられた義直は、家康の教えを守り儒教を奨励し、名古屋城内に聖堂を作るほどでした。文武に優れ、能や鷹狩りも好んだ義直は「武」では、剣術を尾張柳生、砲術を天下一の稲富一夢から習得しました。

この初代藩主の気質が代々受け継がれ、尾張徳川家の家風になり、特に柳生新陰流は、義直、2代光友、3代綱誠など七人の藩主が家元になっています。

一方、「文」においても、義直は家康の膨大な書籍（駿府御譲本）を譲り受け、自らも書を著しました。こうした書籍類は知の財産として、尾張藩の知性と品格を高めました。

＜絢爛豪華な名古屋の美＞

初代藩主義直夫人・春姫から15代茂徳夫人・政姫まで、尾張徳川家に嫁いだ女性たちの“華やかさ”は御三家筆頭ならではのものです。春姫の輿入れは、熱田から名古屋城まで絢爛豪華な

花嫁行列が続き「名古屋派手婚」のルーツとも。その他にも「国宝・初音の調度」を持参した2代光友夫人・千代姫や九条家の輔君、近衛家の福君など良家の子女が嫁ぎ「雅で煌びやかなのお淑やか」な名古屋の美が生まれました。国宝・初音の調度にみられるような「装飾美」は、この時代に成熟し、絢爛豪華さの極みを迎えました。調度品の細部には源氏物語の和歌の文字が金銀の彫金で散らされ、その美しさと精緻な技術には目を見張られます。

かつては下着であった“小袖”が表着となり、その小袖を数領重ね着するなど独自の装飾文化が生まれました。また、江戸中期、町人たちは名古屋友禅など、より多彩な装飾に飛びついたので、武家や公家は伝統を重んじ刺繍を中心とした煌びやかな小袖を愛用しました。

<芸どころ名古屋>

義直は、3代将軍家光にお茶を献上した際、余興として披露された「小姓踊り」の輪の中に自ら入って将軍の前で踊ったといひます。それが評判となって「殿様踊り」と呼ばれました。義直は幼い頃から鼓を習うなど能の大変な愛好家であり、能・狂言の庇護者でもありました。義直の息子で2代光友は、この血を受け継ぎ、父親以上の能の名手でした。名古屋城内や江戸屋敷においてしばしば能を催しました。このため、多くの能役者を抱え、この人たちが現代に継承される尾張の能の基盤をなしました。現在でも、尾張藩お抱えの芸能は盛んであり、笛方の藤田流、小鼓方の福井家をはじめ狂言の山脇和泉流、邦楽では平家琵琶の国風音楽会など、今も名古屋の伝統文化を守り続けています。

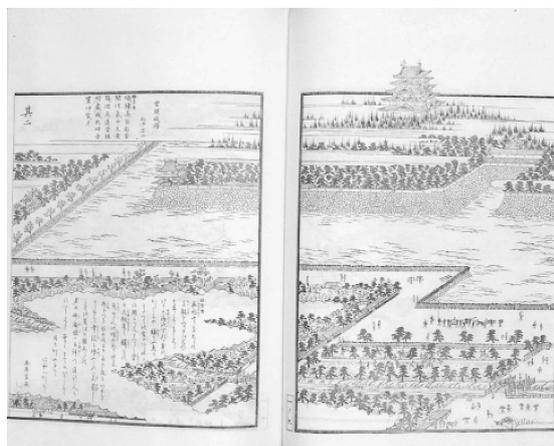
もともと名古屋は傾奇者を輩出する土地。織田信長、豊臣秀吉、前田利家、前田慶次など。

ところが、尾張徳川家になると質実剛健に。

そんな尾張徳川家の異端児が7代宗春で、自由奔放、大胆不敵なイメージ、ユニークで奇抜

な衣装は人々の度肝を抜いたとか。その宗春は、8代将軍吉宗の享保の改革に反発し、自著『温知政要』で「行きすぎた儉約は、かえって庶民を苦しめる」と記して、正反対の積極策を打ち出しました。これにより名古屋には芝居小屋や茶屋、遊郭が増え、全国から人が集まり、江戸・京・大坂に劣らない大都市へと変貌しました。同時に、茶道、舞踊、義太夫、常磐津、長唄、歌舞伎、浄瑠璃など幅広い分野の芸能文化が名古屋に定着し「芸どころ名古屋」の礎となりました。

【尾張名所図絵 名古屋城】



(名古屋市博物館所蔵)

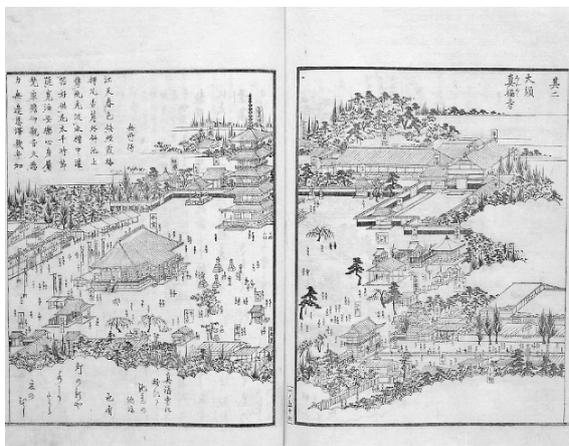
<匠の技、モノづくりのルーツ>

名古屋城「本丸御殿」は、建物の素晴らしさばかりでなく、伝統技術・技法の伝承ということにおいても意義があります。室内を華麗に彩る障壁画は日本最大の画家集団「狩野派」によるもので、当時最高の技術が集約されています。この建築技術は、箆笥、仏壇など尾張の伝統産業の源流となっています。

1598年（慶長3年）、日本初の機械時計が津田助左衛門政之によって製作されました。津田は、朝鮮から贈られた徳川家康の時計を修理し、同時にそれと同じ時計を作って献上。そのことが縁で家康に仕え、後に義直と共に名古屋に移住。その後、津田家は代々尾張藩の「御時計

師・鍛冶職頭」を勤めました。時計を構成するゼンマイ、歯車、カム、クランク、制御装置、脱進機といった機械技術は、からくり人形にも活かされ、尾張地域は、日本全国の「山車からくり」の3分の2が集中する“からくり人形の宝庫”になりました。名古屋にモノづくりの土壌を定着させた津田家の時計製造技術は、明治期に国産初の腕時計やポンポン時計を誕生させ、さらに「モノづくり王国」の中核をなす工作機械や自動織機など近代機械技術へと大きく発展していきました。

【尾張名所図絵 大須】



(名古屋博物館所蔵)

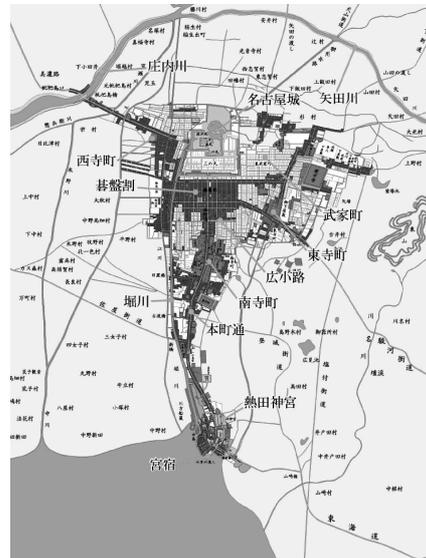
＜清須越で生まれた尾張名古屋の城下町＞

- 名古屋城周辺：現在、官庁街となっている「三之丸」には尾張藩家老の成瀬家、竹腰家など上級藩士の広大な屋敷が続いており、名古屋城正門の東南には東照宮と那古野神社が鎮座していました。
- 本町通り：城下町を南北に貫くメインストリートで、道幅は5間と広く、通り沿いの茶屋町には特権町人の茶屋家や伊藤家など豪商の屋敷がありました。いとう呉服店、十一屋呉服店など当時の人気店ものれんを掛けました。
- 大須：名古屋城の防御として作られた南寺町が現在の大須周辺であり、万松寺、政秀寺、

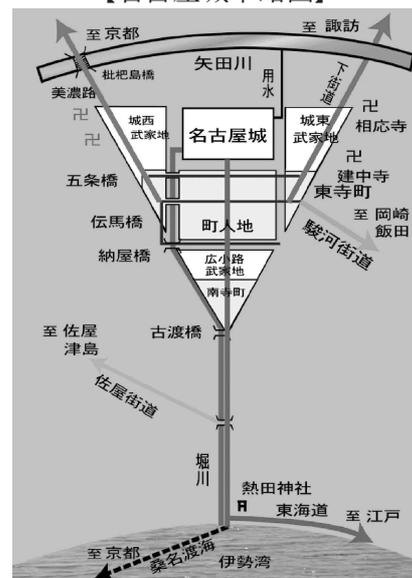
大須観音、七つ寺、西別院など大規模な寺院が並んでいました。境内では芝居小屋が建っており、当時から庶民が集まる繁華街として賑わっていました。

- 熱田：津島と並ぶ尾張最大の湊町。名古屋開府以前から熱田神宮の門前町として栄えており、東海道最大の宿場町・宮宿は常に大勢の人が行き交っていました。堀川を通じて名古屋城と結ばれており、尾張藩が熱田奉行所を置き統括しました。

【名古屋城下図（江戸時代後期）】



【名古屋城下略図】



(Network2010作成資料)

◇ 明治・大正期の名古屋

＜明治期：文明開化・街の変化＞

- ・ 木戸や番小屋が取り壊され、城下町に変化が生まれました。
- ・ 文明開化とともに西洋料理店、石油ランプ店、写真店、時計店などが出現し、街の景観が変わり始めました。
- ・ 広小路や外堀通には、真っ白な“洋風建築”が出現しました。明治10年には、愛知県庁舎や名古屋警察署も洋館で竣工しました。
- ・ 藩校や寺子屋に変わって、洋風の小学校が登場し、明治10年には、県立愛知医学校と愛知病院が開設されました。
- ・ 明治43年、名古屋初の“デパート”として伊藤呉服店が開店しました。ショーウィンドウ、シャンデリア、室内庭園、音楽堂、演舞堂、食堂など目新しいものが見られました。
- ・ 「殖産興業、富国強兵」という国家スローガンと国の産業振興策のもと、名古屋においてもエネルギー、繊維、窯業、木材等の会社、銀行などが設立されました。また、名古屋商法会議所、名古屋株式取引所、名古屋商品取引所なども開設されました。

【明治期の榮町】



(資料提供：名古屋市市政資料館)

＜大正期：さらに変貌する繁華街＞

- ・ “鉄筋コンクリート造”の建物が出現して

きました。名古屋で最初のものは大正2年の共同火災保険(株)名古屋支店です。

- ・ “高層建築”も出現しました。名古屋最初の高層建築は大正4年の北浜銀行名古屋支店(地上7階・地下1階)でエレベーターもありました。大正14年には、大津通に地上9階・地下2階の百貨店・松坂屋本店が開店しました。
- ・ 広小路通には、丸善、明治屋、ライオン食堂など新しい店舗が並び、カフェや喫茶店も出現しました。「広ブラ」が流行しました。
- ・ 大須は、映画・娯楽街として賑わい、数多くの映画館や劇場がありました。

＜インフラ整備・都市化＞

- 鉄道：明治19年に、武豊～熱田間で東海道線・武豊線が開通。東海道線は、さらに延伸され、同年5月に名古屋駅が開業しました。また、明治28年には関西鉄道会社線も開通しました。
- 市内電車：明治36に名古屋停車場～栄町間2.2kmで路面電車が開通。名古屋電気鉄道(株)により運営されました。その後、大正2年に市営化となりました。
- 電灯・ガス灯：明治20年に名古屋電灯会社が創設されました。明治22年には水主町付近に火力発電所が建設され、電灯がとまりました。明治40年にガス灯が初めて点き、明治43年には広小路通、栄町から熱田伝馬町に至る大津通線、本町などに点灯されました。
- 名古屋港開港：明治29年に築港工事を開始し、同40年に開港しました。
- 新堀川：精進川開削工事が明治43年に完成し、運河となりました。
- 上下水道整備：上水道の供給は大正3年から開始されました。下水道は大正12年に完成し、昭和5年に掘留、熱田の下水処理場が運転開始されました。

◇ 名古屋「モノづくり王国」

【からくり人形】



(玉屋庄兵衛作)

時計技術から発達した「山車からくり」は、明治期に入り工作機械や自動織機など近代機械技術へと大きく発展し、名古屋「モノづくり王国」の源流をなしてきました。

<伝統産業>

江戸期から名古屋は飛騨や木曾などの木材集散地であり、木材・木製品の産業が栄えてきました。この木材産業をベースに、明治期に仏壇・仏具、桐箆筒、合板、楽器等多くの産業が発展しました。

名古屋で育まれた木材加工技術と飛騨や木曾の良材をもとに、明治29年に旧尾張藩士：奥田正香により日本車輛が設立されました。当時、客車や貨車の車体は全て檜造りでした。

その他にも、モノづくりの技を継承してきた伝統産業として、有松・鳴海絞、尾張七宝、名古屋友禅、名古屋黒紋付染、名古屋節句人形、木桶、名古屋扇子、名古屋提灯、工芸菓子や和蠟燭などが継承されています。

<陶磁器産業>

地場産業としての瀬戸や常滑等の焼きものが、名古屋では近代産業、現代産業にまで発展しました。

その過程で、明治37年誕生の日本陶器合名会社と創業者・森村市左衛門の存在は大きいといえます。大正3年には日本初のディナーセットを製造し、ノリタケチャイナとして世界中に知られていきました。

電力輸送に欠かせない高圧碍子の需要が高まり、日本陶器から分離する形で日本碍子が設立されました。その後、昭和11年には、日本碍子から航空機用プラグをつくる日本特殊陶業が

生まれました。

こうした技術が、ファインセラミックスへとつながっていき、エレクトロニクス、エネルギー、エコロジー、バイオテクノロジー、燃料電池、光触媒、水科学などの幅広い分野で展開されています。

<自動車>

トヨタグループの創始者・豊田佐吉がトヨタ自動織機製作所を名古屋で設立したのが大正5年。以後、イギリスから伝わった近代の繊維産業と織機産業が日本で開花しました。

佐吉の長男・豊田喜一郎は自動車製造に尽くし、昭和8年にトヨタ自動織機製作所は自動車製造への進出を決定しました。その後、昭和12年にトヨタ自動車工業が発足しました。

<機械・航空機産業>

江戸期に発達した山車からくり。この源流は朝鮮から徳川家康に献上された機械時計を修理・製作した津田助左衛門や津田家、及び江戸期(享保18年)に京都から名古屋に来て、さまざまなメカニズムを考案し「からくり」という精密機械づくりを発達させた人形師・玉屋庄兵衛をはじめとする人形師にあります。機械産業のルーツはここにあるといえます。

江戸期から名古屋で育まれてきた和時計をつくる飾り職人の技や伝統が、明治期にボンボン時計の製造につながり、明治26年には愛知時計製造合資会社が創立されました。その後、日露戦争の影響を受け、愛知時計製造は精密技術を兵器製造に応用しました。

また、初期の航空機は木製の骨組みに合板や羽布張りであったため愛知時計の木工技術や精密機械技術が活かされました。そして、愛知航空機、三菱重工業、川崎重工業といった企業が航空機産業を発展させました。

◇ 名古屋開府300年祭

100年前の1910年（明治43年）は名古屋開府300年の節目の年、名古屋にとって大いに飛躍の年でした。

＜開府三百年記念祭＞

記念式典が明治43年4月12日に名古屋城内の第3師団東練兵場において行われました。

これに続いての4月12・13日には、からくり祭車25両が勢揃いの山車揃えや夜の祭車曳戻しという山車引き回し、武術試合（撃剣、柔術、弓術等）、競馬、棒の手、花相撲や仕掛け花火などが市内各所で繰り広げられました。

祝賀余興行列として6月6・7日に、市長以下総勢千名ほどが市内を戦国武将やその夫人などに扮し、仮装行列も挙行されました。

【鶴舞公園・奏楽堂】



（資料提供：名古屋市市政資料館）

＜第10回 関西府県連合共進会＞

名古屋開府300年祭最大の行事。

明治43年3月16日～6月13日の90日間、鶴舞公園で3府28県の参加により内国勸業博覧会に近いものが開催されました。

パノラマ館、天女館、不思議館など多くのパビリオンがつくられ、工業製品・農産物の出品、アトラクションや展示など多彩な内容で展開されました。高さ207尺（約62m）の広告塔

や名古屋城を模した愛知県売店もつくられ、市民に立体的に高いところから眺めるといふ近代都市ならではの新しい視点が提供されました。

その他にも、文明開化を感じさせるイベントや電灯等によるイルミネーションなど多彩に盛り上がりました。

また、会場の鶴舞公園内には、和洋折衷庭園や池が造成され、噴水塔、奏楽堂といった施設が建設されました。

＜開府300年祭関連事業＞

- 鶴舞公園開園：2009年に100周年を迎えた鶴舞公園は、当時、田畑であった土地を造成し、共進会の開催に合わせて造られました。
- 新堀川完成：鶴舞公園の西側を南北に蛇行していた精進川を直線化して運河としました。この川の土木事業で出た浚渫土砂で鶴舞公園予定地の田畑を埋め立て、公園用地をつくりました。
- 市内電車の新路線：市内で路面電車を運行する名古屋電気鉄道が、共進会開催の前月に新たな路線を開通しました。広小路通りの新栄から南に分岐して鶴舞公園前に至り、そこから西へ折れて上前津で熱田線に接続する「公園線」で、共進会会場に遊覧客を運ぶ重要な交通手段となりました。
- デパートメントストアの出現：共進会開会直前の3月に「いとう呉服店」が、江戸期以来の碁盤割・茶屋町から栄町交差点角に移転し新装開店しました。従来の座売り方式を改め、欧米流の百貨部門別対面販売とし、名古屋初のデパートが誕生しました。

・・・・・・・・

名古屋開府から400年・・・

名古屋はモノづくり文化が花開き、商工業が栄えるとともに、近世武家文化の薫りも色濃く残る、産業と文化が調和したわが国を代表する大都市として発展・成長を遂げてきました。

◇ 名古屋開府400年記念事業

＜名古屋開府400年記念事業の概要＞

事業名	名古屋開府400年祭
開催期間	2010年1月1日～ 12月31日(365日)
会場	名古屋市内各地
事業展開の コンセプト	夢、つなごう
テーマ	【メインテーマ】 未来の子どもたちへ 【サブテーマ】 歴史と文化 交流と祝祭 環境
主催	名古屋開府400年 記念事業実行委員会
事業内容	実行委員会主催事業 パートナーシップ事業等

名古屋開府400年記念事業は「子どもの参画」「市民・企業などとの連携」「広報展開」の三つを取り込んで、事業を計画し進めてきました。

こうした取り組みを通じて、名古屋開府400年に向けた市民ムーブメントを巻き起こしていきます。

○ 子どもの参画

「子ども実行委員会」をつくり、未来の名古屋を担う子どもたちが、自ら子どもたちの事業を企画し、名古屋開府400年祭に参画します。

○ 市民・企業などとの連携

「パートナーシップ事業」や既存の行・催事など市民・企業等の民間主催事業と連携しながら名古屋開府400年祭をつくっていきます。また、「はち丸サポーターCLUB」を結成し、市民とマスコットキャラクターが一緒になって、名古屋開府400年祭を盛り上げていきます。

○ 広報展開

子どもたちによって誕生した400年の旅人「はち丸」、やっとカメ「だなも」、なごやジョウ「エビザベス」、ねがいボシ「かなえっち」という4体のマスコットキャラクターが、さまざまな形で広報展開を図っていきます。イベント等でのグリーティング活動、キャラクターグッズの制作・配布、はち丸ブログなどウェブ上での発信、メディアとの連携、他都市へのPRキャラバン隊によるプロモーション活動などを実施していきます。

＜マスコットキャラクター＞



☆ 400年の旅人“はち丸”

名古屋開府と同じ1610年、名古屋生まれ。人とふれあうことが大好きで、名古屋のまちをあちこち旅している。

2010年、仲間とともに大好きな名古屋の400歳をお祝いしようとあれこれ活動中。



☆ やっとカメ“だなも”

美しい自然と平和、スローライフを求めて、世界を旅している。リュックには世界地図が入っている。ある日、名古屋開府400年をお祝いするため、どこからかやってきた。



☆ なごやジョウ“エビザベス”

趣味は400年の歴史と文化の勉強という好奇心旺盛な女の子。あたまのキンシャチはなかよしのオスだけ残して、メスの場所には大好きなエビフライのデコレーションを飾っている。



☆ ねがいボシ“かなえっち”

はち丸と一緒に旅をしている。夢を叶えたいという思いを持った人にパワーを与えてくれるという噂。

◇ 名古屋開府400年祭

名古屋開府400年祭を行うことが、市民のみなさんに幸福と自信をもたらし、未来の名古屋を担う子どもたちに、先人たちが積み上げてきた物心両面の蓄積を受け渡すとともに、夢を持って未来を切り開いていくきっかけとなることを期待しています。

そのために、次の三つの視点を満たす試みを、名古屋開府400年祭の中で進めていきたいと考えています。

〔1〕名古屋の埋蔵金発掘

私たちの住んでいる名古屋のどこが自慢できるのか、身近なところにある名古屋の魅力を、市民のみなさん総がかりで探り出していきます。

〔2〕祭りの復活

名古屋がかつて文化と祭りの国であったことを思い出し、そのことの幸運と喜びを体現するために、市民のみなさんに祭りの主役となっていただきます。

〔3〕大都市の中で自然を活かし続ける試み

大都会・名古屋にいまも残っている“自然”といった環境、これも市民のみなさんの貴重な財産であるということを認識し大切にしていきたいと思えます。

名古屋開府400年祭は、名古屋開府400年記念事業実行委員会主催の「通年事業」と「期間事業」及び実行委員会と民間等との「共催事業」、「パートナーシップ事業」を含む民間等主催の行・催事などが広く連携して一年間展開していきます。

◇ 400年祭の主なイベント等

<<< 実行委員会主催の通年事業 >>>

○ 夢なごや400

“過去”“現在”“未来”の3つのテーマから、名古屋の『魅力』と『夢』を各区ごとに地域・市民団体・学校・行政の連携により掘り起こし、これまでの400年を振り返るとともに、将来を展望し、未来の名古屋を担う子どもたちに継承していきます。

○ 企業・市民・NPOコラボ400

“協働”をテーマにワークショップや講座、フォーラムなどを開催し、名古屋圏における企業・市民・NPOの協働意識の向上をうながしていきます。



<<< 実行委員会主催の期間事業 >>>

▽ オープニング セレモニー

平成21年12月31日から平成22年1月1日にかけて、名古屋城で、開府400年の幕開けを、多彩な仕掛けにより華々しく祝うカウントダウンセレモニーを実施しました。

▽ オープニング記念コンサート

平成22年1月17日に、市民会館で、子どもたちとプロの奏者の共演により、名古屋開府400年の振返り映像を織りまぜ、いろいろな形での市民参加を得て、オーケストラコンサートを開催しました。

▽ 記念式典

平成22年4月に、国際会議場において、記念映像・ダンス・ミュージカル・オーケストラなど多彩なパフォーマンスや演出を盛り込み、子どもから大人まで幅広い層が参加できるステージを展開します。

▽ 記念誌

平成22年4月中の発刊を目途に、「まち」「食」「暮らし」などの観点から、400年の歴史の中で培われた名古屋の魅力や醍醐味を振り返る内容の記念誌を、荒俣宏ゼネラルプロデューサーの監修により作成します。

▽ なごや☆子どもCity 2010

平成22年8月、子どもたちが夏休み中に2週間ほど、中小企業振興会館で「子どもたちによるまちづくり」などの体験事業を実施します。

▽ 記念フォーラム

平成22年9月に、市民会館で「夢なごや400」の集大成として、フォーラムを実施します。

▽ 「清須越 夢歩き」提灯行列

平成22年10月に、清須市内から名古屋城までの行程で、夜のウォークイベント「市民参加の大提灯行列」を実施します。

同時期に清須市が開催予定の「清須越400

年事業」と連携します。

▽ 大山車まつり

平成22年10月に、市内に残る山車十数輦を名古屋城に揃え、また、名古屋城から旧城下町内を南に伸びる本町通りを山車曳きします。

▽ クロージング記念コンサート

平成22年12月に、市民会館で、開府400年祭の記録映像などで2010年の1年間を振り返りながら、いろいろな形での市民参加も得て、子どもたちによる合唱団とオーケストラの共演によるコンサートを実施します。

▽ 煌めきの光ファンタジア

平成22年12月に、開府400年のフィナーレを飾るイベントとして、テレビ塔などをイルミネーションで装飾するとともに、テレビ塔周辺での賑わいを創出します。

こうした取り組みを通じて、これまでに築きあげてきた名古屋の“魅力”と“財産”を市民のみなさんと一緒に見つめ直し、より多くの方々を知っていただき、郷土への誇りと愛着をいっそう深めていただくことが、名古屋のまちが将来にわたって発展し続ける礎になるものと思います。



名古屋開府400年祭の内容やイベント情報などについては「名古屋開府400年祭公式ウェブサイト」をご覧ください。

URL : <http://www.nagoya400.jp/>

利國 浩象

としくに こうぞう

1983年 名古屋市採用
1995年 総務局交通空港対策室主査（中部空港調査会派遣）
2001年 " 国際博覧会推進室主査
2006年 市民経済局付主幹（名古屋フィルハーモニー交響楽団派遣）
2008年～現職

『名古屋開府400年』 関連年表

江戸時代	1600年（慶長5年）	関ヶ原の戦い	
	1603年（慶長8年）	江戸幕府開府	
	1607年（慶長12年）	徳川義直（徳川家康九男）、尾張に移封	
	1608年（慶長13年）	有松開村	
	1610年（慶長15年）	名古屋開府 名古屋城築城開始（慶長17年天守閣完成） 清須越開始 堀川開削	
	1615年（慶長20年） 元和元年	本丸御殿完成	
1616年（元和2年）	七里の渡し開設（東海道・宮の宿）		
1730年（享保15年）	徳川宗春、尾張藩七代藩主襲封		
1804年（文化元年）	城下で「どどいつ」発祥		
明治時代	1868年（明治元年）	明治維新（大政奉還、江戸開城）	
	1886年（明治19年）	東海道線（武豊～熱田）開通 名護屋駅停車場（後の名古屋駅）開設	
	1889年（明治22年）	名古屋市誕生（市政施行）、人口16万人	
	1898年（明治31年）	市内電車開通（全国2番目）	明治33年 人口26万人
	1907年（明治40年）	名古屋港開港	明治40年 人口35万人
	1909年（明治42年）	鶴舞公園開園	
	1910年（明治43年）	名古屋開府300年 第10回関西府県連合共進会開催 精進川（新堀川）開削工事完成	明治44年 人口42万人
時代 大正	1914年（大正3年）	上水道給水開始	大正10年 人口62万人
	1923年（大正12年）	下水道（合流式）完成	大正15年 人口77万人
昭和時代	1930年（昭和5年）	名古屋市人口100万人突破	
	1937年（昭和12年）	東山動物園・植物園開園 名古屋汎太平洋平和博覧会開催	
	1945年（昭和20年）	名古屋市街地大空襲 名古屋城天守閣・本丸御殿焼失	昭和20年 人口60万人 昭和25年 人口100万人
	1954年（昭和29年）	テレビ塔竣工	
	1955年（昭和30年）	第1回名古屋まつり開催	
	1957年（昭和32年）	地下鉄（名古屋～栄町）開通 名古屋駅前・栄地下街開業	
	1958年（昭和33年）	名古屋空港開港	
	1959年（昭和34年）	名古屋城天守閣再建 伊勢湾台風襲来	
1969年（昭和44年）	名古屋市人口200万人突破		
平成時代	1989年（平成元年）	名古屋市「デザイン都市」宣言 世界デザイン博覧会開催 名古屋市制100周年	
	1992年（平成4年）	名古屋港水族館オープン	
	2002年（平成14年）	栄公園オアシス21オープン	
	2005年（平成17年）	中部国際空港オープン	
		愛・地球博開催	

シェアード・スペース (Shared Space)

— 共用空間 —

(財) 名古屋都市センター 専任研究員 杉山 正大

1. はじめに

シェアード・スペース(共用空間)とは、耳慣れない言葉です。スペース(空間)をシェア(共有)する、とはどういうことでしょうか。それは、今、ヨーロッパで燎原の火のごとく広まりつつある交通計画・交通管理の哲学とその実践手法のことです。一言で言うと、歩車共存の新しい枠組、取り組みです。既存の交通工学の常識をいったんご破算にして、行動心理学などと交通計画・交通管理、アーバン・デザインの学際的連携のもとに、スキームが組み立てられています。信号、道路標識・標示、ガードレールなどをすべて取り払い、舗装材やストリートファーニチャーなどの統一的なデザインに配慮した上で、街路や交差点を人、自転車、自動車などすべての利用者に自由に通行させるものです。シェアとは、本来、共有するという意味ですが、ここでは、利用者が空間を所有するわけではなく、共に利用するわけですから、共用空間としました。

シェアード・スペース(共用空間)を日本に紹介することとなったのは、名古屋都市センターが実施したまちづくりセミナーがきっかけです。平成20年11月12日に開催した第2回まちづくりセミナーの講師は、ドイツ、フライブルク在住の村上敦さんでした。村上さんは、「持続可能なまちづくりと交通施策」と題して講演し、そのなかでシェアード・スペース(共用空間)を紹介しました。

その内容に大いに触発され、シェアード・ス

ペース・オーガニゼーションのウェブサイトを通じて、「Shared Space -Room for Everyone- A new vision for public spaces」というブックレットを入手しました。それを翻訳したものを、「Shared Space-共用空間- みんなのための空間 公共空間に関する新しいビジョン」として名古屋都市センターのウェブサイトアップしています。

また、この翻訳の許諾を得る過程で、イギリスの建築都市環境委員会(CABE)のベン・ハミルトン・ベイリー(Ben Hamilton-Baillie)という人が、「都市環境」(Built Environment)という雑誌に寄稿した論文「シェアード・スペース(共用空間)：人と場所と交通を調和させること」(Shared Space : Reconciling People, Places and Traffic)についても翻訳することとなりました。(以下「ベイリー論文」ということとします。)

本レポートは、このふたつの翻訳をもとに「Shared Space-共用空間-」としてまとめたものです。

2. 歴史を振り返って

歴史を振り返る前に、シェアード・スペース(共用空間)を説明するのに、目からうろこのような卓抜なたとえが、「ベイリー論文」にあったので、紹介しておきます。

それは、「アイススケートリンクの比喻」というものです。つまり、アイススケートリンクでは、鋭利なスケートブレードが高速で周回し

ていて危険に満ちていますが、信号や標識、レーンマークなど一切見当たりません。それにもかかわらず、初心者は壁際に、中級者は外側に、上級者は内側に自然に別れ、互いに注意しあいながらスムーズに滑っています。

要するに、人為的なルールを定め、サインなどの物的環境に頼って強制的にルールを守らせようとするよりも、人に自然に備わっている危険察知感覚と回避行動をベースにした方が、より高度で円滑な処理が可能だ、ということがこの比喩の含意するところでしょう。

さて、シェアード・スペース(共用空間)が実施されてきた経過をサーベイする前に、その前史を振り返っておきたいと思います。

かつては、そして、多くの場合は今でも、都市計画・交通計画の基本思潮は分離が原則でした。典型的には、1933年に開催された近代建築国際会議(CIAM)の「アテネ憲章」における交通の分離の主張、さらには、1963年のイギリスのブキャナン・レポートも分離の徹底を主張しました(図1)。これに沿って、物理的な歩

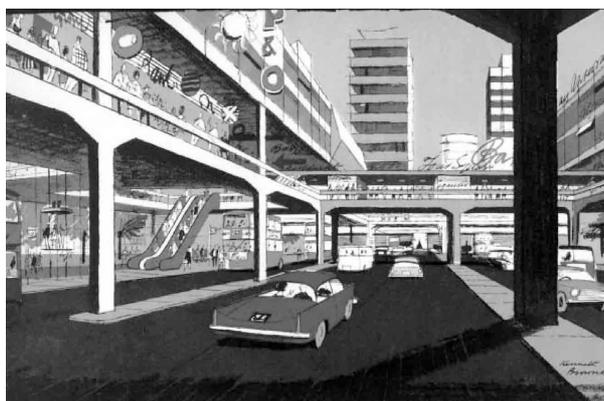


図1 立体分離のイラスト(ブキャナン・レポート)
車分離が実施されてきたことは、良く知られています。土地利用においても、用途の混在は諸悪の根元とされ、用途純化をめざすべきとすることが主流です。

しかし、一方で1961年にはアメリカのジェ

イン・ジェイコブスが、その著作「アメリカ大都市の死と生」において、用途混在の重要性を先駆的に主張しています。

交通計画の面でも、1971年には、オランダのデルフト市が、ボン・エルフという歩車共存の興味深い先駆的なプロジェクトを実施しました(図2)。これは、日本では1980年に大阪の長池で同様なデザインが実験的に実施されました。以後、「コミュニティ道路」として、交通安全施設整備事業の中の一つのメニューとして位置づけられ、国土交通省の補助金対象事業として、多くの整備事例があります。



図2 初期ボン・エルフ
オランダ、リジスウィック通り
(以下、写真はすべて「ベイリー論文」による。)

しかし、本家のオランダでは、ボン・エルフは、標準化されるとまもなく単なる一つの整備様式と化してしまい、そのコンセプトに対する関心も薄らいでいったといえます。

そのような状況下、交通事故の減少を目標として苦闘する中で、やはり、オランダにおいて、シェアード・スペース(共用空間)のアイデアが生まれてきたのです。

3. シェアード・スペース(共用空間)の実施

シェアード・スペース(共用空間)のアイデアを最初に実践した人は、オランダ、フリースラ

ント郡出身の交通技術者、ハンス・モンデルマンです。彼は従来の交通施策に懐疑的だったので、任地管轄内のオーデハスケ村で、初めて道路標識や安全施設などを慎重に外す実験をしました。これまでの手法では、10%しか減速を期待できないのに、その結果によると40%を超える減速と事故の減少を記録したのです。

この結果に気をよくして、次に1992年にマッキンガ村で、完全に信号も含めて取り外し、動線の計画から舗装デザインまで再整備しました(図3)。



図3 マッキンガ村

その後、モンデルマンは、この成功に続いて、ウォルフェーガ、オースターヴォルデにおいても同様な再整備を行いました。ここまでは小さな村や町での実施であり、識者の多くは、大都市や幹線道路には適用できないだろうと目している、実際、あまり注目されてはいなかったようです。

しかし、2002年には、ハーレンの日交通量約10,000台のリジックス通りに適用して、バスの旅行速度が5km程度のダウンにもかかわらず、むしろ定時性がアップしたとの結果を得ました。

さらに、同じく2002年にドラハテンのラヴァイプライン交差点(日交通量約22,000台)に適用して劇的な効果を上げ、幹線道路にもシェアード・スペース(共用空間)の適応性があることを立証しました。この交差点は、以前は4車線道路が交わる平凡な信号交差点だったの

ですが、車道を2車線の6mに狭め、交差点を無信号のロータリー形状とした上で、標識・標示を最小限に抑え、舗装デザインに配慮しました。特徴的なのは、車道削減により生み出された四隅の広場状空間に噴水を設置して、交通量、交通速度に応じて噴水の高さをコントロールし、注意喚起していることです。

この再整備の結果、平均的な傷害事故率は、整備後3年間で、8.3から1に減少しました(図4、5)。



図4 ドラハテン(改修前)



図5 ドラハテン(改修後)

4. シェアード・スペース(共用空間)の発展

オランダにおけるシェアード・スペース(共用空間)実践の成功は、ヨーロッパ各国に波及していくことになります。

シェアード・スペース(共用空間)のコンセプトは、交通量が少なく、通行する人の多くが

顔なじみであるような郊外の小規模な通りや交差点では成立するとしても、大都市や幹線道路では適用不可と、専門家の多くが想定していました。それにもかかわらず、現実に繁華な幹線道路での赫赫たる成果を見て、多くの交通関係者が衝撃を受けたであろうことは、想像に難くありません。

交通安全のために営々として設置してきた施設・設備を外してしまった方が、事故減少につながるというのですから、明らかにこれまでの交通工学の常識に反するといえるでしょう。通行者、利用者の自主的判断のみに依拠するということは、あまりにもオプティミスティックに過ぎるように感じますし、想定しうる危険を軽く考えすぎのように受けとめがちです。しかし、これは、危険を顧みず、単なる蛮勇を奮っての出たとこ勝負ではありません。行動心理学、危機管理、社会学などこれまで交通計画・交通管理とはあまり縁が薄かったような専門分野との学際協力の成果でもあるのです。それは、近年勃興している行動経済学が、心理学を援用して成果を上げつつあることの、交通工学・交通計画・アーバンデザインにおける相似形のような気がしてなりません。

さて、それでは、オランダでの実践が、ヨーロッパの各国にどう波及していったのかを概観してみましょう。

スペインでは、ビルバオ、バルセロナ、マドリッド、サン・セバスチャンなど、ドイツではケファレアル、ベームテなどに実践例があり、北欧でも積極的に取り入れられています。イギリスでもやや変形したかたちも含めてかなりの例が見られるようになっています。

ここでは、まず、スウェーデンのノルケーピングの例を見てみましょう。ノルケーピングは大学町で、うわさ広場とも俗称されるスクヴァレルトルゲットという名の中心市街地付近の交差点にシェアード・スペース(共用空間)を適用

しました。交差点付近に大学のある学部が移転してきたことを契機として、2004年に整備されました。以前は歩車道分離のある平凡な信号交差点で、周囲もさびれていたそうです。そこを信号や標識、ボラードなどを取り除き、単断面にして舗装のデザインに配慮した上で、計画的に照明柱を設置しました(図6、図7)。



図6 ノルケーピング(改修前)



図7 ノルケーピング(改修後)

バスなど公共交通機関も多く通る交差点で、日交通量は約13,000台あり、かつては渋滞や遅れが日常的でした。横断歩行者も信号による長い時間待ちに不満を持っていました。しかし、再整備後は、自動車のスピードがダウンする一方、バスの遅延や渋滞は減り、まちのにぎわいも戻ったということです。

次にイギリスの例を見ることにしましょう。

イギリスでは、マンチェスター、リバプール、ブリストルなどに実践例が見られます。ニュー

キャッスルの場合は、バス路線が集中しているブラケット通りにおいて、歩行者空間との取り合わせをどう処理するか、という課題を処理するのにシェアード・スペース(共用空間)アプローチが用いられました(図8)。



図8 ニューキャッスル、ブラケット通り

さらに、ロンドンのケンジントン・ハイ・ストリートは、日交通量40,000台を超える大幹線道路ですが、ここにもシェアード・スペース(共用空間)的アプローチが導入されています(図9)。駐輪場利用を抑制することによって交通の流れを整理し、歩行者の自由な横断を確保しました。もっとも、この写真からは、赤信号でも横断する傾向のあるイギリスならではの感想を抱くかもしれません。



図9 ロンドン、ケンジントン・ハイ・ストリート

最後に、ロンドンの博覧会通りにおける野心的なプロポーザルを紹介して、ひとまずの概観を終えることとしましょう。



図10 ロンドン、博覧会通り(プロポーザル)

5. シェアード・スペース(共用空間)のバックグラウンド

このように、「ひょうたんからこま」のようなアイデアは、どのようなバックグラウンドに基づいているのでしょうか。

「Shared Space—共用空間— みんなのための空間 公共空間に関する新しいビジョン」と題するシェアード・スペース・オーガニゼーションのウェブサイト内のコンテンツにヒントがあります。

まず、人間の行動について、社会的行動と交通行動には明確な差があり、かつ、その中間的な領域には、段階的な遷移領域がある、という認識があります(表1)。

表1 社会的行動と交通行動

	社会的行動	社会的交通行動	交通行動
行動の特徴	多様多様	多様	均一
移動の動機	焦点(目的地)が不定	焦点(目的地)はおおまかに定まっている	焦点(目的地)は厳密に定まっている
適正速度	< 30 kph	< 50 kph	> 50 kph
行動の予測可能性	大体は予測不可能	限定的に予測可能	大体は予測可能
アイコンタクト	頻繁	限定的	最小限
行動の決定要素	社会的な環境(人々)と物的環境	社会的な環境(人々)と物的環境 +基本的な交通ルール	コントロールシステム—交通工学と 法律系(自動車、交通工学の環境、 道路標識・道路標示)
他の道路利用者に期待する行動	社会的行動	法的、技術的強制を伴った社会的行動	技術的、規則的な交通行動
行動に関連する空間的な配置からの意味	人工的、自然的な環境の状態	人工環境、公共空間のデザイン、 道路設計および環境相互間の参照	信号、交通標識、道路標識、ハンブ、 交通警察官の誘導

社会的行動は、いわば、コミュニティにおける人間の行動といえるでしょう。行動は多種多様で、移動するとしてもその速度は、30km以下であり、目的地は通常定まっておらず、次はどこへ動くか、よくわからないことが普通です。人と人の間に、視線の交換（アイ・コンタクト）が盛んに行われ、人の行動は主に社会的環境によって決定されます。

一方で、交通行動についていえば、行動はほぼ均一です。目的地ははっきりと定まっています、速度は50km以上、移動は大抵の場合予測可能です。アイ・コンタクトは最小限にしかありません。人が何によって行動するかということについては、体系化された交通管理・交通制御の仕組みに従うことが基本になり、主に物的環境によって決定されることとなります。

これらの典型的な社会的行動と交通行動の間に、中間的な、いわば、社会的交通行動ともいえるべき領域が、遷移的に存在していることは、前述のとおりです。

このような行動の性格の相違を明確に認識し、空間を公的な空間と交通のための空間、遷移のための空間に意思的にデザインしていくことが、シェアード・スペース(共用空間)の出発点になります。

6. シェアード・スペース(共用空間)の実践

シェアード・スペース(共用空間)を具体化していく上で、「Shared Space-共用空間-みんなのための空間 公共空間に関する新しいビジョン」では、「9個のセル」という名前のマトリックスを紹介しています(表2)。

表2 9個のセル

	行政	デザイン(設計)	実施
空間認識	啓発する 人の空間か、交通空間か	持続可能なデザイン 社会的な行動vs. 交通行動	ツールとしての技術の目的
具体化の手法	全体的・総合的な授權と参画 ビジョンが方向性を示す 結果よりもプロセス	創造性 他分野との協力 コミュニケーション	組織との協力 創造性
手法(レベル)	プロセスの技術	参加の設計手法 他分野との関係の洞察 コミュニケーション手法	材料の選択と設置 新しい材料の使用

表頭には実施に向けてのステップが、表側には内容の進化と手法が掲げられています。

行政の役割は、ビジョンレベルで、空間認識のありようを啓発することが重要です。設計の段階では、具体化の手法のレベルが重要で、創造性が発揮されねばなりませんし、多分野との協力やコミュニケーションが欠かせません。最後の実施段階では、いかにその場に合った材料を選択し、適切に設置していくかが、問われます。

このように、実施に向けては、基本的に9個のセルの対角線に沿って進めていくことになります。もちろん、対角線相互のセルの間で、行きつ戻りつするフィードバックの過程は、欠かすことができないでしょう。

対角線以外のセルは、対角線上のセルに沿って進むプロセスを補完する機能を表しています。対角線より下のセルは、実施に向けての「プロセス」が、いかに民主的に進められるか、に関わります。一方で、対角線より上のセルは、実施する「内容」の質が、いかに高いか、に関わります。(表3)。

表3 シェアード・スペース(共用空間) の実践

	行政	デザイン (設計)	実施
ビジョン			
具体化の手法			
手段 (ツール)			

図表は、3x3のマトリクスで構成されています。中央のセルには「Shared Space - 共用空間 -」と記載されています。対角線には矢印が描かれ、左下から右上へと伸びています。左下の矢印の近くには「「プロセス」 いくかに民主的か」とあり、右上の矢印の近くには「「内容」 いくかに質が高いか」とあります。

シェアード・スペース(共用空間)の実践に関して、政治の役割、行政の役割、専門家の役割が、それぞれに重要です。これまでのしがらみにとらわれないで、一歩踏み出す必要があります。とりわけ行政は、すべてに関わる最終決定者としてではなく、授権者、調整者として振舞うことが求められます。

「Shared Space-共用空間- みんなのための空間 公共空間に関する新しいビジョン」では、最後に、「シェアード・スペース(共用空間)から学習した実践的なレッスン」と称して、五つのポイントを警句風に表現しています。それらは次のとおりです。

- 1 道路は物語る
- 2 空間を人々のために
- 3 利用者の語ること
- 4 細部 (ディテール) はデザインを活かすのか、こわすのか
- 5 擬似的な安全よりもむしろ混沌を

この五つの中では、多分、最後の項目が関心を惹くのではないかと、思います。われわれがシェアード・スペース(共用空間)のことを聞いたときに、まず思い浮かべることは、危険性、

事故のことでしょうから。

そこでは、次のように述べられています。

「安全に感じるということは、必ずしも安全であることとは限りません。(安全に感じるようにすることの) 最大の誤りは、人に安全であるという幻影を与えることです。」

そして、このことについての方向性のサジェスションは、次の通りです。

「危険と感じるということを排除しようとしなさい。逆にその感覚の効果を最大限に使用しなさい。」

7. 日本におけるシェアード・スペース(共用空間)導入の可能性

これまで、シェアード・スペース(共用空間)とは、どのような概念か、そして、それがどのような歴史と経過をたどって具体化されてきたのか、さらに、それがどのような考え方に基づいているのか、について大急ぎで見てきました。次の疑問は、このスキーム、プリンシプルが、はたして日本に導入可能か、という点だと思います。

取り急ぎ付け加えておかなければいけない点があり、2点あります。

1点目は、仮に一つの普遍的な哲学、概念があるとしても、その応用例は、個別具体的には、固有の条件によってさまざまに多彩な姿をまとうであろう、ということです。実際、ヨーロッパにおける実施例においても、幅広いバリエーションを見せています。

2点目は、シェアード・スペース(共用空間)が生まれてきた背景に、成熟したヨーロッパの市民社会の存在がある、ということを推測させる点です。個人の自由を保障するかわりに、個人の義務と責任を徹底的に求める個人主義を行動原理の原点に置き、そうした個人の行動を社

会的に受容する歴史風土の存在が、ヨーロッパにはあります。

こうしたことを考え合わせると、単純に日本に導入することは、困難のように思えるかもしれません。事実、概ね集団主義が支配している日本の風土や、なかなか前例踏襲を脱することができない行政システム、硬直的な法制度など、いかにもハードルは高いように感じてしまいがちです。しかし、シェアード・スペース(共用空間)のアイデアを単純に放棄してしまうには、この哲学はあまりにも魅力的に映ります。われわれに課された課題は、シェアード・スペース(共用空間)の本旨とする概念を守りつつ、いかに日本の風土に合致するように日本型の修正版を構築できるか、ということに努力することではないでしょうか。

この稿が、日本におけるシェアード・スペース(共用空間)に関する議論を呼び起こし、日本への導入のひとつのきっかけとなれば望外の幸せです。

最後に拙文を草するに際し、ひとかたならぬお世話になった、オランダ、ドラハテンのシェアード・スペース・インスティテュートのサビーネ・ルッツさん(Sabine Lutz, Shared Space Institute, Drachten, Netherland)と、イギリス、ブリストルのハミルトン・ベイリー・アソシエイツのベン・ハミルトン・ベイリーさん(Ben Hamilton-Baillie, Hamilton-Baillie Associates, Bristol, U.K.)に心から感謝の意を表して、この稿を終えることとします。

参考文献、参考URL

- 1 「Shared Space—共用空間— みんなのための空間 公共空間に関する新しいビジョン」
<http://www.nui.or.jp/kenkyu/20/pdf/SharedSpaceHP.pdf>

- 2 Shared Space -Room for Everyone- A new vision for public spaces (1の英語版)
www.shared-space.org
- 3 Ben Hamilton-Baillie, Shared Space :
Reconciling People, Places and Traffic, Built Environment Vol.34 No.2
- 4 船田尚吾、大橋由布子、荒岩孝昭、「ヨーロッパにおける「共有空間」プロジェクト」(「交通工学」Vol.44 No.1)

世界の都心から♪～海外交通施策事例調査～

(財) 名古屋都市センター 調査課 研究主査 井村 美里

1. 背景・目的

名古屋市都心部では、平成16年3月に策定された名古屋市都心部将来構想において、商業・業務機能が高密度に集積する名古屋駅地区と栄地区を二つの「中心核」、これらを連携づけ一体的な都心形成を促す地区として広小路通と錦通を「連携軸」とし、『二核一軸』を中心とした都心づくりを目指している。

名古屋駅地区においては、中部圏の玄関口として民間主導による大規模開発が進み、民間主体の街づくり協議会も発足する等、積極的な街づくりへの取組みがなされ、一方の核である栄地区でも栄南地区で「栄ミナミ地域活性化協議会」による音楽イベント開催や、久屋大通でのオープンカフェ実施など文化交流拠点らしい発信がなされている。こうした時代の潮流の中で人の流れは変化しつつあり、また、一軸を展開する広小路ルネサンス事業については、平成20年3月の名古屋市議会で事業予算が否決され、「まちの全体像や、都心全体の交通体系のあり方が明らかになっていない」等の課題が指摘されていた。

そこで本研究は、平成20年5月から11月にかけて、世界で注目される都市が、今、何を考え、何に取り組んでいるのか等、都市の動向を調査し、名古屋市との

比較をする中で、名古屋の都心部全体における将来ビジョン検討に役立てることを目的とし、市若手担当者と都市センターの共同研究の形で取組んだものである。

2. 方法と進め方

本研究では、まず、名古屋の都市レベルと同程度の都市(①)、交通施策・環境施策等に関して先進的な取り組みをしている都市(②)を選び出し、それぞれの都市で行われている環境(交通を含む)、賑わいに関する都市施策の概要とその背景について、主に文献調査を行い、データ集にまとめることとした。

①名古屋の都市レベルと同程度の都市として、以下2項目で抽出し、シカゴ、バンクーバー、マンチェスター、ローマ、マドリッド、パリの6都市を選定。



図1 選定都市の位置

- a) 総務省統計局「世界の統計2006」2-5 主要都市人口より、人口 200~300万人都市を抽出 ※名古屋市は224万人
- b) 環境省「平成20年度 環境統計集」1.20 各国の自動車保有台数より、自動車保有台数 500台/千人以上の国にある都市を抽出 ※日本は586台/千人

②先進的な交通施策・環境施策に取り組んでいる都市として、以下のキーワードで浮び上がる、ストラスブール、フライブルク、ミュンヘン、ポートランド、ボゴタ、クリチバ、ソウル、テグの8都市を選定。

- a) 環境…水・緑、エネルギー、交通（ロードプライシング、共通運賃制度、エリア速度規制、LRT、自転車、バスラピッドトランジットシステム、トランジットモール）
- b) 賑わい…モール、公共空間活用（オープンカフェ等）

さらに、データ集作成後には、交通に関する5つの施策（ロードプライシング、共通運賃制度、LRT、トランジットモール、自転車）について、他都市の先進的な取り組みをそのまま、名古屋で採用した場合の課題について考察している。

3. データ集

選定した14都市について、人口、市域面積、都市圏人口等、都市の概要を整理し、その後で環境施策としての水・緑、エネルギー、交通施策を整理、賑わい施策としてのモール、公共空間活用事例等とその背景をまとめている。

4. 交通に関する5つの施策

選定都市一覧で整理したそれぞれの施策キーワードのうち、交通関連の5つの施策、ロードプライシング、共通運賃制度、LRT・路面電車、自転車、モール・トランジットモールについて、世界的な流れ、都市毎の比較、日本での導入事例、名古屋市における導入の課題をまとめている。

表1 都市と施策一覧

都市名	面積 (km ²)	人口 (万人)	ロードプライシング	共通運賃制度	LRT	自転車	トランジットモール
マンチェスター(イギリス)	1,276	225	○		○		○
パリ(フランス)	150	213		○	○	○	
ストラスブール(フランス)	80	25			○	○	○
フライブルグ(ドイツ)	153	21		○	○	○	○
ミュンヘン(ドイツ)	310	120			○		○
マドリッド(スペイン)	605	291					
ローマ(イタリア)	1,285	255	○				
バンクーバー(カナダ)	1,250	213					○
ポートランド(アメリカ)	377	53		○	○	○	○
シカゴ(アメリカ)	588	290				○	
ボゴタ(コロンビア)	1,755	703				○	
クリチバ(ブラジル)	431	173					○
ソウル(韓国)	605	1,002	○				
テグ(韓国)	885	255				○	
参考:名古屋	326	222	—	—	—	—	—

(1) ロードプライシング

特定の区域や道路を通行する自動車に対し、課金する制度のことで、移動そのものの取りやめや、交通混雑の緩和、環境改善を図るもの。ソウルのように対象路線の出入口で課金を行う方式や、ローマのように課金区域を設定したゾーンプライシング方式等がある。日本での導入事例はない。

本市への導入にあたっては、①利害関係者・関係機関との調整、②課金システム、③課金徴収の法的な根拠等が課題として考えられる。

(2) 共通運賃制度

都市または都市圏における各種公共交通機関の運賃・乗車券を共通化し、1枚の切符で公共交通機関が利用できる制度。公共交通機関の利用者減少対策と、自動車利用の増加による弊害

を少なくすることを目的として、ハンブルグで1967年に初めて導入した。日本での導入事例はない。

本市への導入については、①乗車券のICカード化、②相互利用（一元化）化、③相互乗継引の導入、④運輸連合の設立、⑤共通運賃制度の導入、のステップが必要と考えられ、設備更新やシステム更新費用、各交通事業者の独自サービスの取り扱いや、運賃収入の清算業務の煩雑化によるコスト増が課題として考えられる。また、ゾーン分けや現状との収益差、利用者の不公平感等を勘案した料金設定も課題である。

（3）LRT・路面電車

日本では、従来の路面電車が高度化され、車両の低床化、外観のデザイン化、都市間鉄道乗り入れ等、より高度な公共交通サービスを提供するための様々な工夫が施されたシステムを一般的にLRTという。日本では、2006年、富山市の富山ライトレールが日本初の本格的なLRTとして開業。また、宇都宮市等でもLRTの事業化に向け検討が進められている。

一般的なLRT導入の課題として、①公共交通整備への公的負担に対する市民の理解、②利害関係者との合意形成、③バスとの差別化、④道路交通渋滞の懸念、⑤将来の経営採算性に対する不安、⑥まちの活性化等の整備効果に対する疑念が挙げられる中、本市における課題としては、これらに加えて、地下鉄との差別化や運営主体の検討などの課題が考えられる。また整備ルートやBRT（基幹バス等）との比較検討等、導入に関する総合的な検討が必要である。

（4）自転車

世界の自転車施策先進国では、国レベルで自転車利用計画が策定されており、その内容は「自転車走行空間整備」「駐輪場整備」「コミュニティバイクシステム導入」「安全教育、利用

促進イベント等のソフト的な利用促進策」に大別できる。

本市の走行空間整備は、コリドー路線計画があるが、計画延長距離は100km程度と海外先進都市の距離には及ばず、まずは距離延長とネットワーク化が必要である。駐輪場は、目的地直近での整備、有料駐輪場付近の放置自転車対策等の課題が考えられる。コミュニティバイクシステムは、本市の現状に合った導入対象エリア、必要台数、駐輪位置の検討が必要である。シェア意識の浸透も課題である。ソフト的な利用促進策では、自転車が「環境に良くて、カッコイイ」という意識付けや、自転車利用者や自動車運転者に対する自転車走行方法に関する安全教育、自転車を使った方がお得と思わせるようなしかけ等が大切である。

（5）モール・トランジットモール

トランジットモールとは、路面走行の公共交通機関のみを通行させ、一般車両の乗入を禁止した歩行者空間をいう。1967年米国ミネアポリスのニコレットモールで初めて導入され、それ以来良好な歩行空間の確保、公共交通の利用促進、環境改善、都心部の復興等を目的とし、欧米諸国の多くで次々と導入されている。

ヨーロッパでは中心市街地の広い範囲が歩行者専用道路（モール）化され、イギリス・アメリカでは中心市街地のメインストリートの一部を歩行者ゾーン化している場合が多いが、名古屋版トランジットモールとしてイギリスやアメリカタイプのモールを導入した場合、①路線上に集積密度の高い魅力のある商店街の点在、②公共交通の利用促進、③既存駐車場の活用策や付置義務駐車場のあり方検討等、駐車場の再整備、④通過交通・横断交通の処理、⑤地元や関係する行政体とのコンセンサスが課題になる。

平成21年度
第2回
まちづくり
セミナー

大学と地域との連携によるまちづくり ～名古屋学院大学の事例を中心として～

講師：名古屋学院大学経済学部
教授 水野 晶夫氏



日時：平成21年10月28日(水) 午後3時～5時
場所：(財)名古屋都市センター 大研修室

私が本来専門としているのは、財政学などマクロの経済学ですが、2000年ごろ学生に引っ張られて瀬戸の商店街へ繰り出して以来、まちづくりに深く関わるようになりました。ということで、実はまちづくりは専門でも何でもありません。ただ、専門ではなかったがゆえに、失敗を積み重ねる中で必死に考え、うまく回るような仕組みを講じてこられたようにも思います。

それで、まちづくりにおいては「つながり方」が重要な視点になると思っています。大学と地域、あるいは大学と教員、教員と学生がどういうつながり方をしているのか。お互いの利害や思いをうまく調整して、いかにWIN-WINな関係にもっていくか。それはとても難しい作業です。しかし、それをうまく乗り越えられないと、プロジェクトは進められないと思います。

I 名古屋学院大学と地域との連携

2001年から2007年まで、瀬戸市の中心市街地にある銀座通り商店街に「マイルポスト」という学生たちが運営するカフェをつくり、そこを拠点に、私は世話人という立場で商店街活性化に関わってまいりました。そして現在は、2007年に大学が名古屋市熱田区に移転したことに伴い、地元の日比野商店街や熱田区と連携しながらまちづくり活動に勤しんでいます。

1. 瀬戸での取り組み

(1) 「シャッター通り」から「人の集う商店街」へと変わった

2001年当時、瀬戸の銀座通り商店街というのは「シャッター通り」と呼ばれ、人通りはほとんどなく、平日に人を見かけるとしたらそれは商店主というような状況でした。

そんな商店街の空き店舗を借り、そこにまちづくり事務所を開設し、学生たちと一緒にまちづくり活動を始めることになりました。そして2002年、愛知県から補助金を受け、空き店舗を拡張して学生運営のカフェ「マイルポスト」をオープンしました。これが結構うまくいったため、この店から社会貢献プロジェクトを仕掛けようと、さらに活動を広げることになりました。

それで、我々が関わるようになったことで、商店街にどのような効果もたらされたかということ、まずは商店街の空き店舗が半減し、通行量が50%増となったことです。ただ、それ以上に大事なものは、商店街が非常に元気になったことです。

例えば、店主たちが出資して「銀座茶屋」という店を出したり、「一店逸品づくり運動」ということを始めたのです。また、イベントなども興し、商店街には多くの人が集うようになりました。学生たちの活動が先行していたとはいえ、決して学生や大学におんぶしているのではなくて、商店主たちも自らお金を出して汗を流して商店街を活性化しようという雰囲気が生まれたのです。

そして、2006年には経済産業省の「がんばる商店街77選」の一つに、全国に約13,000ある商店街の中から銀座通り商店街は選ばれました。大学との連携が評価されたのです。



図1 マイルポスト

(2) 活性化のポイント① 大学・学生がどのように関わったのか

では、シャッター通りと呼ばれていた商店街が、なぜ「77選」に選ばれるほど変わることができたのでしょうか。ポイントの一つは、大学・学生がどのように関わったかにありますが、具体的には「持続可能な学生組織の確立」を意識したということです。

例えば、学生がサークルを立ち上げて地域で何らかの活動を始めても、立ち上げた学生らが卒業してしまえば消えてなくなることはよくあります。地域の人たちにしてみれば「これから」という時に終わってしまうわけですが、やはり地域に関わる以上は継続していくことが大事です。そのことを念頭に、注意深く進めました。

●持続可能な学生組織の確立

そこで、マイルポストの運営組織については、まちづくりサークルや私の授業とのつながりを持つことによって、まちづくりに関わる人材が絶えないように工夫しました。マイルポストのスタッフは十数名ですが、それ以外にさまざまなイベントを仕掛けるグループがあって、80人ほどの組織になっていました。3～4年生をコアスタッフ、1～3年生をサポートスタッフとするシフト体制をつくり、4年生が卒業しても活動が消えないように組織として維持できるようにしました。

●多様な関係者とつながるビジネスモデルの実践

もう一つ、マイルポストは単にカフェというだけでなく、ビジネスモデルの実践をかなり意識して運営しました。ITフォローアップ事業やフェアトレード・プロジェクトの実施、オリジナル商品の開発、瀬戸みやげ推奨品の委託販売など、年商としては600～700万円ほどですが、たくさんのプロジェクトがあり多くの学生が常時関わっていたのでインパクトはありました。

ITフォローアップ事業について、一つの例をご紹介します。まちづくりサークルの学生たちは、自分たちが身につけたIT技術を地域に還元しようと、パソコン教室を開きました。実は、瀬戸市の教育

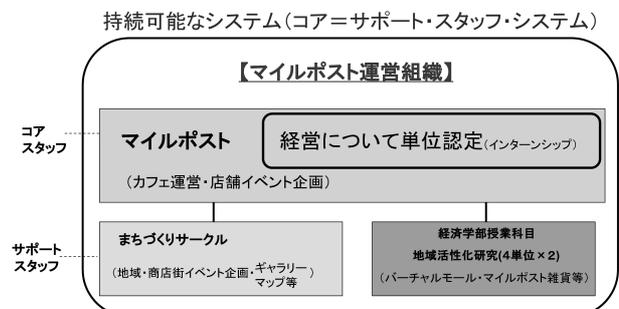


図2 持続可能なシステム

マイルポストにおける コミュニティビジネスモデル

- 公益的連携プロジェクト実践を集中(約20件)

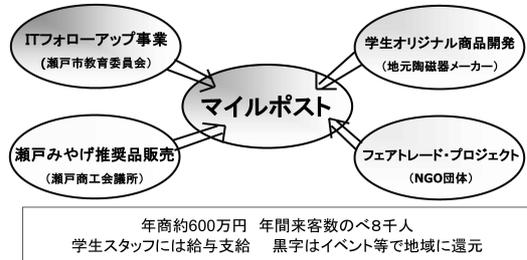


図3 マイルポストにおけるコミュニティビジネスモデル



図4 ITフォローアップ事業

委員会が開いているパソコン講座は大盛況だったのですが、「講座終了後に個別で教えてほしい」というニーズには応えられていませんでした。そこで、それをマイルポストで引き受けようと、その講座を受講した人たちを個人指導でフォローアップするプロジェクトをつくりました。これについては、学生スタッフは教育委員会のパソコン講座からアルバイト料をいただき、かつ教育委員会のパソコン講座のサブ講師として採用していただけるようにしました。なお、マイルポストとしては、受講者に350円のコーヒーを注文していただくことにしました。

結果は、「先生、大変なんですよ」と学生が言うほど、多くの方が利用してくださいました。これは事業規模としては年間数十万円の小さなものですが、学生にとっては活躍の場になるし、マイルポストも社会貢献ができるということで、非常に面白いビジネスモデルができたと思っています。

(3) 活性化のポイント② 商店街自身がどのように関わり、どう変わったのか

商店街の会議に参加すると、商店街の方がお互いあだ名で呼びあってすごく仲がいいのです。そこで、私が、「商店街の人って仲がいいですね。」と話すと、実は、ちょっと前までは、挨拶と天気の話ぐらいしかしたことがなかったとのことでした。あだ名で呼び合うほどの仲になったのは、いっしょに苦労をしながら2001年に「銀座茶屋」を立ち上げてからだと聞いて、びっくりしたことを覚えています。

銀座茶屋の立ち上げ、そして成功によって、商店街の方々には連帯感を強め、成功体験が自信につながり、それが次の目標に向かって頑張る活力につながるのを目のあたりにしました。

●リスクテーカーの出現

こんな物語があります。2001年4月に「銀座茶屋」がオープンする直前、銀座茶屋開設準備会議の席で、店長を務めるはずだった人から「店長を降りたい」という話がありました。一瞬にしてお通夜のような雰囲気になったのですが、そのとき一人の女子学生が「私、店長やります」と言ったんです。ポ



図5 地域のお休み処「銀座茶屋」

ランティアでもいいからやります、と。商店街の人たちは拍手喝采でしたが、私は少々複雑な気持ちでした。そんな自己犠牲的なかたちで続けるのは本人も大変だし、私も教育者として是認しがたいことです。後日、その女子学生の気持ちを確認した上で、商店街側と条件を話し合い、合意し、彼女は銀座茶屋の初代店長となりました。その後も大学が名古屋に移るまで、五代目まで学生が歴代店長を務めました。

そんなふうに、まちづくりをするところには必ず何人かのリスクテカーがいるということです。リスクを引き受けて走る人がいるわけです。

●事業ミッションから地域ミッションへ

後に、銀座通り商店会へは内閣府など国の行政機関も視察に来るようになりました。その時に商店街の理事長さんが「補助金は後からついてくる」とおっしゃったのですが、何かと補助金をくれという話が多い中、理事長さんの言葉に行政の偉い人たちは非常に喜んだそうです。

要するに、商店街を何とかしようと、店主たちがお金を出し合って始めたわけです。事業ミッションから始まっているわけです。その後、大学、あるいは行政の協力を得ながら地域へのミッションへと変わっていった、というのが話の筋です。ただ、肝心なのは、リスクテカーがいて、突っ走っていく人がいて、それを応援する人がいたということです。そういう良い循環が生まれてこそ、こんなかたちになるのだと思います。大学が抜けた今も、商店街は元気にやっています。

それで、大学が抜けると同時に、行政の方たちが商店街に入るようになりました。愛知県では、市町と商店街が協働でまちづくりを進めることに対して助成することになったからです。我々は銀座通り商店街を中心に取り組んでいましたが、行政は一商店街ではなく中心市街地全般を視野に入れて動きます。それで、中心商店街は4つほどありますが、現在はそれらがうまく連携して、それぞれが特色を持ちながら中心市街地の活性化に取り組んでいます。

(4) 活性化のポイント③ 大学と商店街はどのように連携していたのか

●まちの関係者が一堂に会する「地域プラットフォーム」の構築

よく言われることですが、プロジェクトを進める上で大事なことは「WIN-WINな関係づくり」と「信頼関係づくり」です。しかし、これは本当に難しいことです。

そこで、まずは顔の見える関係づくりをしようと、「地域プラットフォーム」ということを常に意識していました。私が銀座通り商店街に入った当初は、まちの関係者が一堂に集まって話をするような機会がありませんでした。そこで、そういう場をつくろうと、大学教員、学生、TMO、商工会議所、市役所、地域NPO、商店街による「地域連絡協議会（ぎんざまちネット）」を設けました。

●WIN-WINな関係づくり ー学生ボランティアは「便利屋」ではありません

さて、以前はよく私の研究室に「商店街でイベントがあるので、学生を10人ぐらい出してもらえないか」という電話がかかってきました。「学生ボランティア＝便利屋」みたいに思っている方がいるわけです。ただ、それは私も気をつけなくてはいけないことだったんです。

あるとき女子学生に「先生のゼミに入ると、こき使われるって聞いたんですが…」と言われました。要するに、学生のためになると思って頼んでいたことが学生には伝わっていなかったということです。それ以来、学生によかれという意図がある場合でも、仕事をお願いする際にはバイト代を渡すようにしています。そういう関係だけは守ろうと決めました。私のイメージしていた先生と生徒の関係とい

うのは丁寧に育てていかなければできない、と認識させられたエピソードです。

それで、相手が一般の人となると、さらに話は難しくなります。当初、銀座茶屋も忙しくなると、まちづくり事務所に溜まっている学生たちに手伝いを頼み、その代わり「ごくろうさま」とご飯を出していたわけです。ただ、学生たちにしてみれば、まちづくりの相談をしているのに声がかかれば断れないわけです。そこで、学生に頼まれて「シフトとしてきちんと働けるかたちにして、バイト代を払っていただきたい」と私から商店街の方をお願いしました。そうしたら、えっと驚いた顔をされました。その後、私が何を言われたかということ、「商店街と学生が仲良くなっているのに水野先生はやきもちを妬いている」ということです。WIN-WINの関係なんていうけれど、現場はそんなレベルなんです。ですが、後日、商店街の幹部から「水野先生の言っていることは真っ当なのでそうします」という返事をいただきました。そのとき、商店街幹部の人たちと私との関係づくりができたように感じました。そういうことはどんな世界でもあることですが、特にまちづくりというのはビジネスライクにできることではありません。ちょっとしたことで信頼関係が崩れてしまうこともあります。それを乗り越えて、お互いのメリットを感じ合える関係をつくっていかねば先へは進めないということです。

(5) 社会貢献や実践教育の新しいかたちを示すことができた

では、このようなまちづくりへの取り組みによって、どのような成果が得られたのでしょうか。

大学のミッションとは、「教育、研究、社会貢献」です。社会貢献というと、一般的によく実施されているのは公開講座ですが、我々は実践教育との連携によって地域活性化に取り組んだわけです。ということで、「学生、先生、大学がまちに入って活動する」という新しい社会貢献のアプローチを示すことができたのは、一つの大きな成果だったと思います。

二つ目は、多くの学生に社会にコミットする力をつけて卒業させることができました。3月になると商店街の人たちから、「頼むから卒業しないで、もう少しいてほしい」と言われるような学生は社会に出て活躍しています。つまり、経済産業省が提唱している「社会人基礎力」が育成できるということです。そしてもう一つプラスすると、「地域への理解と愛着」というものが育まれます。また、学生ら自身は「思いやりや助け合うことの大切さ」や「コミュニケーション能力の大切さ」を学べたと言っています。このような社会での実践的な経験を糧に、多くの学生たちは活躍しています。

成果の三つ目としては、商店街活性化に対して、大学等の新しい利害関係者を加えることで成果を上げ、そういう活性化の新しいアプローチを示すことができました。

2. 名古屋での取り組み

2007年に名古屋学院大学は、3学部が名古屋市熱田区の日比野地区にキャンパスを移転しました。

私としては、瀬戸で成果を出したという実感はあるものの、相当シンドイ思いもしたわけです。よく私は「1/3はまちの方を、2/3は大学の方を見ながらまちづくりをしている」と言ったものですが、要するに大学との関係も非常に難しいということです。いろいろ活動していると新聞にも載るし、それは大学の宣伝にもなるので大学は応援してくれていると思われる方も多いのですが、大学は必ず

しもそうではありません。

そこで、とにかく瀬戸での課題を一つずつ克服していこうと考えました。

(1) 「地域連携」を持続可能にするための環境を整えた

●プロジェクトの「カリキュラム化」

まず、「水野先生のプロジェクト」というのはやめたいと思いました。水野先生のプロジェクトとなると、大学としては応援ができないわけです。ということで、プロジェクトをカリキュラム化することにしました。大学のプロジェクトとか授業の一環ならば、大学は応援できます。ということで、カリキュラムの中でまちづくりができるように工夫しました。

●学内組織の確立

二つ目は、「地域連携センター」という学内組織を設置してもらいました。そうすることで、水野先生の応援をするのではなくて、大学の仕事としてセンターを応援するかたちになりました。大学教育という仕組みの中で実践教育を応援する、という仕組みをつくったわけです。

●組織を動かす「大義名分」づくり

三つ目は、私には「職員にもラインで動いてほしい」という気持ちが強くあったので、それができるための大義名分をつくりました。

何をしたかという、2007年、名古屋市と大学との間に「地域連携協定」を締結したのです。我々が瀬戸で活躍してきたことはご存じの方も多かったので話はしやすかったのですが、「協定を結ぶ目的は何か」という点では疑心暗鬼になられたようです。もしかしてお金を出してくれという話か、と受け取られたみたいですが、そうではない。この協定があれば、それを大義名分にして職員がラインで動けるということです。大学のプロジェクトという位置づけでの職務分掌があってこそ職員は動けるということなので、そこを動かすための工夫が必要だったのです。

●予算の獲得

四つ目は、予算の獲得です。お金は外から持ってこようということで、文部科学省の補助事業GP (Good Practice) に申請しました。GPというのは、大学で実施される優れたプロジェクトにお金を出す仕組みですが、プロジェクトが採択されると年額約2千万円がもらえます。これに選ばれ、2007年から3年間取り組むことになり、現在も進行中です。こうして予算を獲得し、名古屋で本格的に活動することができるようになりました。

名古屋市との協定締結やGP採択がなかったら、私は名古屋では動かないつもりでした。今ごろは研究室で論文を書いていたかもしれません。しかし、名古屋への移転を契機に、いろいろな条件が揃い、大きな転換がもたらされたのです。

(2) さまざまな機関との連携事業が実現した

こうして、名古屋での活動を始めました。名古屋でもマイルポストを再開することになり、当初は名古屋キャンパスの近くにある日比野商店街の空き店舗に開設しましたが、2009年9月からは名古屋学院大学日比野学舎1階に移転し運営しています。

さて、名古屋では自主企画事業よりも連携事業が多く、それが瀬戸とは異なる点です。絶対数も多いです。熱田区との協働による「あったか交流カフェサロン」を月に1回、マイルポストで開催して

います。これは行政の出前講座です。また、熱田社会福祉協議会と連携して、年に2回、「あったかミニミニ福祉フェスタ」を開催し授産製品の販売や福祉イベントを実施しています。

それで、得意の商店街ですが、今は日比野商店街と一緒に活動しています。夜な夜な会議をやる中で、日比野商店街が動き始めました。「8の日清掃」といって、毎月8の付く日には学生、商店主とで日比野商店街の清掃活動をしています。朝8時から30分ほどかけて掃除し、その後は一緒にモーニングをしながら世間話をするのですが、これは非常に楽しいイベントです。皆で視察旅行に出かけたりもしています。また、「ひびのタウンズ」という日比野商店街の情報紙がありますが、実は学生が作っています。そして、日比野地区は2010年に開催されるCOP10のホストタウンになるわけですが、それも応援していくつもりです。

ということで、名古屋のマイルポスの事業規模は瀬戸とそれほど変わりませんが、連携事業が多いのは、プラットフォームにかかわる関係者が多いからです。これは、熱田区や名古屋市のご尽力もあり、いい関係ができています。むしろ連携事業が増えすぎて学生にとっては容量オーバーになりそうで、それを来年度以降の課題にしようかと思っているほどです。

なお、名古屋学院大学が名古屋に来る以前の日比野商店街の店舗数は40ほどでしたが、年々増えて現在は70店舗近くになりました。3年連続で加入者が増えている商店街は名古屋ではここぐらいで、我々は「名古屋学院効果」と自負しています。

熱田区との協働まちづくり事業



親子パン作り教室
(年4回開催)

あったか交流カフェサロン
(月1回開催)



日比野商店街 協働事業



ひびのこいまつり
(毎年4月開催)

日比野商店街8の日清掃
(毎月8日朝8時実施)



図6 熱田区との協働まちづくり事業

図7 日比野商店街協働事業

(3) 講座からまちづくりNPOが生まれた

2008年には、名古屋都市センターとの協働で、まちづくりNPOをつくる講座に取り組みました。熱田区日比野地区をモデルとした地域のまちづくり講座です。そして講座終了後には、有志によるまちづくりNPOをつくることになりました。

実は、名古屋都市センターから「一緒に講座をやりませんか」と声がかかった時、私はあまり気乗りしませんでした。というのは、講座でまちづくりNPOはつくれない、というのが私の持論だからです。誰か動けるリーダーがいれば別ですが、そういう人がいない状態で誰がリスクテカーになるのか。リスクテカーは講座ではつくれません。そこで、条件を提示させていただきました。それは、熱田区役所のまちづくり推進室も加わって、日比野学区の人たちに受講するよう声をかけていただくこと。もう一つは、名古屋都市センターに蓄積されたワークショップのノウハウを使うこと。それを

条件としたところ、30名ほどの応募がありました。そして講座は進み、最後は紙芝居形式で各グループが発表し、非常に盛り上がった講座となりました。講座自体は成功です。

そしてその後、NPO「日比野ひとまちネット」が設立されました。現在、毎月1回、マイルポストで開催している「あったか交流カフェサロン」は、そのNPOのスタッフが企画運営しています。そういかたちでまちづくり活動を進めているところです。

II 大学・学生間連携

では、大学や学生の連携のあり方について、事例を紹介しながらお話ししたいと思います。

1. 大学間連携（大学コンソーシアムせと）

2003年、「大学コンソーシアムせと」というのを6大学（愛知工業大学、金城学院大学、中部大学、名古屋産業大学、南山大学、名古屋学院大学）で設立しました。事務局を持つ強力な組織です。大学のコンソーシアムに自治体がお金を出すことはあまり例がないと思いますが、この組織は瀬戸のまちづくりをするということで、瀬戸市が費用の半分を負担しています。

このコンソーシアムの特徴は、協定（規定）があって、学長による理事会があるという具合に、しっかりとした組織になっていることです。つまり、規約に則って、職員がラインで動きます。だから、何かやるとなると、瀬戸市の当該部局の職員が必ず出てきます。

現在実施している主な事業には、公開講座、合同大学祭、そして「まちづくり施策協働プログラム」というものがあります。まちづくり施策協働プログラムは、瀬戸市職員から「学生提案型のまちづくり事業を実施したい」と相談を持ちかけられたのがきっかけで始まりました。大学や学生が勝手にプロジェクトに取り組んでも持続しないので、瀬戸市の施策に乗るものを協働で実施することにしました。具体的には、瀬戸市の各部局と6大学の先生がお見合いをして、それぞれ話がまとまれば一緒に事業に取り組むわけです。そうすると、たいていは単年度で終わらずに、複数年度続いていきます。そういったかたちで持続可能なプログラムとして動いています。

ただ、特に瀬戸に本部のない大学にとっては、コンソーシアムに参加するメリットが感じられないということで参加意欲も低く、それが現在の課題と言えます。

2. 学生間連携（各大学祭実行委員会の連携）

さて、学生の連携組織はいくつかあります。例えば、愛知県にある大学の各大学祭実行委員会の連携組織みたいなものが、かつては「キャンパスパラダイス」という一大イベントを、名古屋栄で開催していました。各大学の実行委員会は小さい組織でも20～30人いるし、大きい組織になると70～80人、100人ぐらいになります。そういった組織をうまく束ねていたのが、情報誌を発行している会社です。ところが、キャンパスパラダイスは2005年につぶれました。というのは、その会社がそのイベントを自分たちの傘下のものにしようとしたため、利用されるようなやり方を嫌った学生たちが「やめます」と独立してしまったのです。

そしてつくったのが「ドリームフェスタ」です。資本金はゼロなので、企業の協賛金などを集めた

わけですが、それで食っていけるような組織にはなり得ず、2年でつぶれました。私としては、持続可能な各大学のパワーを名古屋のまちでうまく実現している非常にユニークなまちづくりビジネスモデルだと思っていたので、ちょっと残念でした。

と書いていたら、名古屋市がうまくやっていました。「なごやユニバーサルエコユニット」(UEU) といって、環境局がCOP10に向けた動きの中で、大学祭に目をつけて、学生主体による各大学の組織を「エコ」というテーマで束ねたわけです。2007年から環境局が事務局となって、学生たちがキャンドルナイトなどのイベントを実施しています。環境局の担当者もキャンパスパラダイスの存在をご存じだったようで、そのノウハウをうまく使っておられます。

ただ、やはり問題は出てきます。要するに、大学外部の方が学生とダイレクトに関わっていると、「使う、使われる」の関係になるということです。そういう意味では、環境局の方も苦勞されていると思います。

●学生を動かすのは難しい

実は、学生を動かすのは非常に難しいです。私は大学祭実行委員会の顧問をやっていますが、最初は相手にされませんでした。というのは、大学祭については「学生がやる」という意識が非常に強く、先生とか職員が介入するのをすごく嫌がるわけです。利用されるような気がするのでしょうか。ただ、私も1年目に一緒に取り組んでいい関係ができたので、2年目には、「タレントを呼んでくるだけの大学祭ではなく、少し視点を変えよう。`地域貢献、と`エコ、を取り入れて流れを変えよう」という提案をしました。その中でできたのが「ごみ箱ゼロの大学祭」です。これによって、「名古屋学院は先進的な大学祭をやっている」と各方面から評価をいただきました。学生が理解してくれるようになったのは、これが成功してからです。学生と一緒に汗を流してごみ箱を運び、それで初めて信頼してもらえたわけです。学生との関係づくりには2年かかりました。

ということで、名古屋市も非常に頑張っておられるとは思いますが、それほど学生の動かし方は難しく、外の団体では限界があると思います。そういう意味で、大学内でうまく世話をする人なり組織を介在させていくことが必要だと思っています。

3. 世話人教員、連携オフィスを介して大学・学生がつながる(全国まちづくりカレッジ)

それで、世話人教員とか大学の連携オフィス、地域連携センターみたいなものを介して学生とつながっていくと持続可能になると思います。

その一つの例が、「全国まちづくりカレッジ」です。これは、地域と協働してまちづくり活動を展開している全国の大学関係者のサミットで、2002年から始まりました。北は北海道から南は九州までの大学が参加しており、毎年、各大学の持ち回りで実行委員会を担当します。主体は学生で、それを職員や先生がサポートするかたちです。

実は、まちづくりというのは、学内的にはかなり特殊な活動です。褒められることもあるけれど、孤独感もある。それで、そういう学生が全国から集まってくると、苦勞話なんかをしながら共感し合い、それによってまたモチベーションが高まるわけです。そのうちメールや携帯でやりとりするようになり、関係づくりが進んでいきます。私も毎年参加していますが、連携オフィスや世話人教員うまくつながっていくことができます。世話人教員や組織があるかぎりには組織として回っていき、組織があればその窓口からそれぞれ学内への周知もスムーズにいきます。ということで、こういうかたち

が連携の一つの理想かと思っています。

基本的には、公的な機関が事務局だと大学としても教員としても参加しやすく、そして次のプロジェクトもつくっていきやすいと思います。組織のあり方としては、そういうかたちが一つのモデルになるのではないのでしょうか。

■質疑応答

【質問】 3点、お尋ねします。一点目。瀬戸のシャッター通りだった商店街が活性化して、「77選」に選ばれるほどになったわけです。名古屋市内にもシャッター通り商店街が多々ありますが、例えばリスクテカーがいて、学生の協力を得られて、マイルポストのような店を出したら活性化できるかという、そうでもない気がします。瀬戸で成功した理由は何だと思われますか。

二点目。最初は皆の持ち寄ったお金と労働力で始まって、うまく転がった場合はいいけれど、うまくいかなかった場合のリスクやロス、誰がどう引き受けるのでしょうか。

三点目。リスクテカーを講座では養成できない、というのはもっともだと思います。ただ、リスクテカーの出現を座して待っていても仕方がないわけで、働きかける方法についてはどうお考えでしょうか。

【水野】 一点目。なぜ成功したのか。確かに学生がカフェをやっても、それだけでは成功しません。一つ、我々のモチベーションは何だったのか、ということをご紹介します。

今や学生や大学がまちに出て活動するのは珍しくもないことですが、2002年当時は学生が店を出すなんて例はありませんでした。ということで、商店街の理事長さんは相当苦勞されておられたそうです。マイルポストを立ち上げて半年ほど経った頃にその話を漏れ聞いた私たちは、何も言わずに支援してくださったことへの感謝と恩返ししたい気持ちで一杯になりました。それが頑張ろうというモチベーションになったのです。単に意気込みがあっただけでなく、実はそういうストーリーが商店街にはいくつもあります。

また現在、瀬戸では月に1回とか2ヶ月に1回は集客力のあるイベントを実施しています。普通は、せいぜい年に1回か2回でしょう。人が来れば、商店街の売上も増える、というわけです。

そういうふうに成功例がいろいろあって、その代表がマイルポストなんです。だから、マイルポストみたいな店をやれば成功するのではなくて、商店街の人たちの温かみや関わってきた人の頑張りが相乗効果を起こして商店街の活性化を促してきたのだと思います。

二点目。失敗した時のロスを誰が引き受けるかということですが、あまり考えたことがありません。私が気をつけていることは、小さな失敗は許容するということです。それは学生にとって勉強になるからです。でも、絶対に失敗はさせません。成功体験をつくってやりたいと考えています。それが地域との信頼につながるし、続けられる所以となります。ただ、成功ばかりしていると天狗になる学生もいるので、多くの方の支えがあって初めて達成できるということを折に触れ説明しています。当初は私も黒子に徹していましたが、そうすると学生は先生や商店街や行政の人がどういうふうに支えてくれているのかわからないようです。だから、なるべく情報を共有するためにも、最近は私も黒子

でなくて、表にも出たりしながら進めています。

三点目。リスクテーカーの養成はできないと思っていましたが、講座をきっかけにリスクテーカーが生まれるという体験をしました。ずっと静かに講座に参加されていた地元の高齢者の男性が手を挙げてくださった。今では会の最初に挨拶をされたり、まちのことを語られるようになり、私も驚いています。やはりまちづくりにはそういうドラマチックな面があるということでしょう。

それで、今回よかったのは、やはり地元の人に参加していただけたことです。熱田区のまちづくり推進室の協力があり、学区の連絡協議会の会長さんから声をかけていただいて参加者を募りました。NPOを立ち上げた時も、日比野地区にある各小学校区の連絡協議会に挨拶しました。このNPOの活動やイベント情報は、それぞれの学区の広報誌にも載せていただいています。そういうかたちで、いまは発展途上の段階ですが、そこそこうまくいっているところです。

【質問】 マイルポストの陣容、つまり人の手配とか継続性についてお尋ねします。具体的にどうかたちで人を回し、またつないでいくのですか。

【水野】 私が取えてこだわっているのは、サークルをコアにするという点です。それも、ただのサークルではなくて、「スーパーサークル」と言っていますが、そこに顧問の先生や地域連携センターの職員も関わって取り組む手法にしています。やはりサークルというのは、学生の主体性が最も発揮できる場所です。それは、ある意味で、我々のコントロールがきかないということですが…。

ゼミもそうですが、特にサークルというのは学生に波があります。だから、雰囲気に応じて動かし方を変えています。いい学生が多い時は、私は黒子に徹して、学生たちを尊重するようにしています。一方、ちょっと危なっかしいと思う時は、一緒に話し合いながら進めていきます。大学の職員から「水野先生は事業計画どおりに進めてくれない」とよく怒られますが、学生の能力に応じて動かなくてはいいかたちにはならないので、計画どおりにはいかないわけです。

それで、引き継ぎは毎年の大きな課題で、誰を店長にするか、リーダーにするかはいつもひやひやものです。ただ、人が絶えない工夫はしています。マイルポストのサークルは1年次から入ってくる学生よりも途中で入ってくる学生の方が多いです。というのは、マイルポストの場合は横から入ってこられる仕組みがあるからです。例えば、授業でまちづくり活動を知ってサークルに入ってくる。あるいは、インターンシップでマイルポストに来て、その結果マイルポストをやりたいという学生もいます。そういうふうに入者が絶えないように工夫はしています。

【質問】 行政と連携したまちづくりにおいて、水野先生は行政に対して、どのような支援や役割を期待しておられますか。率直なご意見をお聞かせください。

【水野】 学生の活動となると、やはり一般の人には抵抗感があるものです。一方、名古屋市とか瀬戸市のプロジェクトとなると格が上がります。つまり、行政の人たちと一緒に取り組むと、その活動に保証ができるわけです。そのことは、我々にとっては一番のメリットです。

学生も行政と一緒にイベントを実施できれば、非常に勉強になります。まちを動かすとはどういうことか、地域のニーズは何か、ということがそこで見えてくるわけです。また、大学としても、「名

古屋市後援」となれば、参加者にとっては一つの担保になるので、市民の方の参加状況が違ってきます。そういう意味で、行政と連携できるのは非常にありがたいことです。

それから、行政に対して期待するところですが…。とにかく行政側の担当者はころころ変わるわけですが、協定を結んで本当によかったと思うのは、それがあからきちんと引き継いでいただけることです。協定から始まって、協議会で顔の見える関係になって、それでいろいろ一緒にやっていく中で信頼関係ができて、さあこれで来年もやっていこうと言っていると、「異動になりました」と電話がかかってくる。それは何ともし難いのですが、そういうところでぽしゃらず継続できるのは、協定や委員会があるおかげだと思っています。

● 編集後記 ●

名古屋のまちづくりがはじまって400年、名古屋市は大きな変貌を遂げてきました。そしていま、さらなる飛躍をめざして、次なる100年に向けて飛び立とうとしています。

この地は、天下をとった三英傑をはじめ、多くの偉人にゆかりがあり、そうした先人たちがこの地に足跡を残してきました。いつの時代も、先を歩く人には学ぶものがあります。

そして先人たちの文化は時を超えて、いまでもまちの中で脈々と息づいています。名古屋は名古屋城の城下町として発展をとげ、そして、大都市でありながら、市内各所に歴史的な街並みを残しているまちです。

さて、これからの名古屋はどんなまちになっていくのでしょうか。歴史をいまに伝える伝統と文化は、この地に息づく人々が築きあげてきました。いま私たちは400年の歴史の中にいます。そして、なごやの未来は、このまちに集うすべての人々がつくりあげていくのです。開府400年という節目の年を、読者の皆様とともに祝いし、手を携えて名古屋の未来づくりをすすめていければと願います。

最後になりますが、お忙しい中にもかかわらず快くご執筆をお引受けいただきました執筆者の皆様、この場をお借りしまして心よりお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

賛助会員のご案内

これからのまちづくりを進めていくには、市民、学識者、企業、行政など幅広い分野の方々の協力と参加が不可欠です。財団法人名古屋都市センターでは、諸活動を通してまちづくりを支える方々のネットワークとなる賛助会員制度を設けています。趣旨にご賛同いただきまして、ご入会いただきますようお願い申し上げます。当センターの事業内容については、ホームページ (<http://www.nui.or.jp/>) をご覧下さい。

年会費 ◇個人会員…一口5,000円 ◇法人会員…一口50,000円

(期間は4月1日から翌年の3月31日までです。)

● アーバン・アドバンス No.51 ●

2010年2月発行

編集・発行 財団法人 名古屋都市センター

〒460-0023 名古屋市中区金山町一丁目1番1号

Tel: 052-678-2200 Fax: 052-678-2211

表紙デザイン フォーマットデザイン 金武 智子

51号デザイン 伊藤 悠葵 (名古屋工業大学 社会工学専攻 1年)

印刷 名港印刷株式会社